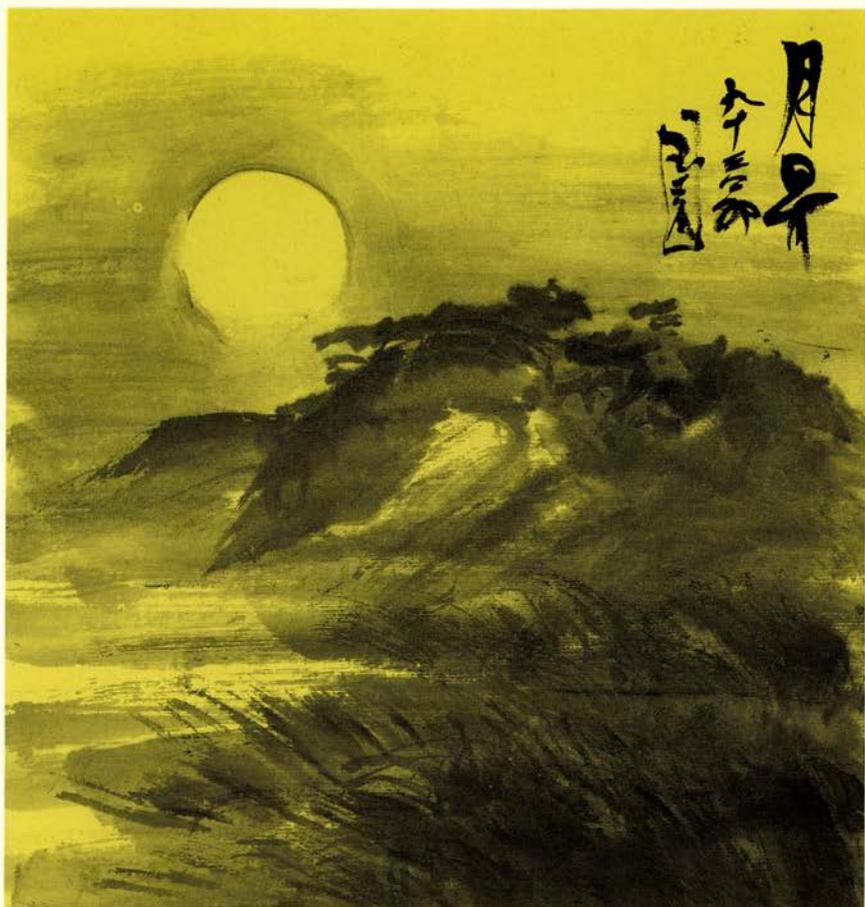


川柳塔

創刊大正十三年 通卷八三二号



日川協加盟

No. 832

九月号

第2回 川柳塔まつり

<平成8年度同人総会>

と き 10月19日(土) 午前10時から

ところ ホテル・アウリーナ大阪(なにわ会館)
(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車)

議 事 平成7年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成8年度事業計画・同予算案・役員改選・その他

<各賞表彰式>

路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の表彰式を同日午後1時から行います。

<記念句会>

各賞表彰式に続いて開会。午後4時半終了予定

| | | | |
|-----------|-----------|-------|-----|
| 兼 題 「はがき」 | 川 柳 塔 社 | 西 出 楓 | 楽 選 |
| 「漫 画」 | 川柳塔鹿野みか月 | 森 山 盛 | 桜 選 |
| 「扉」 | 竹 原 川 柳 会 | 小 島 蘭 | 幸 選 |
| 「力」 | 川柳塔みちのく | 齊 藤 | 昴 選 |
| 「啖 呵」 | 川柳ささやま社 | 遠 山 可 | 住 選 |
| 「繁 盛」 | 川柳塔社主幹 | 橘 高 薫 | 風 選 |

◎各題2句 出句締切午後1時半

会 費 1000円(記念品贈呈)

<懇親会>

と き 同日午後6時から同会場で開催

会 費 5000円 宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪
◎懇親会および宿泊は、人数に制限がありますので、
9月30日(月)までに氏名を明記して川柳塔社事務
所へハガキまたは電話でお申込みください。

主 催 川 柳 塔 社

夢の力

橘高 薫風

七月二十日、海の日、大阪は朝から雨だった。朝刊を広げると「朝日なわわ壇」、兼題「海」は私の選である。

蜃気楼しばし海上美術館 下浜 和子
地中海と記して色のない画帳

青きカメオはるかナボリの海の色 高杉 千歩
相宅 寿平

友眠る海を半生撮りつづけ 堀江 光子

今回は他に栗谷春子さん以下川柳塔の
同人が十名も入選し、ご支援を心からあ
りがたく思ふ。

稚魚放流見てこいデカイ海の夢

川原 章久
水平線過去と未来が朱に染まる

井上 照子
海には底知れぬ夢がある。

海の日、今年をはじめて国民の祝日になつたが、これが制定されたのは一九四一年（昭和16年）だった。この日は明治天皇が北海道・東北地方へ行幸になり、海路横浜港に帰着された日という。

朝食をすませてアトランタ・オリンピック「開会式」をテレビにかじりついて見る。主催国アメリカらしく音楽いっぱい光いっぱい豪華な雰囲気の中で、特に感慨を深くしたのは、ポップス歌手のセリーヌ・テイオンの迫力ある歌唱「夢の力」だった。パーキンソン病のモハメド・アリが聖火台に火を点す。動けぬアリ、手を震わせるアリに息をのみ、「夢の力」を思い直す。

路郎先生の句集「旅人」の自序には「私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれていない。せめてそれを力ぐさに、歩き続けよう」と結ばれている。

動物は眠っているとき夢を見るのだから。人間は眠っても覚めても夢を見る。夢に向つて力を尽くす。

NHKテレビを見つづけて「秀吉」や

「故宮」をたのしむ。歴史は夢の具現であり足跡でもある。

名古屋場所十四日目は横綱曙が一敗、貴乃花二敗で迎えた。そして曙は若乃花に河津掛けて負ける。お兄ちゃんがまた弟の援護射撃をした。夢が絡まつては解け、解けてはまた絡まる。

夜に入るとまさに夢の球宴の展開があつた。苦労人の山本和範選手がピンチ・ヒッターに立ち、3ラン・ホームを放つてパ・リーグへ勝利を導く。「人生意気に感ず」、お立ち台で仰木監督の起用に感謝していた。夢の力はとつともないドラマをもたらす。

テレビの虚像とはいえ終日堪能された「海の日」であつた。

八月に入りオリンピックも終りに近くヨットの女子470級の最終レースで、重・木下組がヨットでは初のメダル銀を獲得した。幾多の難関を克服しての凸凹コンビ（身長差26センチ）である。目的を持った「夢の力」がサバナの海域で花開いたのである。

銀はときに金より輝くものと感した。



座右の句

秋風に傷なきものはなかりけり

(薰風)

私の句

いつの日か一人舞台となるドラマ

黒田能子

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

| | |
|------------------------|------------|
| ■巻頭言 夢の力…………… | 橋高薰風…(1) |
| 映画一〇一年…………… | 田中正坊…(2) |
| 川柳塔(同人吟)…………… | 橋高薰風選…(4) |
| 自選集…………… | 東野大八…(42) |
| 川柳の群像 青砥可明…………… | 高杉鬼遊選…(48) |
| 古川柳 柳籠裏三篇研究(三十二丁)…………… | 齊藤 島…(50) |
| 水煙抄…………… | 鈴木公弘…(79) |
| 秀句鑑賞「同人吟」…………… | 橋高薰風…(89) |
| 大空のころろ(68)…………… | |

映画一〇一年

田中正坊

一九九五年は映画誕生一〇〇年として、世界的に各種の行事が行われた。これは一八九五年十二月二十八日、フランスのパリで、リュミエール兄弟が開発したシネマトグラフが公開されて大評判となった時を「映画発明の日」とする説にもとづくものである。したがって今年、映画誕生一〇一年ということになる。

ところで映画は、戦後の日本においては、数少ない娯楽の一つであった。映画人口は昭和二十七年ごろから急上昇し、昭和三十三年(一九五八)、一億二、〇〇〇万人を越えてピークに達した。日本人一人が一年間に映画を一〇本見ていた計算となる。映画は産業として自動車産業よりも潤い、映画館の数も全国で七、〇〇〇館、そして休日はこの映画館も満員であった。

それから四十年経った今、映画人口は一分の一の約一億人に減り、映画館は二、〇〇〇館以下となっている。戦前の昭和初年から映画に親しみ、特に戦後はむさばるようにして内外の映画を鑑賞した私にとっては、今昔の感がある。その原因については、他にさま

渺湖抄……………小出智子選…(76)
茴香の花……………西出楓楽選…(80)

「氣まずい」……………西村早苗選…(82)
一路集「みがく」……………松本今日子選…(82)

「夜」……………中山雅城選…(83)
初歩教室「困る」……………吐田公一…(84)

路郎賞・川柳塔賞中間発表〈最終回〉……………(86)
各地柳壇(佳句地十選／赤川菊野)……………(90)

柳界展望……………(103)
八月本社句会……………(104)

九月各地句会案内……………(109)
■編集後記……………(110)

座右の句

野の菊で飾る心の駅がある
私の句

コップ酒二杯で天下弄ぶ

飯田 昇

(雀踊子)

さまざまな娯楽が生れたことがあげられるが、特にテレビの普及が決定的な役割を果たしたことは確かである。

しかし、これをもって映画が衰退し、将来性を失ったとは思わない。日本や欧米諸国においては、映画は娯楽の王座から転落、かつて多くの名画を提供したフランス映画はふるわず、アメリカも以前のように超大作を制作しなくなった。このような映画状況の中で、アジア映画の台頭がいちじるしい。特に中国、台湾、香港のいわゆる中国語圏映画が質量ともにすぐれ、韓国、インド、タイ、ベトナム、モンゴルも無視できない。

さらに、映画の上映形式の多様化も見えておかねばならない。映画会社が制作した映画は系列の常設映画館で上映されるが、独立プロや自主制作の映画は、独自の観客動員組織によつて文化ホールや市民会館等で上映される。また、豊中市の「シネメッセとよなか」のように各地に自治体が後援する映画愛好家団体があり、映画祭を開いて内外の名作を提供している。衛星放送、ハイビジョンを含む各テレビでは、年間かなりの本数の新旧の映画を放映しており、また、多くの映画がビデオテープとして販売またはリースされている。これらを総合すると、映画人口は量的に少なくはなく、質的に水準の高い作品も制作されており、映画一〇一年の未来は暗くない。



橘 高 薫 風 選

弘前市 一 戸 ツ ネ

写楽の眉動いていますひとり酒

曼珠沙華ははのなみだの吹き溜まり

泣きながら嘘と真が砕けてる

花ばさみ露地の菊にも弥陀を視る

鱗一枚はがせば涙溢れそう

葬の列揺れば海も揺れてくる

米子市 政 岡 日 枝 子

母乳呑むまるで太鼓を打つように

抱くほどに重い寝顔になつていく

時刻表 児の泣き声で発車する

乳房から伝わる母の海の音

羅漢にも道化にも似て不思議なり

葱坊主 弾ける時はきつと夜明け

堺市 桑 原 道 夫

観念と遊んでいると子が生まれ

エスカレーター僕のとなりのペンギン君

一人でする花火ぼとぼと雫せり

蹠を愛しと思う旅半ば

雪溪の写真褪せたる喫茶店

正論を吐きつくしたる蟬の死や

竹原市 小 島 蘭 幸

マドンナと師とてつちりの灯にとける

酒屋は米 米屋は酒を売り出した

誰もいなくて 猫がぞろぞろ出て来たよ

エキストラ演技をしてはいけません

ネクタイを締めるとひまわりが笑う

父の頑固を可愛いというひとのあり

吹田市 栗谷春子

紫陽花の四枚の弁の静かさや
真ん中に噴水があり子の眠り

梅雨晴れ間われこそ稀有の働き手

ぬけぬけと今日も世間を見て歩き

年ふえて世の中ますます好きになり

アンパンのこぼれしケシも口に入れ

熊本市 永田俊子

雨吸ってあじさい思いをつのらせる

百の耳もつあじさいがかくす嘘

あじさいの葉かげの闇に時をため

あじさいのたくらみ明日の色えらぶ

あじさいが星の子を生む露しずく

かげり初めたあじさいおどろの鬼女になる

黒石市 相馬一花

勲章を一個はほしいモーニング

お許しを得て糸屑を取ってやり

微積分どころか加減まで忘れ

サロンパスを見て怖気付くシャネル

考える葦には見えぬ太公望

飲み過ぎに注意と書いてないポトル

鳥取県 上田俊路

山頂で神の息吹きに触れてくる

みなもとの石は苔むし揺るがない

自我捨ててからの歩調が軽くなる

充電はすんだがお呼びまだ来ない

礼節を知る明治男の生き残り

風向きに明日をまかせている平和

島根県 小砂白汀

気の抜けたビールも飲んでいる妥協

叱られる役も居らねば収まらぬ

胃袋を信じ硬軟流しこみ

超特価 超々特価店をとじ

空蟬のころがる土手よ夏が逝く

むらさきの湖から秋が這いあがり

富山市 舟渡杏花

渡らなかつた橋 悔んでも悔んでも

目線やや上げると好きな瞳と出合う

額田王のホクロそねんでみたことも

書き足りぬままに切手を二枚貼る

寺めぐりいまも迷子でいるわたし

胸奥に太宰が棲んでから久し

松原市 玉置重人

ドル箱を積んでいるのは主婦らしい

警察も消防も暇がよいのです

補聴器をはずし私をとりもどす

大団円ポックリ寺の鉦の音

ピアスした男を信じたくはない

暑うても降っても休む万歩計

和歌山市 川上大輪

父逝つてからの我が家が広すぎる(故義父十郎を偲ぶ二句)

俱会一処 十郎の座もちゃんとなり

座禅組みながらふつつふつ浦く謀叛

自画自賛して冷や汗を溜めている

空白の日は脳ミソを干してます

病んでいる地球それでも回っている

鳥取県 土橋 螢

孟蘭盆が過ぎて燕は何処行った

曼珠沙華 松茸採りに行ってみる

ご先祖に申しわけない肉を食う

待宵のころを盗む女がくる

八月十五日 一分間の黙祷す

人間魚雷回天の盆供養

島根県 堀江正朗

背を見せぬ白杖 男一匹だ

闇に生き欲の一つも摺めない

八十路でも光に狂う闇の道

窓開けて雨の激しさ心打つ

まさかには受けて立つ意気 戦盲も

生きて泣く辛さは腹の底が知る

唐津市 田口虹汀

今昔もイロハかるたは同じ味

二人して火宅の門は出たけれど

五里霧中だけど男は命賭け

御来光今日は静かな大銀杏

新茶一杯 小城羊羹に礼申す

唐津市 浜本ちよ

しゃれた娘のエプロンのひも縦結び

さわやかな娘にこそミニが生きいきと

痩せる話ポリポリ食べて聞く女

素晴らしい秋を広げる花道展

ドラマでは悪人氣前良く負ける

香川県 工藤吟笑

野良犬になれぬ毛並みでオリの中

産毛まだあるが人並み口をきき

温もりが心の奥で棲む夫婦

呑みもせず打たず残らず九十年

蔭だけのままで人生黄昏れる

香川県 木村あきら

ライバルの辞書に手垢がついている

脇道の花が奇麗に見えてくる

老兵は去らず口だけまだ元気

鍋焦げてまだやめそうにない話

居酒屋へガソリン一合入れにゆく

松山市 白石春嶺

余命表まだ描き足らぬペンを持つ

しみの無い命で神に還そうよ

事ここに至り本意でない口火

原点にかえればやさしい風に遭う

夫婦別姓 比翼の鳥が風を切る

松山市 宮尾みのり

プロの腕 簡単そうに出来上がる

完全燃焼いいえ微力のありつたけ

いい人にされて肩の荷重くなる

嫁の座も妻の座までも捨てたい日

一卷の終りを延ばす定年後

今治市 越智一水

歳とればとるほど戦と国恨む

私の財産 人との出合いです

水打ってまた水打って来ない客

世のさわぎ夜空見ることさえ忘れ

さけとろり飲みっぷりまで好きになり(路郎忌)

今治市 矢野佳雲

独居老人いずれ家内か私か

水清ければ住めぬ魚のように住む

魔女としてなれば会ってもいいと言う

頭に血がのぼりまっすぐ蛇進む

決断の美学彼女にさようなら

西条市 片上明水

職人の指十本に順がある

日帰りの切符でめどがついた金

後ろから観れば善人ばかりなり

人垣の陰で異動の噂聞く

下積み声は途中で風が消す

高知市 北川竹萌

一合で足るぐっすりの床につく

八十半ば明日の予定は立ててある

味噌汁とお茶は故郷の良い水で

洋芙蓉白とピンクが朝を呼ぶ

露のまま千両茄子の初千切り

高知県 赤川菊野

一豊の妻の話を嫁ぐ娘へ

パスポート パールバックが呼んでいる

やさしさにハチキンころりだまされる

石女が産声聞いた夢でさめ

わき役も主役もこなし独りの灯

鳥取市 両川洋々

烙印が疼く背中だ見せられぬ

男と女のドラマはきつと神が書く

一期一会のあいつは叛くかも知れぬ

証人席へ着くと健忘症になる

恋だもの手傷の数恐れまい

鳥取市 春木圭一郎

言葉より形が似合うこの気持ち
空あおぎ心に余裕取り戻す

師の言葉両手で掬いきりかえす
生きのよい言葉と出会う会が好き
つまりいてころんで夢が近づいた

鳥取市 武田帆雀

連結器ここで切れたら北へ向く

脳味噌も限界 横に根を張ろう
水甕の側で寵愛されている
三交替 夜店の烏賊でタツチする
一目を置いてるチャンスには飲もう

鳥取市 美田旋風

珍客の時計はいつも進まない
終点が近付きやっつ椅子が空く
青春に戻る会には参加する
野心家がやたら笑顔を振り回す
不況風なんかくじけぬ鯉のぼり

倉吉市 米田幸子

地獄の里もどっこい金がものを言い
洗脳をされて野鳥に戻せない
威張ってる父が矢張り魅力です
真剣を持つと本気になるらしい
美しい他人の花に水をやる

倉吉市 野口節子

じげ起こし突然お湯が吹き出した
他所の児を叱る温さを持つている
一日一日 借りを返して行くつもり
威張らせておこう御機嫌さんならば
まだすこし心の乱れリング剥く

米子市 石垣花子

目の奥で女は青い火を燃やす
掘って見ようぬるま湯くらい湧くだろう
あつさりと許しながらも心冷え
あつさりと他人になれぬから哀し
うずくものありあつさりと割り切れぬ

米子市 林荒介

梅雨しとど愁いがつのる桶の水
ふる里のしろつめ草に会いに行く
友達が居るキーポトルの指紋
木の情け石の情けのある家並み
山が病んでいる氷河期の雪崩

米子市 林瑞枝

星の夜は青いトマトも夢を見る
枝に吊るいろはがるたの拾い読み
前向きの眉間を走る稲光
羽衣のふわりふわりと築地松
演技でもいい孝行はしておこう

米子市 青戸田鶴

一冊の本との出合い考える
旬の話 十日もたてば色褪せる
D51の勇姿カメラにおさめよう
姑と居た四十年をふりかえる
あとといく日二人で縄がなえるのか

米子市 白根ふみ

遠ざかる忌にち青梅実るころ
半夏生あぶないものを遠ざける
七月の木陰をひろう蝶に成る
夕闇のほのかに触れる待宵ぐさ
天災も人災もあり梅雨の明け

米子市 茂理高代

馴れすぎて人の恐さを忘れていた
頼られて知恵のない舟沈みそう
先に咲く花から散って論される
差上げて貰って友のある限り
蘭の香に似合うナースの笑顔に合う

米子市 野坂なみ

二重丸で未だいいんだよランドセル
ハンチングどこの雲まで行ったやら(七夫二十五回忌)
幾歳月こころの穴は埋めきれぬ
朱を入れてやっと二人で並ばれた
穴場さがしてもう旅人になっている

鳥取県 乾 隆 風

贅沢は言うまい飯がうまいから
傾いた家をじろじろ見なさんな
真実が胸の中から離れない
立て板に水には負けた方がよい
イロハニホ旅の時計は進むなり

鳥取県 谷口次男

ガンバレとエールを送るちぎれ雲
力まずに相手の言葉胃に収め
ワープロはカタカタ虫か事典引く
一服し詩人氣取りで空仰ぐ
同僚が敵にも見える会議かな

鳥取県 林 露 杖

紫陽花が一つ傾き雨上がる
留守番に一合の酒舐めて昼
湯に浸り老醜の手を灯に翳す
ターザン観て軽く雄叫び上げて寝る
面倒なことは考えないでおく

鳥取県 土橋睦子

怨みつらみ相身互いと慈しむ
たこ焼きを土産に持たせ花火見に
脳味噌が軽くなったら大欠伸
夕涼みばんばり揺れる恋ゆれる
紫陽花の浴衣の女を待っていた

鳥取県 津村 八重子

力では及ばぬ分を真心に

花の詩きけばストレス消えて行く

あの宿の思い出恋し露天風呂

果実酒に今日も健康感謝する

わくわくと旅のカバンを枕辺に

鳥取県 岩崎 みさ江

デゴイチを見に新幹線の親子連れ

いじめっこ裏を返せば淋しがり

良心はレモンのような味がする

夕立にこころの迷いふっ切れる

くるくると回る日傘の顔みたや

鳥取県 土橋 はるお

ゆっくりと尻尾に滲みるまで飲む

孫一人だけで賑わう幸せだ

仏さま拜んで汗をかきに出る

ピッケルが神経痛を病んでいる

いやらしい女の魚売りが来る

鳥取県 さえき や え

百まで生きて母の笑顔が美しい

思い出を語れば淋し花の駅

反発も妥協もいらぬ年となり

ありがたいことにまだまだ笑えます

墓参りして落ち着きをとりもどす

鳥取県 太田 幸枝

金網に乗った鱗ににらまれる

入院で浮世の裏がよく見える

田植唄 今の苗にも聞かせたい

歩くのが苦手な母がお遍路に

悪口を言いふらすのも惚け防止

松江府 舟木 与根一

金婚で紙風船もついで弾み

物干しも婦唱夫随と言っている

大正という竹光を振り回す

裸銭ちやらちやらお嫁まだ居ない

柳土手 亡母そっくりの人に会う

出雲市 尼 れいじ

みの虫に九月の風は温過ぎる

一所懸命生きてる証明蜘蛛の糸

蟻が書くシナリオセッセッセッセ

疑似餌にはもうかからない魚の群れ

落ちこんだ日は蛍火もoffになる

出雲市 板垣 草丘

戦時ならよろい戸通過災害地

斐伊川の花火まつりが誕生日

よそ者が真似るときつい出雲弁

過労死と平均寿命の日程に

新築は同姓同名よその子だ

出雲市 吉岡 きみえ

自画像に描き足すものに皺の数

いつかきつと大樹になろう青い実よ

どうあろうと今のいのちへくすりのむ

今にして母がしたこと言ったこと

私をいつも笑ってる影法師

出雲市 小玉 満江

鯉の町雨に泣いてる紙人形

長過ぎた恋よ壁には夢二の絵

うとうととすれば電話に起こされる

強がりとは言うまい一人になるばかり

淋しさを分け合う猫はもう居ない

出雲市 富田 蘭水

夢にみた初孫嫁がくれるという

善悪を背負う札束じつとみる

愚妻だがないとどうも落着かぬ

二人してきく符にはかなわない

ワイキキに泳ぐ幸せ十字切る

出雲市 竹治 ちかし

正確な時刻は父の腕時計

人一人死なせ改正案出来る

時々心も除湿して暮らす

個性かも知れぬ器の彩と影

喝采は胸に親父を守り抜く

出雲市 小白金 房子

灯台を紅染めて陽が沈む(七〇周年に思ふ)

句碑仰ぐ亡師を偲ぶ波の音

花づくり花の匂いを抱いて寝る

ふる里の山が迎える風の盆

一坪の土に親しみ種を蒔く

出雲市 伊藤 寿美

過ぎ去ろうとしない過去ありきのこ雲

おねしょしませんようにと孫の笹が揺れ

一握の砂がこぼれていく別れ

失敗を重ねた老父の銀時計

たかがダンボールされどプライベート

島根県 堀江 芳子

エラーばかり続いていても夫婦箸

走れたら胸晴れそうな俄雨

崩れそうな体引きずりつつ暮れた

痛みなど見せずに笑います鏡

会いたくて受話器を固く握りしめ

島根県 松本文子

したたかに生きる明治と根くらべ

お月さま 孫が約束してくれた

両頬を打たれ負けてはおられない

雑草のみどりと元氣分けあって

空しくて美しかりき古代蓮

島根県 佐々木 鳳 笙

撞き終えて老坊守の日課閉ず
起きてよし寝てよし妻のいる限り

表情もなく二か月を無菌室（実弟入院）

伝説のおろちの川にして濁流

梵鐘の余韻の中に亡父を聞く

岡山市 井上 柳五郎

党名も理念まで変えどこへ行く

坂見上げはずむ呼吸になる弱気

好物は賞味期間を気にしない

限りあるいのち思わずまた友が

緑陰のくつきり初夏 明と暗

岡山市 時末 一 灯

きつと来る気がしてならぬ梅雨晴れ間

黒白の間の色で昇りつめ

隊列をそれで声色聞きわけ

頑張れのほかに言葉はないものか

ていねいな天気予報にいたぶられ

倉敷市 田 辺 灸 六

再製紙ちよつと粗末に扱われ

日焼け皺 母は島から出たがらぬ

哀しみは過去へ流して爪を剪る

母星子星 無口のままて向い合い

らつきよつた花で砂丘の活性化

倉敷市 小 野 克 枝

字幕には写らぬ汗の物語

許し続けた頑固この頃よく笑う

大事には触れず夫婦は風に乗る

愛想よく笑って落ちた花の首

泣きそうになると厨に亡母が佇つ

ラジウムの湯で心まで丸うなり

亡き母の笑顔懐かし三十三回忌

昨日と同じ日記チョンチョンとは佗し

古老から廊下トンビに格が落ち

老大の訓示は事故のことばかり

岡山市 荻 野 鮫 虎 狼

善人と褒めて相手にしてくれず

善光寺牽かれる牛はもういない

ポケベルの話笑った声であり

天井で消えた噂は信じよう

コップ酒 男の匂いしみ出し

岡山県 小 林 妻 子

野心家の握手は堅く握らない

川濁る鯰 我慢の目をつむる

方舟に穴あけてまで男酔い

巨大迷路を横切る青いプチトマト

身の程を知らぬ飯面のかぶりぐせ

岡山県 矢内 寿恵子

六月の雨から深くなる哀よ

京の糸たぐると亡母につき当る

無から出る人生 はだしの歌がある

生き生きて夢の数だけ拭く涙

大正のロマン夢二も我が春も

呉市 榎田 英詩

夕暮れて鉄持つ指を一本ずつ放す

写経中の妻に耳搔き借り損ね

ポリウムを下げて悲しい唄うたう

自由行動たこやきの順を待ち

露天風呂 腕にロッカーの鍵をつけ

竹原市 岩本 笑子

仮の世の仮の姿の揚羽蝶

母となる波は神祕のエコロジ

入道雲も私もひとり夏気分

夏の家 子供の数が少なすぎ

土曜日だったと今は二人きり

竹原市 森井 菁居

旅慣れた二人に遠くないトルコ(二女ハネムーン)

分担に徹し新婚仲が良し

脱サラのプランを嗤うポーナス期

順風へ畏があるのをつい忘れ

下宿屋を含めふるさと二つ持つ

廿日市 林野 甦光

海へ向く先輩の墓うれしそう

ジーパンで出勤バイト勇ましい

角張って客待つ顔の分譲地

座右の銘きっちり揃え昼寝する

豆の味煮詰めて老舗生き残り

広島県 藤解 静風

タレントの名がでてこない納涼台

原発も基地も貧しいとこ狙う

日本人がまともに生きていた戦後

連綿とのこる日本的談合

雨のプランコ 一会の風を待っている

宇部市 平田 実男

蓮の花だんだん亡母の顔になる

肩車孫の重みが嬉しゆうて

八起き目もやっぱり妻の手を借りる

建て前がまだ優勢な安楽死

紳士録 仮面外せぬ人も載り

下関市 石川 侃流洞

仲裁の玉虫色が気に入らぬ

捨て石へままと目先狂わされ

孤独ひしひし七人の敵欠けて行く

投網に右往左往は雑魚ばかり

兎小屋だけど一坪庭の四季

和歌山市 牛尾 緑 良

癌告知そこから命燃え上がる

甲羅干ししたいとベッドでは思う

朱から紫 生き抜いてきた衣がえ

銀河鉄道それぞれが持つ停車場

命まだ捨てきれないでいる埴輪

和歌山市 西山 幸

分岐点 夏には夏の花が咲く

わが影をためつすがめつ呼び戻す

人生を甘く見過ぎた化粧水

勇気など出るはずのない猷立よ

種のある西瓜この世はままならず

和歌山市 堀端 三男

自己主張あなた一人でないんだよ

先攻で先手取ること考える

体力は疑問すんなり伸びた脚

哀しみのわかる女と酌み交わす

五重受けあの世の席を予約する

和歌山市 垂井 千寿子

冷房中古代と語る博物館

人生の余白の少なさに追われ

賑やかな朝三代の靴の乱

生活の響きも消され梅雨の音

送り火や思い出いくつ流れゆく

和歌山市 山田 高夫

人間万歳まだ嬰樂として卒寿

残されたページを埋める懺悔録

当分は休めと医者は軽く言う

これしきのことにと耐える酒をつぐ

他人から慰められるほど落ち目

和歌山市 池永 正雄

欠けながら夫婦茶碗はいつまでも

雨ニモマケズ 本屋漁りとしやれようか

縄文も弥生もほんの昨日かも

素うどんはちと言ひ難い昼の店

外人の方が良く知る佗びと寂

和歌山市 細川 稚代

老鶯が哀しく啼いて根来坂(故 西口忠雄さん)

川下に住んでまあるい風あたり

七色の傘干してある三世代

酔うほどに女性哀史がまだつづく

親友病んで片翼飛行するわたし

和歌山市 桜井 千秀

放つとけぬ氣質見込んで来た話

身軽さがまだある戦続けよう

くどいのは嫌い自分を見てるよ

無視したいひとが崩して来たリズム

地団駄の数だけ増えた顔の皺

和歌山市 福本英子

美しく咲いて雑草引抜かれ
稲光 夏風邪のわけ聞きそびれ
騰本をとりて覚悟がついたらし
青梅を足して糠漬亡母の味
棲みついた鬼出て行かぬまま梅雨に

和歌山市 木本朱夏

野薊の棘の青さに触れてより
水滴がポタリポタリと夜の刑
蛇になる予感に鏡伏せておく
ひまわりがまあるく笑うティータイム
身のほどを弁えている靴の位置

和歌山市 田中輝子

和解成立それから以後の白い闇
ドロップを時々なめて無我の境
小羊が渡ろうとして光る海
一頁をもらう朝顔が咲いた
飾り釦も雨の止むのを待っていた

和歌山市 山口三千子

輸血拒否出来 安楽死許されず
女には魔の風が吹く刻がある
大人にもいじめ宗教からみだす
娘の方が伴侶上手にリードする
度忘れが多く二階へ上り下り

和歌山市 川上富湖

ただ一度背負った重さ父のもの(父十郎を憶んで三句)
予定表にまだまだ生きると書いてある
去年とは違う父の日暮れてゆく
触れられて線画は脈を打ち始め
二人三脚 鉄の鎖はいらんかえ

海南市 三宅保州

エベレストだけが山ではないけれど
いじめなどなかった頃の紙芝居
親の前ではお子様と呼ぶ教師
天寿全う 本人もそう思うのか
飲むときの一升瓶は重くない

神戸市 山口美穂

一寸だけしあわせ犬に甘えられ
秋立つ日 残暑に堪える老母の息
今日と変らぬ明日でと願う老母の杖
同窓会 亡師のもの真似で開く宴
愚痴言える間は元気梅雨明ける

尼崎市 春城 武庫坊

戎衣脱げるあの八月は忘れない
散る花が静かな愛を撒いている
無口な人と炎暑の街を歩いている
振り向くと妻より外に誰も来ぬ
修羅越えた男優しさ秘めている

尼崎市 春城年代

この闇はあの世に続くかも知れぬ
母を亡くして夫の哲学ゆるぎだす

今にして母のことばの豊かなり

鸚鵡がえしに愛しているといえますか

闇深く梔子の白まぼろしに

尼崎市 田中 薫

ゆるやかに哀を零せり午後の睡蓮

補陀落へ往く船なれば耳積まん

髭のびて夢殿に棲むきりぎりす

北極星ゆるがずポロポロ歯が欠ける

ネムの花もとより淡きこの世の灯

西宮市 門谷 たず子

仮の世や傘の広さに身を寄せて

パレットにまだ炎の彩が消え残る

父の樹に翅を休める枝がある

医者も人の子 悩みの深さ思いやる

自由とは淋しきものよ灯を消して

西宮市 奥田 みつ子

日傘クルクル今日は太陽ひとり占め

目移りの果てに選んだ毒の花

驟雨去る 他人の視線流し去る

うどん打つ 思い上がりを打つごとく

ごめんなさい素直に言えぬ珊瑚婚

西宮市 秋元 てる

叱咤激励のみが任務と担当医

「無理するな」「寝てばかり駄目」次女長女

雑踏にたたずむ母の古日傘

似合うよと貴方が言った藍浴衣

何かしてくれそな孫の面構え

西宮市 西口 いわゑ

覚えたての字ではあちゃんに招待状

わたくしに優る上戸のいてたのし

女三人ちよつびり悪を企てる

青リンゴ達の未来はどんな色

運という酷な裁きに押しきられ

西宮市 林 はつ絵

齒科の椅子いのちの一部あつと抜く

難聴のわたし阿呆の像となる

ジャンケンで負けて代表者にされる

不服だが足に合うから買った靴

気の合った老友と知恵の輪解いている

西宮市 亀岡 哲子

パン屑を日毎こぼして来て夫婦

厨房のシェフの手抜きを見てしまう

エプロンも長靴も白 花を売る

山迫り来て梅雨晴れの午前五時

パツと笑って笑って散った芥子の花

西宮市 山本義子

暑いからお好み焼きを食べにいき

あの頃はと螢火想うまちぐらし

やましいことが無いから声が大きいの

老化予防こだわり少しあるもよし

大往生 夢でしようか欲ですか

西宮市 久保まさお

夏草はいくさを知らず生い茂る

蛙啼く 梅雨のはれ間のいのち干せ

齡重ねまた巡り来る黒い夏

梅雨明けてペンキまぶしき青蛙

若者に伍して跳びたや夏ハードル

西宮市 池田善守

定年後 後悔してまず仕事好き

六十路でも好きと言われりや本気出し

金魚さえ死ぬよな水で暮らしてる

いい顔でいい声してる今朝の妻

年金はオヤジの威厳維持出来ず

西宮市 刈田泰司

思ひ出は波打際に打ち寄せる

思ひ出へ胸のアルバム ネガのまま

人と逢い人と別れて年を積む

夢と夢つなぎ合わせて生きてる

夢だけを残して女の焼く手紙

芦屋市 黒田能子

小さな手の温もり明日の命なり

テールランプ消えて一人の闇となる

花菖蒲 天地異変のないように

羽織い雨の止むのを待っている

朱竹の額を何年も掛けたまま

宝塚市 吉田笑女

つげ口をした姉ちゃんも叱られる

孫と指折って数える祖母の年

気のリせぬ話半分聞いて置く

一言をひかえ明るい茶の間の灯

長男の車で詣る盆の墓

宝塚市 丸山よし津

それは見事な逆転だった幕を引く

塾帰り電車の中で袋菓子

カラフルなTシャツ形良い乳房

当たらない天気予報を聞いて出る

笑えない喜劇を見せる百貨店

宝塚市 上田佳秋

激辛のカレーの汗よ夏やよし

信号が黄色になった人間ドック

涙腺が緩み放しの夜のしじま

カマキリの雄を羨む孤独感

走馬灯 亡母の笑顔とハッタイ粉

宝塚市 嵯峨根 保子

起き伏しのふとんの嵩の小さきこと

嫁姑ときどき不整脈がうつ

灯台の道を辿って父と会う

身ごもりし猫だいてる雨の午後

空洞にこだまする声お父さん

宝塚市 中田 純次

酒少しお造り少しこれが好き

ほろ酔いに小唄をうたう粋が好き

蕾から花咲く姿見るが好き

寝たきりも明治の女気ばる母

百貨店札束乱舞売場外

伊丹市 山崎 君子

昼寝する梅雨の晴間を惜しみつつ

風しずかカーテンゆるり十三夜

草萌える里に花嫁牛連れて

お茶席にミニスカートの膝小僧

赤トンボ豊作つげる風にのる

川西市 松本 ただし

片想いばかりで指をしゃぶる鬼

棟に居て動かぬカラスはボスだろう

溪流を走り続ける若い水

上げ底の中流だから荷が重い

人鼓譜七里の渡し越えたとこ

加古川市 吐田 公一

風鈴と簾と母と猫に風

峠越す暑さへ妻もやや太り

五十回忌親父の顔もおぼろなり

親の齢越しても越せぬひととなり

折込みが味覚の秋の尻叩く

大阪市 西出 楓楽

真夏日へ夫の小言直下型

ただし書きいっばいつけて生かされる

茅の輪くぐりを二男の嫁になる人と

ふところが深くて妥協ばかりする

どうしよう老母がだんだん重くなる

大阪市 川端 一步

クジ嫌い震災クジは買うてくる

乱雑な机があつてまだ呆けぬ

満月が明日の試合を予想する

ボクがいる家族しんぶん創刊号

孫によい顔をして叱られる妻

大阪市 津守 柳伸

陽の恵み天のめぐみへバラ匂う

しまい風呂 今日をねぎらう丸い月

夜更かしに朝寝に慣れてまだ六十路

税サ込み右往左往の縄電車

働ける幸へ盛夏のレジャー熱

大阪市 本間 満津子

八十路なお照る日曇る日旅続く
合理主義 私に欠けているロマン
一人では弱いが一人なら強い
軌道修正 微かな灯見え始め
はや花芽さざんか酷暑覚悟して

大阪市 町田 達子

墓参すませて梅雨の晴間がすがすがし
お色気も紫似合う人といふ
帰路の参道 闇に山頭火をふつと
国際平和祈念 in O S A K A に参加する
禅定交響 国境のない音楽に触れ

大阪市 神夏磯 典子

外野には姑さんがでんと居る
人間を狙う雑菌そこらじゅう
母の手を憶う思案にくれるとき
十字路で思案している雀の子
この友もきれいな笑みでりハビリ中

大阪市 井上 白峰

しあわせのルーツ辿れば父母の愛
リリーフに立った女房の貯金箱
高すぎた椅子に馴染まぬ尾髭骨
切り捨てた尻尾謀叛の旗を振る
明日のため静かに降りる夜のとばり

大阪市 板東 倫子

枯れてなお嫉妬している女郎花
宇野千代が桜吹雪の精となる
茜雲 わが原罪を映し出す
空文化された家訓がある仏間
せい肉を減価償却する余生

大阪市 榎本 露児

悪役は自分の顔に惚れている
運河濁ってパチンコの花浮いている
車椅子 犬の目線になってくる
絵本から飛び出た狐悪戯する
女房のおはぎに亡母の味がある

大阪市 藤田 頂留子

わた雲へ秋の使者めく赤とんぼ
雑音にされて歯ざしりする本音
CMにめだちたがりやがくすぐられ
聞き違い泣いたカラスがもう笑い
祭りの灯輪投げ いか焼き缶ジュース

大阪市 大河 未佐子

この夢もはじける頃ねシャボン玉
闇の道 螢火あてに抜けてゆく
雨だれよ おまえも泣いているのかい
いただいた優しさ 小出しして生きる
この先もまた歌に生き恋に生き

大阪市 小糸昭子

少しだけ欲しい天国への手摺り
仲好しごっこしていると鬼が笑い出す
繋がれた猿と思うていた若さ
くじ運は煙となつて消えて行き
何となく無口で分ける薬包紙

大阪市 玉置英子

勇気要る出足に弾みつける声
睦まじく梅を染めゆく紫蘇の紅
杉植えてマルチメディアの外にいる
伯母死んで三年味噌はもうこない
一通り飲んでスーパードライ生

大阪市 川原章久

寂しくも独り乗る日の縄電車
燃えたくも男独身火種なし
お茶碗のヒビが暗示の夫婦仲
百歳のいい顔今日もテレビから
三猿の教え忘れた嫁姑

堺市 板尾岳人

思い出を捨ててに祭りの真ん中に
セクシーな風に吹かれて夏の中
夏祭り太平洋は静かなり
わたくしの柩の中も夏祭り
人恋し人にもまれて夏祭り

堺市 中野櫂子

梅千の顔治まって返事する
外来の無口生きたい未練皆同じ
心の気儘許していますこの暑さ
三日ほど精一ばいに夏の花
鱧に西瓜 粹にたのしむ夏の宵

堺市 山本半銭

独りではなかつた遺影こつち向く
見詰め直し考え直し細い道
百姓の誇りが疼くあわだち草
宮島の夜のしじまに潮満ちる
母恋いの句碑並んでる耕三寺

高石市 浅野房子

手鞠唄 遠い彼方に母います
独身と思つた人にそんな過去
決心をつけるでもなくゆれている
笑えない事勿れ主義わたしにも
大勢の中の一人に甘んじる

豊中市 安藤寿美子

緑蔭に老人と兎と犬と猫
考える事は止めとく宿浴衣
時々老人じゃぞよと言つておく
美しい言葉をみんな忘れたり
古浴衣私のおしめにするのです

入眠のメニュー　せせらぎ波の音
豊中市　田中正坊

手許から離さぬ亡父のウォルサム
ちちははもはらからもなし白い道

町外れ六角井戸がひそとあり（平戸島）
和蘭陀を運河から見るクルーザー（ハウステンボス）

豊中市　井上直次

雨宿り新刊本の香りよし

消えそうなおのれの影を叱りつけ

ライバルの影が近づく息遣い

三歳児ママの好みの髪かたち

好きなだけやらしておやりもう飽きる

豊中市　吉田あずき

母の忌へ紫陽花一つ咲き残る

梅雨晴間　陽はもうすでに北にあり

蝸牛見つけて青葉やわらかし

干し物へ序列をつけて北叟笑む

神戸復興　地は地獄絵のまま残る

豊中市　稲葉眞郎

夏の朝　小鳥が起こす風流さ

尊厳死　自然葬とて消えるのみ

注射するナースの指の反り具合

母の膝　猫もおんなじ夢を見る

メモしたら安心をしてまた忘れ

和と三盆ふくんで故郷しのんでる
池田市　岡本吉太郎

儲ければ甘い夢見るうちの人
飽食にて有事ある事忘れ果て

目玉焼き片目でよいと言う老いに
毒舌が過ぎチャンネルを回される

池田市　金崎峰子

暑いのと年の所為のと怠けおり

借り物のように着心地悪い服

ポーナスはよそさまのこと老い二人

息抜きと緊張の夜主人留守

何気なく言ったことばで深い傷

箕面市　椎江清芳

金婚の旅便り書く友も減り

寺の子は寺継ぐための高野山

頼まれて入る保険に妻ともめ

釣って来た鮎を大事に妻は焼き

鳴り止まぬ拍手楽日の幕が降り

箕面市　岩津ようじ

老いもよし宿題はなしノルマなし

瘦身に弱冷車なお効きすぎる

産婦人科以外全科の世話になる

仲のよいふりをしているフルムーン

大宇宙のまたたく間を生き長寿

透き通る自然北欧の小さな町

車よりヨットの多き水の国

あの人を悪人にして仲直り

丸木橋とんぼはすいと渡るなり

吊橋は見るもの渡るものでなし

吹田市 瀬戸 まさよ

背の高さ欲しいサミット噫日本

眩しさは乙女の夏とすれ違ふ

志野織部泣きます味のなない料理

雑学で説得力のある社長

プロの主婦よく働いてよく眠る

吹田市 古川 喜美子

雷鳴に今にも破れそうな空

大好きな人と冬眠してみたい

私だつて好きなお方の二三人

好きなのは春陽に丸い壺の肩

地蔵さんの肩に乗れない雨蛙

茨木市 堀 良江

近づけばまた遠くなる夢一つ

潮さいに目覚めて旅の宿と知る

ポーカークフェイスもしや大物かもしれぬ

下積みの苦勞見せない名コンビ

あの二人また戻つて元靴

十二歳好きも嫌いも恋心

老妻に新妻の影まだ重ね

今もふと私の中に父の影

悪い気はしないが派手な服を出し

家中をお湯で拭きたいほどの雨

高槻市 川島 颯云児

風向きがどう変わろうとマイペース

ほんとうの涙はひとりになってから

嫁が来た日から息子はもう他人

おおらかに生きたし灰になる日まで

いよいよの定年笑つて去るつもり

高槻市 井上 照子

節度ない暮らしに落ちる身を責める

凜々しさを保つ努力も老いぬれば

寄る波を押し返しわが身を守る

ミニバラをいれて小人を侍らせる

三面鏡正直すぎる後ろ髪

守口市 森川 まさお

運河に映る雲も倉庫も動かない

運河沿い画布立てたばこながく喫う

行き着いた紫陽花の寺薄明り

ふいに来たてんとう虫の美しさ

梅雨寒や旅をつづける首一つ

茨木市 島元 ふみ

守口市 結城 君子

なつかしきもののひとつに操車場
ワープロを始めてからの声の張り
さわやかなさよなら山の仲間たち
昼顔と大阪弁でしゃべるなり
全没は飲みに行くのに都合よし

寝屋川市 江口 度

クラス会 夫婦同伴増えてくる
妻が見ているお醤油はひとしずく
ルーペまでそろえて辞典を貸してくれ
傘さして忘れた傘をとりによく
雑草を絞ると俺の顔が出る

寝屋川市 柴田 英壬子

りんとした沈黙わる口は言わぬ
天神祭り汗にかかわりない部屋で
青森へ葉書を書いた夏の雲
討論は苦手小さい字も苦手
励ましの言葉たのしく聞く気流

寝屋川市 岸野 あやめ

焼き芋が好きで買物上手です
病院で若いドクター意地になり
糖尿の入院カレンダーを貼り
骨密度測って惜しむわが生命
ばやばやとくらし三キロすぐふとる

寝屋川市 堀江 光子

あじさいの咲き出してより変る道
あの壁が見えると直ぐよ母の家
壁無言どんと拳を当ててみる
謎解けてこんなことかと思う謎
出口ない壁の暗さに梅雨つづく

寝屋川市 後藤 黎之助

第二幕 妻の日課に呑込まれ
新世紀あいうえおからABC
紫陽花は日傘さしては絵にならず
ファックスに拝啓敬具とは書けず
父の日に子持かれいが焼いてある

枚方市 八田 敏

病室の紫陽花妻に旅の夢
兎小屋に健康器具が陣を取り
笛太鼓鳴って弾むは気持だけ
古ぼけた看板立てて旨い店
爺さんが本気で孫とするゲーム

枚方市 前 たもつ

運動会のレコードから学校秋になる
影法師 先に頭を下げと言う
先生は好きで学校休まない
親戚に弁護士がいるはずはなし
金剛力士ライトアップを睨みつけ

東大阪市 森 下 愛 論

飲めぬ日もあつても良しと土砂降りに

反論をせぬ相づちに迷う酒

モノクロのビル街梅雨の画布によし

新聞を逆にならんで詰将棋

残像を捨てれど残る掌の温み

松原市 小 池 しげお

かもめーる今年も世話になりどおし

雑音をのがれて梅を干している

じゃが芋に母の香りと父の匂いと

水筒の水は帰りを知っている

暑がりの扇子はきつと貰い物

藤井寺市 吉 岡 美 房

あじさいの淋しがりやが毬となる

血の流れ止めて原爆写真見る

向日葵も情けに負けて向きを替え

日本人居らぬとニュース他人事

叩かれたおかげと思うことはかり

藤井寺市 田 中 透 太

出る杭にやんわり釘を刺しておく

運を天に任せてからの心電図

冗談で済まない棘のある言葉

身の上が似てる女と終電車

振り出しに戻る覚悟で靴を履く

羽曳野市 榎 本 吐 来

再職のデスクおのれと睨み合い

老残を労り合うて待合所

俺が一枚上と互いに思うてる

病因不明へ薬はちゃんと出してくれ

無神論の枕に今宵も亡母が来る

羽曳野市 吉 川 寿 美

胡蝶蘭 母に秘すべきこと一つ

喪の膳に亡姉の思い出盛り切れぬ

喉ごしの良い言葉に胸くすぐられ

落日に慰められてわたしの負

放物線の尖端にある父の念

八尾市 宮 西 弥 生

片方の腕が楽な道えらぶ

前むきも疲れるものよ草に臥る

人間の眼の黒さで汚す地球なり

なだめられて女は先を計算せず

勿体ない勿体ないと今日ある命

八尾市 高 杉 千 歩

曖昧に過す日もあり眼鏡拭く

蟻殺す薬の効き目恐ろしい

コーヒーカーップ持つ手震える君もだね

わがままに暮せていいねと他人さま

ひとり遊びの占いに凝る夏果てる

岸和田市 高須賀 金 太

貯水量ふえてますかと雨に訊く

雨音や遠い昔を聞いている

円を描く禅のころを知りたくて

生きたかを考えてたら寝られへん

ぼくはただ激しい風がほしいだけ

岸和田市 島 崎 富志子

カレンダーに日記の代用させてます

うるおいの雨は雑草にもやさし

モノクロが鮮明になる終戦日

口達者の孫に時々もらう知恵

雨三日お化けキュウリの貸農園

岸和田市 寺 田 甚 一

あり余る世に使い捨ててまだできぬ

繁栄に慣れて足元見えていない

年金の脛 子がかじる孫かじる

子の電話僕は一言妻多弁

まだ妻の掌でみな踊らされ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

未来図は核に減んでいた地球

基地移転費用は持てと言うてくる

流れ出る血だ山肌が削られる

肩書は重い名刺の男だが

核捨てた地球を僕は描きたい

岸和田市 古 野 ひ で

わだかまり会えば溶けゆく母と娘よ

準決勝負けても清し伊達公子

背の丸み亡母そっくりになって喜寿

雨だれの音も静かにも思う

何げなくこぼした言葉指摘され

岸和田市 原 さよ子

納得はせぬが涙で押し切られ

なに着てもすてきな服にする若さ

登山電車ハイジの世界へ誘い込む(スイス)

中世のいくさを思ふ城ひかる(ドイツ)

午後九時にまだ陽が残る白夜の国(ドイツ)

岸和田市 井 齋 一 齋

落し主名乗ってこない悪い金

彼の世から稼ぎ続けるひばり館

商人は上手に時価を使い分け

寝た振りの猫に総てを覗かれる

いい空気吸えと左遷が苦笑い

貝塚市 池 田 寿美子

ブラボー!と間近に叫ぶマッターホルン(スイス紀行)

氷河特急そのパノラマに息を呑む

無為徒食フライトの中フオアグラに

旅貧乏やと叶えた夢紀行

想い出を風のスケッチに託したい

富田林市 池 森子

六月の陽差しに拗ねる雨蛙
青林檎机上論だけよく弾む

野心ひとつを机の上に踊らせる
わたくしの前で切符が売り切れる
少しだけ濁る愛する人が居て

富田林市 片岡 智恵子

健康食 遠い日の祖母想い出す
私の座れぬ幅の席が空く

海にも山にもよく似合う青い空
仕事もつ女 赤い靴履かされる

梅雨の憂さ子ツバメをみて救われる

河内長野市 井上 喜 酔

梅雨もよし蛙が聞いている般若経
前職の肩書捨てず持ち歩き

相談は君が始めと酒を注ぎ
名物も時の流れへ顔を変え

今更に嘘とは言わず笑うだけ

和泉市 西岡 洛 酔

バックする妻に見つけて居る女
風鈴の音色に癒す夏余生

ぼちぼちと歩みぼちぼち生きてます
年金のカラスで昼飯ねだってる

梅雨晴れ間 僕も干そうか無為徒食

大阪府 八十田 洞 庵

参道にようお参りと石仏
口裏をあわそう鬼が耳を寄せ
転ぶたび知らぬ世間が見えてくる

まっ白な紙にまさかが伏せてある
鉛筆は手帳の秘密嗅いでいる

京都市 都 倉 求 芽

あの時の空が見たくて眼をつむる
水甕を満たしてくれる雨を聞く

沖の方から海荒れてきて夏を消す
右へならえ 一番右がすぐ替る

そのうちに鴉もみんな糖尿病

京都市 山海 友 照

猫の真似甘え上手になりました
留守電に一喜一憂の声があり

淋しさが重なり合っている日暮れ
一人旅歩いてみたい天の川

蛇の目傘艶めく裾の祇園町

生駒市 北山 悟 郎

清い汗大きな仕事をしてくれる
根性がすり減り人生道長し

蒼穹の天しきり僕呼んでいる
机上論と体験談がくい違ふ

クラス会ピンとキリとが酒を酌む

大和郡山市 坊 農 柳 弘

横浜市 菱 田 満 秋

残暑なお秋手探りの豆台風
愛されていると気付かぬ夏帽子

鳴き盛る蟬にも夏の自己主張

十六夜の月を肴に差し向い

草花に秋手招きの地藏盆

大和高田市 岸 本 豊平次

平凡な日々と平凡似合う妻

農業の父から聞かぬ子守唄

老人手帳内科眼科に歯科昼寝

日曜の朝のチャンネル観光地

故意か偶然か正札裏を見せ

静岡市 安 本 晃 授

八起き目の鼻先で呼ぶ亡父の声

一筋の道にこだわる老いの靴

運命のラストダンスは風に舞う

礼節の厳しい父は兵のまま

肩書を捨てて未来図描きかえる

静岡県 蘭 田 摸 杏

行商の炎暑逃れの長話

梅雨しきり俺を騙した奴が逝く

ヤジ馬と警察の見る目のちがひ

手厳しい客の集まる味の店

網戸越し一部始終を見てしまふ

代々の墓へ別姓入り難し

勇み足でも金星にされている

人権があり残飯はあげられず

奥さんが若返ってた七回忌

茶を沸かすおへそは出して歩けない

町田市 竹 内 紫 鏗

乾盃の音頭モゴモゴ喜寿の歯で

甘食の縁 大正の口に合ひ

棋士失う 鳴らしてすべらせる時間

万歩より遠く焼香して戻る

当選の名が載りアイツ生きとるか

仙台市 川 村 映 輝

長寿国 病人 病院に溢れてる

剥き出しにされておへその魅力失せ

生むことを拒む民族に未来なし

消費税払わなければ生きられず

空出張していた県にもポーナス日

弘前市 斉 藤 岳

縁結びの神へお礼に来たところ

太鼓橋あり平安の古戦場

ファックスのお便り電子人ですか

作業着で来れば蛙が唄い出す

りんご樹の炎がつくった陶器です

弘前市 小寺花峯

友と酌む酒は朝まで注ぎこぼし
タクシーが明日を運ぶ午前二時

赤信号隣に止まる女あり

張り替えた障子に穴はあくごとし

子守唄聞かせた音痴で子も音痴

弘前市 佐治千加子

緋の小袖 過去の衿持をこぼす酒

人魚姫ひと夜の舞の港町

後ろ向きに歩いて帰る失語症

和解案蹴って判決待つ男

うそついて裏切って川渡る蛇

弘前市 高瀬霜石

出世には見事に遠い正義感

義理の輪をくぐる一ミリ歳をとる

つんのめりながら地獄へ極楽へ

簡単に和尚寿命と言うけれど

若旦那メッキはいずれ剥げます

弘前市 肥後和香子

豆腐の値忘れた顔で帯を買う

美しく金魚泳がす夫の度量

まだ少し悪いあそびが出来そう

葡萄のつる確かに一人を待っている

けんかして又けんかして同じ墓

弘前市 相馬銀波

深追いも背伸びもきつと戯画になる
茶髪以後 親の欲目も軽くなる

日影選ることも知らない蟻の列

嘘ひとつ抱いて汗する丸い鼻

夢希望綴ると明日の土の詩

十和田市 小笠原敏人

子を見れば我が子の緒を当てている

大仰に呑んでる人も同じ椀

目が覚めてみれば夢なり古女房

落雷があるかも知れぬ傘を置く

飼われぬが生徒の寮の親子猫

青森県 西谷大吾

二十三時 丸太を乗せて終電車

生きるとは死を待つことか蟬の殻

悔いたとて無駄と思うが悔いている

ペン先がこの頃惰眠ばかりする

少年の指には蝶が来て止まる

砂川市 大橋政良

牛臭い村で逢うのは牛ばかり

大声を出せば明日へ届きそう

振るまいか振るかためらってる尻尾

寄附金の順に招待席がある

振り向くと玉虫色が消されそう

北九州市 梅田宣司

灯を消して神も仏も寝てもらい
湯豆腐にとける貸し借りなしの酒
呼吸まで聞こえてきそう筆の跡
年金を錆びた鎧の糧にする

唐津市 久保正剣

生臭い話が好きな叩き上げ
桃栗三年 形状記憶の消えぬ人
雨雨雨甘い誘いのない受話器
無礼講 鯛や鯡の馬鹿踊り

唐津市 仁部四郎

とりあえず東へ一歩万歩計
歴史家に美術家になる切手展
広辞苑のとなりで売れる子育て書
一面のマンガでガスを少し抜き

唐津市 山口高明

道をきく外人さんを置いて逃げ
フカ鯖のスープが好きなら毒舌家
新聞の論旨は少し右へ寄り
混乱は電線一本切れただけ

香川県 成重放任

子宝に恵まれすぎて苦勞する
世の中で自由に来れるのは自分
運勢は吉と凶との組み合わせ
年金を貰うまではまだ逝けん

香川県 山地マツエ

プロポーズしたのは霧の夜のせい
花ばさみ時々切りたくなる絆
断ち切れぬ未練ブランコゆらしてる
他人にはやさしい夫気に入らぬ

香川県 池内かおり

アメリカの孫も見事に蚊に食われ
あつけない別れもいかエアポート
張り替えた障子の何と味気ない
五パーセントの凄さ新築が六軒

松山市 丹下美津子

長い祝辞 窓の雀と目で遊ぶ
結論は急くなと墓の父がいう
公園も静かになって雨季に入る
目の保養 加賀友禅に輪島塗

今治市 野村京子

月見うどんの月を崩して善人か
三本の矢の一本が軟弱だ
会者定離 仏の花の水をかえ
雑兵で人の言葉をうれしがる

鳥取市 西村黙光

ああ余生 物指しまでも彩を変え
バブルはじけ歪になった玉手箱
胃カメラへ散歩の威力見せつける
狙の鯉に度胸を試される

鳥取市 前田 一枝

部屋一ぱい思い出残し娘は嫁ぐ
さよならは手も振らないで背をむける

笑い顔美しすぎて困る通夜

夫婦愛 別姓なんか苦にならぬ

鳥取市 岩原 喬水

物色を妻のくしやみで諦める

言い訳は度忘れにして逃げておき

へそ曲りそれでも妻はついて来た

庭の松嘆かせている三代目

倉吉市 最上 和枝

変換キー叩き違えたサングラス

上手下手問わずかごめの輪に入る

かたつむり背おった家がおろされぬ

お喋りが過ぎてわたしが薄つべら

倉吉市 松本 よしえ

鳥よけの網に狸がひっかかる

蝸牛のアンテナ雨の方に向く

憧れの人に輝くお連れ合い

夜になると輝いてくる変なひと

米子市 木村 富美子

エンピツのあと何本と物語

履きぐせが付いて私だけの下駄

掌の中の夢がふくれてこぼれそつ

キッチンで愛しい命守る音

米子市 光井 玲子

残り時間唯すこやかに歩きたい
その声は普通でないな娘のコール
縁のない話だそつとしておこつ

それごらんやつぱり神の思つ壺

米子市 澤田 千春

鉛筆の顔とあそんでいる夜中

神様に話したいこと溜めておく

かずら橋 演技しすぎて渡れない

香水の壺ときめきも枯れてきた

米子市 金山 夕子

七月がスタート蝶が逢いにきた

夏の風情に替えてスカツと留守にする

健やかに立つ向日葵も私も

美術展わからないから面白い

米子市 寺沢 みどり

時計との縁を左手にきざむ

おぼろげな耳で縁を繋いでいる

隣り合う縁へ松も気を許す

思い出の汽車は煙の中にいる

米子市 中井 ゆき

蒼天と私の仲にある無限

み仏のエネルギー受け蓮ひらく

それほどに裕福でない二重あご

すこやかに老いてゆきたし残日抄

鳥取県 羽津川 公乃

いいともあるのに誰も見てくれぬ

近視と乱視 老眼鏡は持ってない

人真似も盗作も無理健忘症

雑草もパーマも伸びて雨期つづく

鳥取県 西原 艶子

生活の乱れが髪に出てしまふ

決断の証のように髪を切る

晴れ舞台磨いた技がでてこない

出直した姿を海に見てもらふ

鳥取県 田村 きみ子

ひとりとは淋しいものよ日向ぼこ

毎日豆腐食べるわたしの小賢沢

言訳は止そう青空きれいだよ

僕の部屋 梯子をかけていたはずだ

鳥取県 黒田 くに子

生きるとは忘れ上手になって老い

想い出をつなぐノートが破れない

たまに来る故郷へ情け未だ残り

限りある余生だ好きな酒止めぬ

鳥取県 乾 喜与志

煩雑な机で用を間に合わす

温かいお喋りと好い匂いする

他所見して三途の川へおっこちる

お隣の築山ごとも我が窓に

鳥取県 幸家 単車

政治家の約束霧の中に消え

よそ見して大事な椅子を乗っ取られ

大切な絆を結ぶ縄のれん

力こぶ明日に備え溜めて置く

鳥取県 石谷 美恵子

夕立が流してくれたわだかまり

だしぬけに聞かれ本音をつい喋る

約束へ誰の呪文か雨になる

蝸牛身の程忘れ干涸らびる

鳥取県 西川 和子

怪しげな風が海から吹いて来る

網の目を抜けて孤独を噛みしめる

天高し白髪に似合う服を選ぶ

家中を磨いて嬉しい日を迎え

鳥取県 石尾 かつ乃

満ち足りて旅の枕に虹が立つ

愛の巣を作るつばめに先越され

豊かさに流されている世紀末

おみやげのこけし東北弁喋る

鳥取県 新家 完司

木陰から蠢く人を遠く見る

梅雨の間にググッと伸びた男の子

にくしみに占領されているころ

気やすめの温い言葉に溺れている

松江市 柳 楽 鶴 丸

食べて飲んでシルクロードで汗流し(シルクロードの旅)

トルファンの家 家 家 アドウの門

厄除けに月牙泉の砂すべり

らくだの背で王子様になった夢

出雲市 板 垣 夢 醉

もう里に甘えてみたい父母はなし

言うだけは言つて肩の荷やつと降り

負けぬ気の妻で夫は閉口し

自転車もゆつくりこげぬこの猛暑

出雲市 園 山 多賀子

四六時中添つて阿呷の心読む

人情が絡むと弾ける鳳仙花

勝算はないがカンナは赤く咲く

半丁の豆腐に見栄は噛み合わぬ

出雲市 久 谷 まこと

あれこれと噂くすぶる吹きだまり

生き甲斐の趣味に年金惜しまない

他人事ですんなり役が決められる

顔つくりだんだんはまる役どころ

出雲市 岸 桂 子

病院のエレベーターを計が降りる

育てれば律儀に咲いてくれた花

赤電話指紋残して入れ替る

嘘言えば心が貧乏ゆすりする

出雲市 石 倉 芙佐子

しのぎいい森で私も自然体

夢で舞い夢で走つて負けられぬ

紫陽花寺を駆け込み寺と間違える

夫婦箸そろえて十日待つている

島根県 西 村 早 苗

シャッターを頼む相手も二人旅

鬼やんまもう寒かろか背をまるめ

きつちりとくらしの日割り秋へ向く

毛糸いま新たな恋ができたよう

島根県 藤 原 鈴 江

生きんかな純愛捧げた亡夫は沖繩に

世の移り看護士さんに手をとられ

冴え渡る心にひびく一点鐘

生涯をかけて守つた家なれど

岡山市 花 田 たけ志

したたかさ丸みを帯びて来る余生

あばら屋を庭の構えが引き立てる

沈黙の抗議に手強い角がある

染められぬ色が手招きして困る

笠岡市 松 本 忠 三

ばあちゃんに會長譲りお年寄り

年寄りの冷や水じいちゃん聞こえます

父の日も母の日もあつたっけ

耳よりな話に雑魚が寄つてくる

移り行く雲と語らう花の彩

岡山県 山本玉恵

古里で他人ばかりの風の音
何をそう身構えばかり雨蛙
言うだけは言わせてほしい風と逢う

岡山県 福原悦子

迷い路 森の向こうの星明り

落ちこんだ心にバラの彩がある

残り火で渡る第二の設計図

絵馬の山 神と約束などできず

岡山県 大石あすなろ

都合いい理屈をいつも聞かされる

説得力すこし揺らいだ修飾語

しばらくは火の粉かぶらぬ傍観者

喜怒哀楽きょうは喜びだけとする

岡山県 江口有一朗

おにぎり器の便利さ母の味が出ぬ

大自然の無情と慈悲にある輪廻

クリティカルイレブン離着陸の事故

一球に命吹き込む大投手

岡山県 岩道博友

生き方を序列の中へ当ててみる

耕せば子に継がす気か尋ねられ

世の中が汚れ和顔の人探す

指輪だけ光らせ目頭なせぬらす

躓いたおかげで靴を履き変える

広島市 森田文

愛犬が早いテンポで老いてゆく

子育ての一段階をクリアの娘

みんなみん 夏の日差しに命乞い

竹原市 古谷節夫

高齢化未来のビジョン聞けぬまま

責任は六法盾に逃げ捲り

ピンボケをカメラの所為にする役所

反省の猿から学ぶエチケット

竹原市 時広一路

神様にアピール鈴を二度鳴らす

自由な国で自由を奪う有名税

ずばりだね大根おろしの辛さだな

追いかけた季節追われて落着けぬ

竹原市 石原淑子

悔しさを初心にかえる糧とする

ひまわりの大らかな愛受けとめる

ねむの花咲くころ父の忌がめぐる

深呼吸 身心共に正念場

柳井市 弘津柳慶

テレビのカメラと知ってブイサイン

恋人が出来たか娘の変りよう

決勝が近く一気に抜き進む

哀しみを抱いて独り身床につき

反論もあろうがマンガ読んでます
美禰市 安平次 弘道

お相手をしますと女すぎがない
定位置に夫婦茶碗が置いてある
引退ときまり世間が狭くなり

和歌山市 玉井豊太

打ち明けて勇気をもらい気が冷める
金づると思った道に落し穴

待たされて痺れをさらす花時計

内輪のこと指一本をささせない

和歌山市 宮口克子

さあ勇氣 夢の世界の扉に手

束の間の夢ゴンドラの舟に酔う

盆景をまとめるための石一つ

それなりの流浪の果ての丸い石

和歌山市 福井桂香

躊躇いもなく飛び込んだ破れ傘

ほとぼりの冷めた頃だな 電話する

砂時計ひろい宇宙を知らぬまま

象形文字があっち向いてホイと遊ぶ

和歌山市 青枝鉄治

掌中の珠はつばみのままで良い

正論へ他人の顔で攻めたてる

待望の肩書き消したスキャンダル

不意をつき单身先へ妻が来る

やがて散る花の驕りに目を瞑る
和歌山市 田中みね

又聞きの悪口だから気にしない
定年を知らず家業の灯が燃える
毒舌にも慣れて器が大きなる

和歌山市 堀畑靖子

夏バテの口にひろがる梅の味
ひまわりに柔な男が多すぎる

私の得意な場所は森にある
傷つけた人に詫びたいような月

和歌山市 岩本美智子

優しさを演じ厳しい眼に出合う

葉桜の木洩れ陽を踏む閑かさよ

闘病の夫の喜寿を祝う鯛

冷房へ挑戦をする仁王雲

和歌山県 小倉アサ

幸せなことに男の子はひとり

約束を皆果たしてから微熱

ひと言が未だ届かずに続く余波

下戸の息子に未案じてる黒田節

西宮市 牧淵富喜子

熱下がる 少しまとにもなり過ぎる

点滴の速さで淘汰されている

大根の白さを切って負けている

心機一転 空はわたしの上で夏

西宮市 菊池 トミエ

甲子園 夏は男子の泣ける場所

季はめぐり更地の隅に立葵

ほどほどにストレスがあり元氣出る

車椅子押して河原の月見草

伊丹市 小熊 江美

エンピツの地図を頼りに老母が来た

ちぐはぐな返事で通じる老夫婦

錦鯉跳ねて新緑等持院

ピンボケで皺も写らず若く撮れ

相生市 中塚 礎石

湯の町を夫婦氣取りで下駄ならす

貧乏が記念貨幣を買うてみる

流行がスローテンポでやってくる

振り向いてやれば女も若返る

大阪市 上田 柳影

父の日に矢張りネクタイ贈られる

一病どころか三病ほども抱いている

抱いてなお抱かれてなおも悲しき日

ああ男淋しく雨の音に泣き

大阪市 稲本 凡子

日記書く決心夏休みで崩れ

口下手のお世辞でとんと通じない

整理するたびに昔が消えてゆく

性格の相違と簡単に別れ

大阪市 清水 利武

金山の積んでも買えぬ人情け

決断を棚に上げての核談合

クラス会あの世に近い顔が寄る

孫の背がグングン伸びて見下ろされ

大阪市 松尾 柳右子

無理するな言っても仕事つかえてる

南部鉄風鈴ですよ眠られず

若はげの客が居るのにはげ談義

よそ行きの新調夫は気にもせず

大阪市 河井 庸佑

胸中を汲んだ情けが仇となる

難関へ応変不動腹を決め

無理すればするほど裏目出る不運

先手取るチャンスへ如才なく動き

大阪市 北 勝美

悲しさは明日をしらぬ沙羅の花

車椅子押しているのは白い髪

便利さを使いこなせぬ老いの指

木戸開けてこんな涼しい路地の風

大阪市 寺井 東雲

満員電車大きな声で降りまっせ

猛勉強野心があつて詰将棋

お隣と行ったたりきたり落葉仲

肩組んで要求願う横の幕

飲むほどのことがあるのか酔芙蓉
大阪市 大塚節子

刻む音妻の鼻歌日曜日

雪しきり寮歌で送るまた一人

詠歌もはんなりのんびり派手な亡父でした

大阪市 清水絹子

雲一つ入れるに三日カメラアイ

網戸ごしにもう梅雨明けと蚊の羽音

夢の橋いつかいつかもなまけ癖

姉夫婦やさしくできず一周忌

大阪市 奥田良子

四五人の心おきなき露天風呂

人の波大きく崩れ山車まわる

酒とろり一重まぶたに情けあり

対岸の若人まぶし走り行く

大阪市 渡部さと美

梅雨どきも人は旅好き旅みやげ

つばめ返し見せて町内生まれだよ

こんなにやくのようにはゆかず腹を立て

七時出をわらう四時起き万歩計

大阪市 中田あい子

思案して思案してきめた息子と同居

幸せに育ちすぎたか情にかけ

あいづちのよさにつられて本音まで

気に掛かること片付いて墓詣り

毎日が日曜老いにもリズムあり
堺市 柿花紀美女

遮断機が上がり決断路が開き

ほどほどの礼儀もあって老いふたり

遠く住む子らを思いて寝そびれる

堺市 近藤豊子

風と青葉まざりあつてる梅雨晴れ間

牛蛙ひと声ですむ朝の歌

同窓会わたしの白髪多すぎる

わたしには市役所だけの中之島

堺市 吉本菁風

長男も嫁の実家にさらわれる

背伸びしてトイレをすますヨーロッパ

看病をしている方が先に逝き

祖父たちもシャツ ステテコがよく似合い

堺市 一瀬福一

おぼろ夜を女易者に掌をゆだね

あたたかな水子地藏のおちよぼお

春のオリオン片方だけのイヤリング

花に倦む嫁の寝顔のあとけなき

豊中市 江口明光

公然と人の話を食いに来る

男にもある指先の爪の色

手前みそばかりが寄った座談会

罪を消すシャボンの泡に濡れている

豊中市 三宅 つえ子

車椅子も心も濡れて梅雨最中
梅雨最中梅の匂いがしてひとり
信楽の狸は老いて光りだす

コーヒー飲みさして何処へ行く車椅子

豊中市 滝北博史

弱いけど強い奥さん持つてはる

街角で茶髪が五人立ち話

怠け者が二割ほど居る蟻社会

中ぐらゐの鰻にしとこ土用丑

豊中市 湯浅馬洗

パソコンの強迫感に老いは逃げ

籐枕推敲の指さきに寝た

霧の海 故郷の島に逢いに行く

重要書類焼いたあの日と同じ碧

豊中市 月原方郎

ペット増える国勢調査してみたら

「行革」は議員の定数まず減らせ

太っ腹の政治家いない人材難

疑えばみんな怪しい推理物

豊中市 松岡久留美

雷鳴のはげしき夜に母思ふ

誤りを素直に詫げる子に育て

老いた母労う日々の夏休み

二度と無い思い出つくる夏休み

吹田市 茂見 よ志子

細胞の減りゆく速さおぞましい
波たたぬ泉 投げたくなる小石

蛍とぶ様子 延岡より友よ

喪へ急ぐ田の面は青し播州路

茨木市 井上森生

笹竹が大きくしなる願いごと

念仏の母に素敵なお迎えを

テキサスを腹一杯にバーベキュー

紫陽花の決め手は青の变化球

茨木市 藤井正雄

人並みに嫁入り道具出す安堵

結婚の決め手をみんな聞きたがる

ぐい呑みの盃に似る月見草

变化球妻が苦手を突いてくる

高槻市 芦田静江

水浴びの鹿が絵になる梅雨の空

東林院に茶の真髄をみてしまう

ツインビル老い七彩の客になる

カタツムリ秋のテッペン信じよう

寝屋川市 平松かすみ

退院の友へ十回よかったネ

尿酸値 好物みんなやめなさい

年波に感謝の言葉増えて来る

ゴマ粒の命千個を貰います

寝屋川市 富山 ルイ子

生きている証 体にある痛み

気が付けば時の流れに早古稀と

六十を越え七十を越え小休止

蒙古斑 過去引きずったまま今も

寝屋川市 北岡 波留吉

胸襟を開いてほぐす連れ糸

傷跡は風化させない平和論

明治とは見えぬお人のコーヒー通

敬老日の祖父 祖母の肩揉んでいる

枚方市 二宮 山久

妻や子がいてるたしかな靴をはく

倦怠期なんと始めたスイミング

約束の禁酒のグラスに花を分け

酒煙草やめて人生たのしかろう

枚方市 海老池 洋

岩ひとつ領有権の波高し

長雨へ半期出したい団地窓

航跡一筋 悔いることなし父の船

じわじわと浄土へ伸びる影法師

交野市 福崎 しげお

うぐいすと同じ水のむ山の道

山の地図一枚貼った無人駅

末っ子へ我慢は説かず老いふかむ

貸し借りをせぬ友ありて五十年

東大阪市 安永 暁子

ふり小槌カードは妻がはなさない

迷惑だ車で寝てる排気ガス

ちまちまと言わない母のみせどころ

レントゲン痛いはずです折れてます(手首骨折の事故)

東大阪市 指宿 千枝子

海の日には波止場に行つて船を見る

親戚に船長さんは居りません

ボウフラよ君がにつつき蚊だとは

古本屋 夫のロマン掻き立てる

藤井寺市 中島 志洋

九回裏思わぬドラマ待つていた

惜敗の力士の汗に明日がある

浮き浮きと彼のセーター編む夜長

通ぶつたザーマス族に会う画廊

藤井寺市 高田 美代子

負ける気がしない土俵の派手な塩

お誂えむきの風なり旅に出る

平静でいよいよようと目をつむり

汗くさい帽子とひと夏を終える

藤井寺市 福元 みのる

借金も商いのうち鞭になる

足しにせいとは貸しようも温かし

小降りまで壁を背にして待つ子供

転生の有無より今の生きざまを

羽曳野市 酒井 一 壺

案外とふとんに感謝出来てない
上等のふとんの中で怖い夢

アルバムに一枚だけの父がいる

父の日に顔を見せたは隣の息子

八尾市 高橋 夕花

絵の中の椅子が傾き始めたか
許せない人だが戦したくない

逆算をしたい女の誕生日

ぐっすりと眠って明日を輝こう

八尾市 吉村 一風

笑わせて法話きっちり教える
吊り橋を渡る姿は撮らないで

突然で涙光ったまま落ちず

飾るから言葉の味も逃げてゆく

八尾市 山下 美津留

薬指ダイヤを知らず妻は古い
ようみはるお医者と母は今日も行く

乾盃と元気で叫ぶ妻と居る

負けん気でいまだに辞書を持ち歩く

八尾市 宮崎 シマ子

七夕に逢う約束の人がいる
里帰り朝まで母と笑い声

気が滅入る梅雨にピリピリ山椒煮る

別姓にポストも二つ用意する

八尾市 生嶋 ますみ

検診の異状もなくて梅雨あける
またひとつ錠剤ふえて生かされる

孫の息まるく包んでシャボン玉

ありがとう素直にいつて娘は嫁ぎ

八尾市 大内 朝子

すこやかを願うて老母へちさきまげ
ときめきへレモンカラーで身を包む

老いらくの恋あいらしい苺の火

胸張って今日が一番若い時

岸和田市 芳地 狸村

喜寿金婚歩んだ道にある誇り
イエス ノーで通した妻のハワイ旅

木蓮とこぶしのちがい辞書をくる

雲行きがちよつと怪しい妻の顔

岸和田市 長谷川 呂万

しあわせは晴耕雨読わが余生
芳名簿 美人の筆が右上がり

隣席はメロンが乗った松の膳

すぐ前のホームに別れ惜しむ人

岸和田市 田中文 時

核使用触らぬ神の司法裁
おしっこは言わぬが孫の口達者

脱サラの友と比べる不甲斐なさ

カラオケに付かず離れず唄い終え

岸和田市 藪野 けい子

痛いけど病気と思わぬひざがしら

方言を気付かぬままの新社員

道南の二泊三日の家族旅

とりまきが孫の出産だす祝

富田林市 松本 今日子

旅に出る飛び出すように家を出る

湖の神秘に負けた大阪弁(霧の摩周湖)

深呼吸 果てることなき地平線(富良野)

きり雨に静まり返る五稜郭

河内長野市 植村 喜代

寝られたら困る私を案じてる

辛い日々送らせて来て車椅子

手足預けて考える時期もらい(半身不随)

罰当らない生き方をしなければ

和泉市 岡井 やすお

零細も取るだけは取る消費税

必罰の螺子がゆるめば世は乱れ

自分の死考えもせず友の葬

復興くじチンと貧者の五百円

大阪府 靱山 隆

季の節目 自愛おさおさ怠るな

読谷(ヨミタン)の浜に消えない波紋あり

幸せは掴むと逃げる虹はまぼろし

ジョギングでお腹の脂肪もやしてる

京都府 稲葉 冬葉

満月へウインクしてる酔い心地

少年のキャンバス吊橋がゆれている

美人系ではないけれど存在感

情熱をなくし久しい緑の風

奈良市 宮口 笛生

もうブドウ ミカンが梅雨の果物屋

カブト虫ならデパートに売っている

駅前に赤提灯が出来てから

口ばかりで年寄り組の中に居る

奈良市 天正 千梢

かかえ切れない静寂に霧ながら

大安吉日 燕も巣立ちます

自分をあやすつもり絵はがき買ひあさり

キャッチボールですよ絆強くなり

奈良市 米田 恭昌

あじさいの此処にもあつた通り抜け(矢田寺にて 二句)

雨嬉し味噌紙め地蔵もあじさいも

一人抜け二人抜けして老い二人

笹の葉に夢より重い欲を吊り

大和郡山市 榊原 慧心

温泉は海外よりもなおうれし

あの父が母に叱られる歳となり

叱っても泣かないからとまた叱る

にこにこ陰に回って隠し球

奈良県 長谷川 春 蘭

水打って選句のこころ落ちつかず

その中の白の菖蒲がこころ占む

野あざみをいと見ればとげは見ず

聞きあきて団扇でかくす生あくび

富山市 酒 井 輝

若い血がマリアエレナで甦る

懐石にある名水の隠し味

仏式の華燭わが家の居間で足り

ラーメンで昼を済ませた別の僕

富山市 島 ひかる

信心と別に野仏見てまわり

微笑めばほほえみ返す野の仏

風雪に耐えて野仏いいお顔

野仏の姿で母は老いてゆく

富士宮市 渥 美 弧 秀

花開き去年の宴の友集う

胸板を叩くゴリラに煽られる

「絵だより」の親友は病を押し描き

父母の愛知らぬ施設の子等いとし

弘前市 中 山 雅 城

湯煙に葉主幹の句が浮かぶ(玉造温泉)

鳥取の砂丘に風も文字を書く

かさ松に笑われている股のぞき(天の橋立)

テレホンのカードも高値 金閣寺

弘前市 蒔 苗 果 林

減反も好きになりましたしよ農に古い

霧なにか囁くのです農の瞳に

胸に森あるよに真昼梅雨の作業

大路の蛙になった雨宿り

弘前市 岡 本 花 匠

上棟式 鯛も親父もそりかえり

回転寿司重ねた皿の満足感

古里の山に感謝の立志伝

立佞武多つがるじよっぱり炎えつきる

弘前市 須 郷 井 蛙

親戚は婚葬要員だけにいる

通学へ皇族並に送迎し

飲み会がある日仕事がよく流れ

ラーメンをドッカと置いて妻の旅

十和田市 阿 部 進

師の言葉今も心の寄りどころ

イカの町 初水揚げで活気見せ

恐山あの世とこの世橋わたし

世話好きな妻に恵まれ満ち足りる

八戸市 島 田 昭 治

病室のマリヤと言われた佳子さん

円満は子に従うて丸く居る

葬式は要らぬと子供に言っておく

なんとなく淡々として逝く気なり

自選集

遠山可住

本腰と見た目黙って従いてゆく
丸見えの腹で一升提げて来る
割り切って生きる破れたら捨てる
まっ白い道 子離れを確かめる
害虫にされて青葉を追い出され

藤村 女

曼珠沙華 母の白髪の目立つ風
水やって花の笑顔と対話する
淡々と聞けるは他人の悩みごと
今だから許してもらえそうな無理
ジャスミンのほかに母の身だしなみ

久家代仕男

殺伐な世相 射殺もためらわぬ
団子虫死んだ真似して潰される
善人と呼ばれる父の妥協癖
立ち読みへ店主好みの本を選び
人のいい上司足枷められる

黒川紫香

肩叩きそれから入歯ゆるくなる
交番の巡査と連れの女探す
ど忘れが増えて人間臭くなる
誕生日を思わぬ女が知っていた
美しい瞳の奥で叱られる

恒松町紅

友に逢う六十年の過去縮め
同い年が逝く香煙のゆるやかに
子宝に恵まれていた死亡欄
貧乏に生まれ下向く癖がある
菓子箱の底の小判が効いてくる

松川杜的

軍艦マーチ久しく聞いたことがない
右翼車なみの声で塵紙交換車
私なら迷わずOK安楽死
縁日の塔には塔の顔がある
一病のそれから土鈴も足踏みか

児島与呂志

正本水客

田の畔夏八月の雲小走りし
先月のいじめの恨み持ち続け
一滴の点滴愛が揺れている
京のお祭り鱧が氷の皿に盛り
チャンネルを回せば女の部屋になる

八木千代

月原宵明

溺れやすい女が壘の中にいる
壘の中から生まれる猿というけもの
壘の海は陽気 氷も溶けてくる
記憶さえ捨てた波打際の壘
壘を割る 壘の海には負けられぬ

辻白溪子

野村太茂津

交際をしたいのが居る新社員
休憩の煙草 軍手のままで喫う
怖い目に遭うたを自慢らしく言い
代理だと言う人相へ疑惑持つ
花束にキッスを添えて祝われる

波多野五楽庵

小西雄々

なくさめのアドリブだとは残酷な
面接にピアスをつけて来た男
剃髪をすると不敵な顔になる
失いしもの大きな虚脱感
台本になかった胃カタル腸カタル

真っ直ぐに生きれば風にさからわれ
やせ我慢していると知ってる影ぼうし
鳩のふん幸せな空ながめてる
足るを知る夕焼け空が美しい
猫抱いてその悲しみをみせじとす

忘却を悲しいけれど武器にする
留守電に相槌のないあほらしさ
雑草にひときわ高く猫じやらし
一点差で負ける巨人に腹を立て
ひとときの贅に酔うてる彩のお湯

しばらくは重く苦しい雨続く
合掌の指にも念珠握らせる
筆忠実に吟章くれた指である
すばらしき老熟が逝く目が潤み
おだやかなうつろい残るデスマスク

天女から妻洗濯をたのまれる
私だけのさだめか修羅の闇を這う
千の涙へためらう男火を抱きぬ
嫁姑 物差し違う物思い
生活へ自作自演の幕を引く

小林由多香

珍しく母が寝ているはやり風邪
リストラの風にわたしがさらされる
さよならを犬も小屋から出て送り
人柄が良すぎていくさには弱い
夏休み待ち年金を貯めておく

金井文秋

補聴器が逸した落ちのタイミング
連れ合いを先に死なせている達者
平均寿命過ぎても迷路抜けられぬ
美人でも普通の顔になる死角
死に急ぐなよ極楽は娑婆にある

藤井明朗

遠くからみて恋心抱いている
うちわ手に妻もついてく夕涼み
しあわせな余生人生の運開く
なつかしい夜店佇む夏祭り
生かされて今日のつづきの予定組む

野田素身郎

婿殿も俺に習うて肺切除(徹君入院)
結局は医師に預けた手術台
時間きて肅々入る手術室
手術室ドアが閉じてもう五時間
手術無事終わった梅雨の晴れ間の日

小出智子

身辺些事今日も朝顔三つ咲く
ねり芥子心配ごとが増えてくる
鍋の蓋いまのことだけ考えて
思い出したように風鈴鳴っている
夏の雲 諦めやすくなっている

高杉鬼遊

新聞に載るほど悪いことをせぬ
むずかしい顔をしないで人の恋
わきまえていますがいらいぬことをいう
ぼうふらにまた覗かれる暗い顔
あの世から呼んでいるのは蟬の声

西田柳宏子

井の中の蛙目覚めたアトランタ
銀から銅でも有森のさわやかさ
ジョンソンも綺麗な涙流してた
十五連敗 平和日本の派手な記事
アトランタ終る寝不足ホツとする

橘高薫風

萩椿咲け 何事も元通り(罹災復興・恩人九十三翁の新居落成
二句)
元通りならぬあり 老夫人の遺影
汚染水域乙旗挙げよ 海の日
誰に似る誰にも似てず天使なり(孫宮参り)
咆哮もあくびも見事虎のひげ

川柳塔(追加)

青森県 諏訪 柳々

雨蛙鳴けば持病も疼き出す
野仏の欠けた目鼻に無の心
ハマナスの花も咲いたか恋せよと
夢に見た亡父よあれから幾春秋

水煙抄(前月分)

兵庫県 藤本 芳乃

孫留学 月日流れる思慕の情
青空に明日を夢見る万歩計
小さな夢はかない命に虹を追う

大山市 森 正

妻が逝きぬし一杯に泣かされる
もの言わぬ遺影にまたも手を合わせ
逝く妻へためらう絆切つてやる

お知らせ

第2回川柳塔まつり翌日の川柳塔碑参拝

10月20日(日)朝から希望者による高野山大霊園内「川柳塔」碑への参拝を行います。

経費は交通費・昼食費とも約七千円です。先着三十名、希望者は川柳塔社事務所へ。

第四回全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる、「全日本川柳誌上大会」(日本財団補助事業)を昨年につづいて開催します。二十回の歴史を持つ全日本川柳大会、十一回を数える国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こそつてご参加ください。

課題と選者(各題2句・連記)

- 「ゆつくり」 開発 秋醉——鈴木柳太郎 共選
- 「晴れる」 関 水華——青木 晴嵐 共選
- 「橋」 野谷 竹路——小嶋 旬月 共選
- 「活気」 梶川雄次郎——川俣 喜猿 共選
- 「噂」 木野由紀子——辻 晚穂 共選

参加費 2000円(投句料・「平成柳多留」第4集代)

賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞

経済広報センター会長賞・(財)全日本川柳協会
会長賞・全日本川柳誌上大会賞

締切 平成8年11月30日(土)

発表・表彰 平成9年6月・第21回全日本川柳三重大会

参加方法 所定用紙(一枚一組)に各題2句と雑詠1句を書き(各題の選者が二名のため同じもの二枚を書くこと)、参加費と共に左記へ(用紙は請求くだされば送ります)。

〒530 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-702

社団法人 全日本川柳協会

電話・FAX(06)352-2210

青砥可明

東野 大八

伴せは大夕映の湖に佇ち

可明

松江市の宍道湖畔の白濁公園の車道近くに、ひときわ目立つ大きな川柳句碑の主は青砥可明である。

松江市民筆つての自慢は、広大な宍道湖の夕映えの美しさにある。従つてこの句碑は、松江市全市民の、鼻の高い心意気に応えたものとも言える。

本名義久。明治28年10月6日松江市生れ、幼時から宍道湖畔の夕映えの中で生い育つた。島根県立師範付属小学校卒業後、父に従い家業の松江勸商場を継ぐ。

この商売は、明治末年から大正にかけ、その商法の斬新さもあって大いに繁昌し、本拠を天神町の盛り場に持ち、松江連隊の酒保を手がける一方、入除隊用の軍装品販売を一手

に引受けていただけに、大いに儲けたらしく、津田街道に松呼庵なる別荘まで持つていたという松江市内切つての豪商として知られた。

この家の長男に生れた義久は、小学生の頃から俳句に関心を持ち、こざかしくも名月なる俳名を自ら名乗り、旧派の俳人氣どりでいた。それが小卒の頃から家業見習いに入ると川柳にひかれ、村穂珍馬という川柳人が山陰川柳社を大正五年設立すると直ちに参加し、その有力同人となり、柳号も不二綱と珍馬から命名してもらつた。

ここで鳥取県と合わせ島根県にまたがる柳界振興の足どりを俯瞰しておく必要がある。その主役を演じた山陰川柳界草分けの恩人、珍馬の人となり余談にもふれておく必要がある。

珍馬は本名八三郎と言い、明治18年津和野に生れ、松江市立盲啞学校図画教師となり、山陰新聞を経て松陽新聞記者となる。この時、正月用かるたを担当の際、川柳と出会い、ついに川柳欄を設けて松陽柳壇選者となつた。彼は川柳は井上剣花坊を師としたところから、柳樽寺流に毛珍坊と勝手に名のり、柳壇仲間の十人あまりと「乱坊会」とつけた。それが大正三年頃で、大正10年に島根県初の川柳大会を開いた。これを契機に珍馬と改称、「浚河会」を結成し、その機関誌として「頼杖」を出した。

しかし、この珍馬は、山陰民報の主筆になつたが、大正14年肺患のため、41歳で死去した。

さて、柳人不二綱の方が、珍馬の片腕で活躍したものの、珍馬の死去により、四か年続いた『頼杖』を廃刊、大正14年7月同誌を改題して『なぎさ』を刊行、なぎさ川柳社を新しく結成した。この時、井上剣花坊や本田溪花坊らが松江を訪れている。

そして昭和と改元されると、麻生路郎、庄万よしがすでに別派であつた出雲川柳社（尼緑之助主宰）の招きで訪れ、川雛飯川支部が作られたのが刺激となり、なぎさ吟社は、昭和2年8月、岸本水府・小田夢路・木村小太

郎を招いて「松江番傘川柳会」の結成大会を催した。これを記念してか、不二綱を可明と改号する。これは水府の命名だとも言われている。また、これとともに「松江番傘川柳会」を創設して、その会長となり、以後、彼は本格川柳一辺倒で生涯を終ることになる。

師の珍馬から継承した柳樽寺派川柳の革新色を、32歳になった彼は、水府一行を迎えて、言わば川柳は番傘の本格川柳の道こそだというように見極めたものらしい。

この頃を契機として、中央柳壇の大モノが続々と来松している。近藤飴ん坊、大谷五花村に川上三太郎一行という具合で、特に水府ら一行は、昭和4年9月にも再来遊して、山陰方面は一種の川柳ブームをかもし出している。このことは「島根県川柳史」に詳している。

さて可明だが、広島川柳史家山根隼人は、その小伝を次のように記している。

「大正14年7月、米村あんまと共に、島根県下初の柳誌『頼杖』を明治・大正・昭和の三代を閲し、その大正14年刊の『なきさ』を主宰し、後進の育成に専心し、ひと筋に本格川柳を墨守し、戦後、老いの執念を傾倒して続刊した。松かさ」と共に、彼生涯のこれらは大きな遺産であった。

その六十年に及ぶ句業を世に問うべき作品

集はないが、ただ一基の句碑に刻まれた『倅せは夕大映の湖に佇ち』こそは、可明の川柳に寄せたところを凝縮したものである。

このいしぶみは、雲と水をのぞむ景勝の地六道湖畔の白濁公園地内に在り、四季折々の夕陽を浴びながら寂然の風をみせる。

昭和42年5月14日は、その除幕の日で、幾多の知己柳友の篤志によって建立されたこの句碑は、みどりの風にすつきりと立ち、あたりの風景によく調和しているが、わが自筆のいしぶみを仰いで佇立する可明、長い川柳人としてのフィナーレであった。

昭和42年9月19日没。享年72。深楽院釈可明居士

いま松江柳界の元老、津川紫吻は、大正15年春八東郡国屋村で、紫陽花川柳社を興した。可明をよく識る柳友だが、筆者に一書を托している。

「可明を偲ぶものといえば、あの湖畔に立つ句碑一基と城東公民館にある『青砥可明記念文庫』のみである。

栄光の当地方川柳界の大先輩でありながら、数度の有志談合も結実せず、今なお遺句集の一冊もみないと、なんと形容すべきものであろうか」

また、地元最長老の一人、柴田午朗島根

県川柳協合理事長は「島根県川柳史」につき、川柳松江番傘の一頁にかく記している。

「この川柳史は、島根・鳥取両県の川柳史の足跡をこまかく記述し、当時の川柳一人ずつの作品も集めた苦労はなみたくないことではない。その資料収集には、島根県川柳協会の津川紫吻・本庄快哉両理事の協力のたまものである」

可明の柳魂宿るであろう「川柳松江番傘」(本庄快哉主宰)と別に「川柳いずも」(恒松町紅主宰)が、現在も地元柳界を支えて健在である。

青砥可明篇(郷土川柳作家作品集)から、しめくりりに可明作品を掲げておく。

傘一つ背広四五人濡れてゆく(明治時代) 国へ送る写真洋服着て写し(大正時代) 大臣の下手な俳句が早く売れ(昭和後期) 先生の子だからできるわけでなし

おしぼりの最後は耳の穴へくる 去る者は追わず見ている百貨店 安来節低音なればやれる齡

打つパフに焦りがみえる嫁きおくれ 切開で生れ出た子の初のはり 女とは思えぬ声でうがいます

▼次号は「森 東魚」

柳籠裏三篇研究

(三十二丁)

青木迷朗・佐藤要人・八木敬一
七久保博・岩田秀行・紀内恒久
西原 亮・瀬川良夫

鈴木倉之助 故岡田 甫

417 目のうへの瘤へつかへる立烏帽子 素鳥

青木―主題句は、目上の者に邪魔されて「すまじきものは宮仕」の髀肉の嘆を立烏帽子で強調したのであろう。私の子供時代（昭和の初め）のいろはカルタでは「目の上のたんごぶ」であった。

佐藤―そうした俚言のおかしみもあろうが、立烏帽子は前の方が少しく深くかぶさるので、目の上の瘤が邪魔になって、それより深くかぶることができないという洒落気をモチーフにしていると見るべきではないか。作った句には違いないが、実景的要素をとりこんでいはいか。

八木―大体同じですが、立烏帽子はかぶった

様子がいかにも邪魔そうに見える、という意に解していました。

七久保―佐藤説の如く実景を詠んだものであろう。

岩田―佐藤氏説賛。「実景」と言ってしまった

ては誤りである。

鈴木―小生は函説をかけた雑俳仕立の句作とする。表は佐藤説、裏は礎稿解と見る。

岡田―佐藤説のように軽く解していました。

ですが、立烏帽子が貴人用という実証あれば礎稿も成り立つ。烏帽子に関する文献、だれがお調べください。

418 夢の世をあちにとりなす宝舟 素鳥

青木―主題句は、夢のようにはかないこの世

に吉夢を結ばしてくれる正月二日のおつな宝船がある、というほどの意で、夢・宝船の縁語仕立てのその裏にあじな姫始めを匂わせている。宝船も姫始めも一日にするか二日にするかは各自の生活設計に従ったことでしょう。佐藤―賛。姫始めまで取りこんであるとお見べきかどうか。異論もありそう。

七久保―「富士、二鷹、三なすび」の吉夢の世界に誘因するのを、「あちにとりなす」と言つたまでで、「姫始め」は考え過ぎであらう。

鈴木―「とりなす」を「取り持つ」と解すれば、やはり礎稿の姫始めまで考えるべきと思ふ。二日の夜を姫始めに結ぶのは当然の常識。この句も雑俳仕立。

岡田―同。やはり姫始めを含めると思

419 はへぬきの腰かけの有ル田舎道 雨譚

青木―「川柳辞彙」に「作り付けの腰掛台」とありますが、むしろ切株を生抜の腰掛と洒落て言っているのだと思います。野掛けにも出た折の作句かも知れません。

佐藤―賛。切株です。

西原―同。切株はヤニに注意されること。そ

こで一服などと、よいものです。

鈴木・岡田同。

420 割ルじや無い入ると木蔵だます也 丸水

青木「木蔵」は、まだ色気のつかないこと。

「割る」は破瓜。

「破る訳ではない。ただちよつと入れるだけなんだ」とまだ色気などない小娘を男がくどきだましている景 同巧の句に、

いたい事ないとむすめをくどくなり

末 16

八木「割る」という言葉は当時ザラにつかわれたものようだが、何か語感に『ブッコワス』ような響きがあるようだ。それで青木氏の「破る…」が効いてくる。

鈴木・岡田同。

421 ゆげの立つぬかるみへ傘干して置キ 車井

青木江戸は関東ローム層のため、雨の降るたび泥んこの海と化す。雨上がりの翌朝、快晴になったので、昨日の雨に濡れた傘を、未だぬかっているが、大地へ干したというののでしようか。

佐藤贊 雨上がりの地面から水蒸気が上がっている実景。下町あたりではよく見かけた

風景だ。

岩田同前。「ぬかるみ」を重く考えないで、

「湯気の立つ」を重く考えた方がよい。

鈴木諸説何れも当らず。それはうわべで弓削道鏡です。中途で抜いた傘のごとき巨大な

亀頭をさますサマ。

岡田鈴木説は非。バレ句にあらず。いろいろな場合もあろうが、数日の雨つづき、やつと晴れる。まだ少しぬかるんでいるところに

も傘を乾す。

422 い、病ひへのこはとんだ達者也 文集

青木「末摘花評釈」に「腎虚といふ病気は、すでに述べたやうに陰痿のことである。

床についてもおやして病なり 天二習3

馬鹿な病はまたぐらがむつくむく 玉3

水切れて小僧夜昼立ち通し 六九27

気の毒さ息子ばかりに脈があり 三八31

等々の句からすれば、陰痿とは全く逆な現象も腎虚と言ったのが知られよう。即ち、これは陰茎硬直症であつて、これも当時は腎虚と呼んだのである。当時、硬直症の病人が、このように事実多かつたかどうか甚だ不審である。もし相当数あつたとすれば、恐らく長命丸などという不自然な性薬の使用による被

害が原因であらう」と記されている。

主題句も、この陰茎硬直症を詠んだものであろう。

鈴木・岡田贊。

『軽口頓作輪講』完結

軽口頓作研究会（八木敬一代表）は、平成元年十一月から「軽口頓作」の輪講を行い、それを冊子にまとめてきたが、今年初夏、全二、一八句の輪講を終了『軽口頓作輪講』第四巻を刊行、全四巻を完結した。

「軽口頓作」は、江戸川柳とは異質の文芸で、題材や内容の固定化・観念化・定型化の流れに対して、日常生活にかかわるあらゆる事象が形式的にも内容的にも自由に、当事者の感じそのままに詠み込まれており、時事吟が目立っている。

なお、俳諧師として著名な雲鼓は、冠付の祖として知られ、「軽口頓作」は彼の雑俳書の代表作であり、この輪講によってその全容が明らかにされている。

秀句鑑賞

同人吟 齊藤 嘉

—8月号から

美術館出てなじめない街の昼

桑原道夫

作者がこの句を詠んだときの心情を推察しています。どんな美術品を鑑賞したんでしょう。どんな街の昼だったんでしょう。いずれにしても美術品を鑑賞してきた感動が街の昼になじめない隔たりがあります。その隔たりは今の世の汚れてしまうか。絵になる風景が、絵になる人物が、欲しい街の昼です。

飲んで喋って みんな四十八歳だ

小島 蘭 幸

「飲んで喋って みんな」という軽いリズムの表現が、四十八歳同士の楽しい雰囲気を読者に伝えてくれます。このような友情の絆は力強い。明日の仕事にも熱が入ります。四十八歳はこれからはほんとうの働き盛り、二十一世紀に希望が見える句です。

コスモスの種を蒔く手は亡母ならん

佐治 千加子

詩情豊かな句。作者ならではの感性のある表現で、ありし日の母とコスモスを重ねて亡母を偲んでいます。

晴れわたる高原にコスモスの種を蒔く手は亡母だろう。私には夢の世界のように見えます。なんと優しくさわやかな風景だ。でも、作者はもつと深い想いを詠んでいるはず。

仏壇へ我が家で咲いた句の花

吉岡 美房

生前は庭に花を育てて楽しんだ御先祖様に、我が家で咲いたお花ですと供える心くばり、吉岡家の庭の花が取り持つ先祖代々の絆にはのほとした温かさを感じました。句の花は自然の摂理、その花のもっている性質を素直に表現して咲いています。作り事でない。やはり句の花はいいですね。それが我が家で咲いた花であれば特に良い。今頃は何のお花を供えているのでしょうか。作者に見習って、お盆には庭の花で墓参をしよう。

雨天順延ゆっくり生きることにする

牛尾 緑 良

準備万端 晴れるようにと祈りましたが雨になってしまいました。やきもきしてきました。でも、中止ではない。順延なのです。あせらずに、「ゆっくり生きることにする」という作者の生きる姿勢から学ぶものがあります。川柳は、作者のものの見方、考え方を読者が学べる楽しみがあります。

娘に牛のようだと言われる。動作がゆっくりしていて、めったに慌てないからだ。

その牛が好きで、ときどき高村光太郎の詩「牛」を思い出す。それは、若い頃、学校の農場で牛を飼ってきて、牛の持つ生まれた歩き方から学ぶところがあるからだ。「牛はのろろと歩く」からはじまる詩。のろろと歩くととは、だからだと歩くことではない。ゆっくりと、しかも、しっかりと足どりで歩くことだ。

「牛は急ぐ事をしない。牛は力一ぱいに地面を頼って行く。自分を載せてゐる自然の力を信じきって行く。ひと足、ひと足、牛は自分の道を味はって行く」と牛の詩は続く。

「ひと足、ひと足、歩いた跡には句が残る」このような作句の姿勢を持ちたいものだと、牛の歩き方から学んでいる。

それぞれに歩き方は違っても、「歩いた跡には句が残る」そんな思いで同人諸氏の句を拝読した。その作句の意欲に感服の至り。秀句の多い中から次の句をあげた。

窓を開け花の宴を眺めてる

西 口 いわゑ

震災でいろいろと気苦労があったことと思
う。また、何かと忙しい日が続く中、ほっと
一息をつけて花の宴を眺めているという生活
の中の一齣をさりげなく詠んでいるところに
ひかれました。花の合唱が微かに聞こえてき
そうな、やすらぎのひととき。

陣痛も花の香となる児の寝顔

肥 後 和香子

作者の句は川柳塔でいつも見えますが、
すかっとした色彩があり、さわやかな感性が
ほとばしります。この句もそうです。そして
更に母性愛の優しさを詠みあげています。

息子とは心の奥で語り合う

西 出 楓 楽

こどもは母の姿からいろんなことを学んで
います。人生観までも。でも、それを男はあ
まり言葉にしないものです。息子さんを信じ
て生きる母としての姿勢に引かれました。

日の丸を揚げて近所に疎まれる

川 島 颯云児

日の丸を掲げる家がほんとに少なくなりま
した。価値観の多様化が日の丸にも見られる
今日的な句です。疎まれても日の丸への想い
は変わらないはず。

もう誰も泣かない保育所の五月

近 藤 豊 子

一人一人のこどもに先生は気くばりをして
います。新学期の四月の頃は、泣く子も集団
生活になれない子もいたが、五月になってみ
んな仲良しになり、一安心。保育所の五月の
微笑ましい雰囲気は素直に表現されています。

鉛筆を持って小半日を遊ぶ

高 田 美代子

鉛筆を持つのが趣味。その鉛筆を持ってほ
とんど半日近く遊んでいるという。遊びはゆ
とり、頭脳も程好く遊びます。充実した小半
日を過したことと思います。ゆとりと充実か
ら肩の凝らないこの句が生まれました。

いい笑顔の写真一枚置いておく

島 崎 富志子

一枚のポートレートには、その人の心が写
っています。きつと満足感や成就感のあるい
い笑顔でしょう。いつもこんな笑顔でいたい
という心の優しさが見えてくる句です。

口軽く五パーセントと言われても

岩 佐 ダン吉

来年四月から五パーセントになるという消
費税。消費者の怒りをぐっと抑えて控え目に
詠んでおられる優れた時事の句です。消費者
の嘆きを聞いて下さい。

万緑の中の小学生を撮り

森 川 まさお

パソコンに熱中する小学生の顔も塾通いの
小学生の顔も写真になりますが、万緑の中の
小学生のさわやかな顔は健康的に見えます。
そこにカメラの目が向いたのでしょう。それ
を句にした目のつけどころに引かれました。

柿の木が一本離村の家に萌え

高須賀 金 太

寂しい村の風景にやるせない気持を句に表
現しております。やがて伐られるのでし
ょうか、伐られては困ります。萌える柿の木は、
村の活性化を叫んでいるような気がします。

ハーブ茶に乙女の香り見つけたり

榎 山 隆

ハーブ茶に乙女の香りを見つけたという。
いつも若々しいかと思ふ作者の気持がこ
のようにすばらしい発見をして句になります。
ハーブ茶で大いに若さを吸収しましょう。草
笛でも吹きながら。

のんびりと見たいね二十一世紀

時 広 一 路

そこまで来ている二十一世紀ですが、先の
見えないものが多過ぎます。のんびりとして
られない現実。でも、のんびりと見たいね
二十一世紀。願望をもつことは大切です。

水煙抄

高杉鬼遊選

綾部市 藤田芳郎

宅配で届いた父が煮崩れる

その時は這ってでも行く住所録

珍しく意見が合った外出着

子を叱る私を嚇る血をしかる

手を上げて渡る子の目が澄んでいる

寝屋川市 籠島恵子

私しかいないでしようとお水枕

猫に手をとられて淋しがりやだな

植えているだけで効きそうトリカブト

段取りが悪いぞ今日の台所

なにをくよくよ自分を叱る我を叱る

八尾市 村上剛治

リハビリに耐えたガッツをばねにする

もう遅い船は棧橋離れたり

辛かった事は忘れることにする

修羅の海 犬かきだけで泳ぎきり

妻の肩 今日 ゆっくり揉んでやる

河内長野市 大西文次

横丁はぎつくばらんで住みやすい

東大はなんだと受験する度胸

指一本触れさせぬ娘に虫がつく

多事多端 会社倒産妻家出

女には弱い男の力瘤

和歌山県 杉山精子

以下余白 素顔になれぬ日記帳

叱られて依怙地に磨くフライパン

生きるとはかくも苦しい事のみか

深呼吸 今日埋めつくすスケジュール

悔しいが夫と喧嘩にならぬまま

能本県 高野宵草

青かったアルバム見て汗かいて

法師蟬 庭の隅から昏れかかり

遅刻した理由 目覚しに裏切られ

男性の方が厚着の街の夏

先生と呼ばば無難な初対面

唐津市 宗 弘

長雨の悪意のなさに腹を立て

ヒトだけの栄えにカラス嫌がらせ

山鳥は何処で死ぬのか深い森

真相は伏せて不始末だけ詫げる

中の下か僕の大脳新皮質

倉吉市 山中康子

子離れといともたやすく言うけれど

花の種みならいなさい落ちこぼれ

三世代のおんびり浸るしまい風呂

代償は求めぬ足しになればよい

その年になって亡姑から教えられ

羽曳野市 川田 晋

抱かれると眼鏡ほしがる孫の指

驚いた蟻に二割の怠け者

幸せでないなど欲が深過ぎる

嘘をつく辛さ覚悟でした看護

みな笑うのに笑えない遠い耳

八尾市 村上ミツ子

ねてる間もしつかり季節動いてる

都合が悪くなると煙草を買いに出る

手紙書き返事を期待してしまっ

プラスチック志向できれいな未来みえてくる

白杖へカサブランカを生けている

岸和田市 不破 仁 緑

両成敗どちらも不足そうな顔

あっさり一万歳をして波しずか

ある日突然祖母が言葉を仕舞い込む

店じまいの顔も三度まで

当たらない天気予報を当てにする

富田林市 中井アキ

器にも理由があつてよく欠ける

ふっきたころ大きな月が出る

白髪染め芝居の続き演じます

少しでも力抜いてもいいですか

約束のないまま化粧しています

高知県 桑名 孝雄

家計簿の億から下は切り捨てる

住専の手口僕でもやれそうだ

泳法はどうあれ手足動かして

孫巢立つまでは畳もそのまま

結婚記念日 年に一度でまあいいか

大阪市 和田 和風

降りてからふと飛行機が怖くなる

開運の印に替えても来ぬチャンス

原発が二つに割った過疎の村

妻というポランティアに頼りきり

消費税上げてせつせとムダ遣い

横濱市 丹下 智洋子
皺よせて笑いのネタを練る楽屋

他人事聞く相槌が時にずれ

かまうなど言われかまわず恨まれる

御先祖がひっそりと住む蔵の闇

異邦人めいた孤独を抱え込む

今治市 渡辺 南 奉

燃え尽きるまで縄をなう太くなう

手ばなすと上がる株価の摩訶不思議

究極の愛 病妻の無理を聞く

趣味なのに悩む苦しむ焦り出す

窓際の椅子が気になり出してくる

和歌山県 中村 君 枝

年金を付けて進呈されそうだ

プロの味 母はおだてに乗りやすい

ありがとう気の付く孫にしてやられ

何もかも裏目に出だす雨あがり

芸達者妻を泣かせてきた顔だ

旭川市 朝倉 大 柏

痛いところばかり親切触れたがり

常識が子とどうしても折り合わず

絵に描けば曲ったきゆうり味がある

正面に向くとはつきりとは言えず

中程で思い直した長い橋

鳴門市 八木 芳 水
書いてない日記 屋台の匂いする
心まで覗かれそうで眼を逸らす

秘めごとに使う絵の具は真つ赤なり

赤ちゃんが笑う太陽また笑い

流れ弾落ち目の人に当たるかも

東大阪市 谷口 義

安定剤のんで寝ている毒舌家

株下がり今夜のおかず残り物

葬式で同じ服着た人と立ち

出掛ける日 布団の中は貸金庫

妥協癖 壁にもたれて聞いている

横濱市 菊地 政 勝

めし前に犬に連れられ散歩する

面倒を良く見た部下に査定され

肩書きがついて名刺を出したがり

パソコンとワープロどうも馴染めない

窓際に行き全体がよく見える

横濱市 生坂 サト子

不足した土産を物産展で買う

蓮の実は遠い昔を花に秘め

店の前 噂をためす人の列

捨てられずまたしまいこむ形見分け

気まずさを笑いに包んですれちがい

堺市 宮本 かりん

出目金よ何を見たのか聞いたのか

説明が過ぎて誤解をされている

時々は疼くだれにも言えぬ傷

すまないと言うてるわりに厚かまし

雷を落とす よいしょと受ける手に

八尾市 神原 まさと

ガタの来た家を守宮に守られる

断りにきたのに昆布茶出して来る

真夏日の午後図書館へ避難する

梅雨豪雨どうか琵琶湖に行ってくれ

葱ささむ音が聞える浄土より

横浜市 長島 亜希子

パパ抜きを望んだ私パパになり

孫の絵も額に入れるとピカソ級

入社した日から勧める自社製品

期待した土産息子の汚れもの

他人には惚れた理由など分らない

島根県 谷岡 ふみ

無住寺の名もなき花へ訪れる

コンパイン予想が減った稲を刈る

赤トンボ夏の名残りを飛んでいる

台風よこころして来い病母がいる

いやなニュース多い世相へ寿命延び

泉佐野市 稲葉 洋

勇氣出し言うてみなはれ明日がある

捨て駒の度胸もなくて貧乏性

道化役 毎日やって主夫百科

抜かれてもさほどくやしき湧かぬ歳

終戦忌出征兵士死語にして

島根県 三代 朝子

ふんざりがつかず逃がした青い鳥

息抜きにおいでと友は言うてくれ

雨もよし濡れて絵になる花菖蒲

とつときの笑顔で友が逢いに来る

逢えばまた別れがづらい雨の午後

大阪府 大家 風太

使い捨てオシメにあるか母性愛

似たような愚痴聞かされる赤提灯

パンの耳鳩にやるとは許せない

女三人凄じことばが飛んでくる

クラス会ダイヤの見栄は読んでいる

尼崎市 野瀬 昌子

ほどのよいムードの中で買わされる

エリートの子は伏せて二度の職

夏布団ふんわり出来て梅雨なかば

男運悪い女でバーのママ

文句言う声が左右の耳へ抜け

内外の孫が揃うも夏休み

熊本市 北川 一進

子報から傘は持たせるランドセル

靴箱を開ければわかるみだしなみ

ランドセル小さく見える子の太り

横浜市 豊田 羊子

残り火があつたと気付く春の宵

モビールに語りかけてる気の迷い

改札で体をよじる左利き

病む友の元気が出たと弱い笑み

羽曳野市 西村 りつえ

姦しく笑い転げて梅雨を蹴る

梅雨晴れ間ころ干したい竿がない

箱の隅 旧姓印が眠ってる

たっぷりと時間があつて手抜きする

和歌山市 楠見 章子

パピルスとはるかな時を測る

定年退職 朝のトーストやつと慣れ

嫁かぬ娘の叩く太鼓のかたい音

急発進こっち来るなと睨みつけ

柏市 上鈴木 春枝

無防備な微笑みふつとしてしまひ

君探すヒント下さい迷い道

告白へ明かりを消してくれまますか

恋の数だけの指輪を持つている

親不孝おやじの歳を二つ越す

辞表書く墨で山水描いてみる

少年よ父と人生語ろうよ

最後かも知れん血圧高すぎる

堺市 たにひらこころ

夏帽子風にワルツを誘われる

母に逢いに行きます丸い風が吹く

女には女の事情ある港

恋してる黒い洋服着たくなる

和歌山市 木村 初子

なにごとにもプラス思考で跳ねる老い

ふるさとに母あり届くゆうパック

ダンディーな蜻蛉胸張り羽を張り

激辛のカレーで今日の幕を引き

鳥取市 徳田 ひろ子

エプロンのポーズに今日も負けている

チンの音とても嫌いな台所

右往左往して台所はなやかに

台所おとこを光らせるために

大阪市 小林 周信

雷鳴を肴にしてる縄のれん

好きな物ついとりすぎるバイキング

逆らわず余生送ろう風見鶏

貰うのも情けとティッシュ二つ三つ

富山県 増田 紗弓

巡視するライト病魔を追うように
なあなあで暮らすとついてくる脂肪

マネキンが断っている試着室
サンングラス アバンチュールを呼ぶ浜辺

神戸市 船津 とみ子

思いの昭和を抱いているわたし
言付けのメモを園児が覗き見る

地震でも夫は夢に現われぬ
新しい傘さして行くいい雨だ

八尾市 平川 幸枝

朝刊の向こうのパンが消えている
結婚も離婚も決めたのは浜辺

話さない女に虹があることを
リフレッシュ夜のバックの自己暗示

今治市 塩路 よしみ

風に遊ぶ綿毛へ少し嫉妬する
猫の足拭いてあげます月あかり

鶉呑みには出来ぬとてつもない話
詩集繰る午後はわたしの時間です

新潟県 高野 不二

晴耕が続いて本は積むばかり
確率の半分当てにしている雨

酒よりは遠慮しいしい呑む煙草
保険金満期で取ってから死んだ

静岡市 小木 久子

人生の戻り道で古希半ば
公園のブランコ揺れて白昼夢

度の過ぎた妬心自分を見失い
愛を盛る皿まっ白がよく似合い

岸和田市 磯崎 弘象

定年になって益々嫌われる
理髪屋さんしばらく話しかけないで

騙される方も悪いよ欲の皮
タバコ止めた人がJT株を買う

河内長野市 水谷 笙子

言い過ぎた娘が持つてくる西瓜
茶髪から席ゆずられて落ちつかぬ

ジョギング中トマト帽子に入れてくれ
夫婦別姓 花火ぶすつと先送り

静岡市 大村 正雄

ロボットの動きしばらく見とれてる
充電と言って一本追加する

お土産は帰ったあとで値ぶみされ
銀行の団扇片手に盆踊り

静岡市 佐藤 次枝

母逝って診察券の名が空し
家事手抜き趣味にうつつの夫の留守

話し合い互いの意地が邪魔をする
何時の間にこんなにな強くなった女

鳥取市 植田 一京

雨の日の洗濯物に愚痴を言う

少年の本棚マンガだけ並ぶ

親の目で見ればどの子も不肖なり

アルバムの中で絆をたしかめる

和歌山市 福重 美子

定年後妻がストレス溜めている

リサイクル母は古着を捨て切れず

寝てる間に機械まかせのお洗濯

札束になりそこなった券が舞う

尼崎市 田辺 鹿太

手柄にもならない父の武勇伝

楽をしてうまい酒などあるものか

飽食の視野に汚れた海がある

男はつらい下手に泣いたら笑われる

横浜市 伊藤 ふみ

リサイクルして生き返る粗大ゴミ

顔のしわひとつすじ毎に増す魅力

蠅たたき蚊たたきとなり生きかえる

一匹の蚊に拍手をうつごとく

大阪市 池田 一男

篝火に鶴の生きざまのもの悲し

安楽死のきれいな言葉氣にいらぬ

税金ががぶりと齧る預金帳

親譲り所詮息子もこの程度

島根県 武島 ちよえ

怒りっぽい人に飴玉含ませる

人間の輪です伸びたり縮んだり

じゃんけんで決めたことです諦める

覚えてるうちに新語は使わねば

和歌山市 古久保 和子

一番電車に担ぎこまれる海の幸

一枚の田圃を守る丸い背な

羅漢さんどこかでお会いしましたね

夏まつり金魚は疲れきっている

福岡県 本田 忠男

常識を迷わす灯りネオン街

救急車 海鳴り遠くとおくする

新聞は斜めに読んで靴を履く

梅雨晴れの少し散歩に無理をする

大阪狭山市 伊藤 尚子

うちの孫美人じゃないが笑顔好し

お日さまに笑われそうで仲直り

橋桁がぐらつき出した老い之道

長い列 私の前で締め切られ

米子市 小塩 智加恵

今亡父がいたら言うだろ努力せよ

エアコンが品薄ですと家電店

勘とささえ やっぱり妻は悪女です

飲んで寝るこれでやせると言うチラシ

今治市 渡邊 伊津志

十和田市 阿部 喜久江

神主の太鼓は銭になる響き
幸せの背中合わせを齒痒がり

無理するな言うていながら無理をさせ
農を継ぐ娘大卒連れてくる

境界を無視して雑魚が生きのびる

赤ん坊 土産のように抱かされる
雑魚同士仲良く群れて泳いでる

砂浜で扁平足を見破られ

和歌山市 木村 親路

富田林市 藤田 泰子

ロマンチック街道を行く一人旅

今までも何とかなって生きてる
適当に曲がって屏風立っている

看板は歪んだ時計ダリの店

通帳の残高を見て倒れそう
妻はまだ母の同居にうなずかぬ

アランドロンに出会えなかつたりオン駅

大阪市 立蔵 信子

睡蓮の精に出合ったモネの部屋

成田市 齋藤 房子

熱帯夜 足のうらから燃えてくる

ペランダから逃げだすつもり蔓が延び
どの蟻が号令かけているのかな

雑魚の群 赤ちようちんへ吹き溜まり

山と雲どっちも高さ気にしてる
パラソルをパチンとひらき夏が来る

秋ですよ蝶が耳打ちして回る

八尾市 與田 明

マネキンのえくぼに無駄を買わされる

犬山市 早川 盛夫

騙そうとする手に違いない握手

あちら立てこちらがたたず基地移転
文化財 仏の傷が未だ癒えぬ

欲張りか無欲か市街地の畑

黙秘するひとすじ縄でいかぬ人
そのうちに空気に税もかかるかも

オーナーが下足番とは良いホテル

紙コップ医者も重宝しています

大阪府 澤田 和重

回らない寿司に子供がなじまない

待つ人がいない日脚は遅々として
和歌山市 森口 美羽

嫁がない娘が店の顔になる

生きてゆく視点へそっぽ向いたまま
現実に戻るときめき醒めてくる

孫にした入れ知恵どこか抜けている

働く気あるが制限されている

誘われてすぐに飛びつく癖がつき

家庭菜園 収穫頃は最安値

梅雨晴間 洗濯竿が不足する

雨続き足踏みだけのウォーキング

夜半の雨 明日の予定が狂い出す

年金の歩幅足踏みばかりする

明日はあす無い袖ふれぬ昼の月

下積みの汗を煮つめて燃えている

雑草でよい金婚の旗をふる

老人は割引それはそれなりに

田舎怪医者と僧侶の話しこみ

診察券いまは昔の迷子札

達筆と言われてからの字がふるえ

曲げて話す友の言葉も丸く聞く

どの子にも孫にも負けた背の丈

死ぬ時は一人と思ひ背を流す

老いの愚痴こぼす間もない曾孫守り

底辺を歩いてゆとりある余生

笑顔にも営業用とてれ笑い

傘貸して欲しい牡丹が重たそう

子に残す金のなる木はないけれど

唐津市 浜本治幸

兵庫県 北川とみ子

大阪市 尾崎黄紅

岡山県 富坂志重

高知県 百田幸

寝屋川市 森茜

日立市 加藤権悟

鳥取市 福田登美

八尾市 鷺見章

島根県 槻谷仲子

大切なもの無造作におき独り

ぼつねんと地味が目立っているばら園

生駒山けむる日傘を持って出る

シースルーきわどい胸をカバーする

打算など無いとうさんの太い指

八月の空に昭和の罪を干す

進めすすめ凍土にねむる父の骨

昭和史を綴ると疼く日章旗

隅々で住専ボヤが燃え上がる

母さんが病めば家中暗くなる

役員会 意見は小物だけが吐く

夏祭り流行るゆかたに下駄もいい

荒唐無稽 夢なればこそなればこそ

雨しみじみ人は来し方振り返る

うつの日の悲しい顔がある鏡

仕合せになる木一鉢買ってみる

三猿も世間の事を知りたがる

夫の留守フル回転のお洗濯

仏だんのメロン程良く友来たる

紫陽花の虜になった雨の午後

高知県 高知県 細木子龍

騰出しのコギヤルに贈る平和賞
鳶にも選ぶ権利か空を舞い
仕掛人いそいな土佐の太い雨

尼崎市 長浜澄子

空想を打ちひしがれた大欠伸

赤鉛筆ころろ変わりを知っている

おたやんの面を重宝しています

和歌山県 中後清史

風の彩ちと見えてきて古希となる

鬼が来て寝ている老いの尻叩く

マネキンも恥ずかしいだろ衣替え

大阪市 中井正秀

大正は片意地張って生きている

ポケベルがデートの邪魔をして困る

むこ殿とふざけて言うた亡妻恋し

倉吉市 大下智子

「おい」「あれ」で用事がおわる農作業

左手の指輪はずして主婦を脱ぐ

何事も反対をする夫です

兵庫県 仲井素水

ひと夏の恋競い合う蟬しぐれ

一律にヤモメも貰う夫婦箸

無心ごと豪華な椅子が深すぎる

島根県 森茂美

縄のれん昨夜の傘の義理立てて

被災地にまたも孤独な死亡記事

振り向けば彼もふり向く旅の街

河内長野市 柏本靖子

街の風運んでくれる帰省の子

躓いてばかり終点までの道

台所磨くわたしの城だから

富田林市 欄智久

かと言って隣の急患放つとけず

古里は良いものであり旨い水

胃カメラをのむ日血圧上がりそう

和歌山県 吉村さち子

CTに疲れた脳を見透かされ

従姉妹会どこから見ても似た小鼻

自由化の波に米屋が有りふれる

寝屋川市 坂上高栄

溜息か鯨時々潮を吹く

ごみ溜まる文化国家の泣きどころ

食券を半分ちぎって待たされる

羽曳野市 山本たけし

九条を明日の世界へ広げんか

尻尾ふるポチに忘れたバス時刻

足して二で割れば何とかなる世界

梅雨晴れ間 空気美味しい庭を掃く
おもてなし阿吽の呼吸嫁姑
知名度の順にキープのボトル棚

唐津市 山門 幸夫
山門 夕ミ

薬効を聞いて西瓜の種も食べ
親しいが八分打明け二分は秘め
梅雨晴れ間 主婦は夕方ダウンする

唐津市 福島 紀一

こんなはずないが動かぬ筆の先
夜の雨聞きつつ今夜眠れそう
遺言状他人ごととは思われず

唐津市 山口 ふさ子

石女も母性本能持ってます
0157 暴れる訳はストレスか
ライバルにお洒落先どりされて夏

阪南市 正橋 正

目線下げ心眼だけは上向ける
旗幟鮮明まだ隠したい白い杖
条件の不利に耐えてる深海魚

富田林市 大橋 鐘造

凭れ合う野仏を見る嫉妬心
児をあやす顔は他人に見せられぬ
代替り手ぶらで行けぬ里のみち

頂上でパノラマを追う風は秋
いい汗をかいて麦茶の旨いこと
四肢奔放 伸ばして孫の夢心地

大阪市 三浦 千津子
高槻市 江原 秀夫

新品は嫌いけちではないと妻
急患の余りに多い待ちベッド
妻は旅 日ごとに自信つけて家事

沖繩県 杉谷 一栄

偶然に鳴ったおもちゃが好きらしい
断ると只ですからは失礼な
へびよりもゴキブリが出てぞつとする

和歌山県 藤井 春子

梅干しも紫蘇のさそいで冴えてくる
夏草に今日の休みをかり出され
ちぎり絵に女の意地を燃やしてる

倉吉市 高多 博丈

よく冷えた西瓜がぶりと夏を食う
夏祭り年に一度の浴衣着る
さよならを振切るように発車ベル

姫路市 服部 一典

公聴会ただ聴くだけにとめておく
サンドイッチの中味が勝負上司部下
雨の日を知らせてくれる神経痛

兵庫 谷田多美子

糸トンボ露の匂いをつけてくる

足腰の痛みも何のシャルウイダンス

虫食いの野菜を選ぶ朝の市

倉敷 家守政子

井の蛙一発勝負賭けて見る

ホーナヌも休業もないわたし主婦

体力を備えておこう介護の身

東京 瀬戸きん子

ねじ花の色褪せてから芝を刈る

信楽の狸首だけ惚れてやる

貯蔵瓶また買い足して梅を漬け

札幌 三浦強一

開店も閉店も見た招き猫

榎山へ山菜採りに行ったまま

要領が悪くおろおろ生きている

富田 山原昭水

自分史にチキンライスの恋も書く

きつねうどん食べたくなったマウイ島

老人会誘われたけど断った

宝塚 飯西ミサヲ

極楽の余り風にも優良可

カーテンも畳も替えて祭待つ

弁解を考える間の深呼吸

鳥取 国森武子

法のみくぐる男の多いこと

おしゃべりが居なくて今日は村静か

雨の日は母ゆっくりと茶をほうじ

鳥取 杉本孝男

子の顔を忘れあなたはどなたかな

隣とのけじめに太い杭を打つ

罪深い女よその気にさせておき

唐津 岩崎實

梅雨らしき一日一日の雨蛙

辣韭のにおい好き好き部屋に充つ

虫の声 小鳥の声と野を歩く

唐津 市丸晴子

まないたの朝餉の音もセピア色

父の背の矢印ばかり追うて来た

僕のをテトラポットが遠くする

唐津 松本圭

ダンボール箱 地下街に城がある

カラス舞う今日はゴミの収集日

おむすびに巻いた高菜の葉の青さ

鳥取 原みさを

ビール瓶の汗に祝辞がまだつづく

母さんの胸に原始の海がある

もう一人の自分さがしの旅に出る

兵庫県 高見末野

目の裏で悔し涙は倍になる

割り勘へ飲めぬ女も交じってる

灯を消して今日をゆっくり巻き戻す

弘前市 櫻庭順三

人垣にときめく滝を隠される

待ち焦れ待ち焦れたる山の彩

まだらばけ時差ばけ神のおぼしめし

今治市 村上久美子

線路に石置かぬカラスも憎まれる

どっちにもつけず両方怒らせる

恰好いい男は見てるだけでよい

米子市 猪森スミエ

手火花が笑いころげて水に落ち

二重丸パパにあげたいキャンプ場

御先祖のお帰りを待つ青畳

大阪市 亀井円女

御時世か孫の拳式も海の外

素直です本音一途に生きてきた

本当の事を言うては嫌われる

松江市 佐野木みえ

梅雨さなかカサブランカの香に和む

今だから反面教師の父想う

梅雨明けて旅行プランの活気づく

尼崎市 森安夢之助

大波小波夫婦で漕いでいる小舟

不用意の一言蜂が騒ぎだす

ライバルを視野に派手目の服を着る

鳥取市 坂田和歌子

紫陽花の水滴に酔うカタツムリ

野仏の吐息聴いてる座禪草

いやらしい梅雨だがこれが自然なり

兵庫県 大谷幸次郎

エネルギーの塊だった母細る

見せかけの親孝行が汗をかく

札束が功德を積んだふりをする

高槻市 小林一完

感動はするが終れば忘れてる

眠られぬ夜の時計は進まない

おおらかに生きよう余命気にかげず

鳥取県 山本正光

みんなと諸行無情の蟬が鳴く

爽やかな慈悲ありがたや弥陀の笑み

付き添いの看護睡魔が来て困る

熊本県 増田一乗

娑婆の義理 今年初盆三つある

テイケアへ行くが生甲斐化粧する

コンバイン使うは男女へだてなし

大阪市 福岡雅子

集まりに居るだけでよい好きな人
同舟のふたりそれぞれ別の岸
乾杯の輪から抜け出た影ぼうし

和歌山県 村中悦男

悪妻といいつつ男寿司を買う
野良仕事終えてビールで生き返り
冗談が通じたらしい顔になる

横浜市 荒井広和

静寂の音風景の中で座す
三度まで笑顔で聞いてやるゆとり
リストラの舌が尻理屈まで吞ませ

愛媛県 安野案山子

相部屋の重病患者喋らない
消灯が早いベッドで目が冴える
消灯の闇へ傷口疼きだす

横浜市 明渡トヨ子

図書館で今日も実りの日を貰う
ヘップバーン老いた姿も魅せられる
紫陽花が浮いた噂に色を変え

島根県 菅田かつ子

どしゃ降りでも休みもらったシヨベルカー
何時の世もままごとが好き女の子
顔ばかり塗って踵はほつとかれ

豊中市 岸田知香子

家事忘れ夫忘れて一人旅
初めての三泊四日一人旅
そろそろと覺恋しい一人旅

寝屋川市 酒井勇太郎

定年を親の介護が待ち受ける
七転八倒 誰も同情してくれぬ
営業マン電話持たされ走らされ

鳥取市 福永ひかり

死生観いまだ確かなものでなし
喋り過ぎ何を言ったか残らない
叩かれぬほどの出方で生き残り

藤井寺市 鴨谷瑠美子

ひとり言 影は聞き手の日向ぼこ
下手な恋 傘は上手に折りたたむ
気の毒ねわたし貴方を離さない

千葉県 大川晚翠

祭太鼓 乙女ふともも競い肌
機械ローン終わりの頃に修理する
釣り人が帰ってからに鮒が跳ね

香川県 田中ふみ

梅雨上がり雑草の命をふと思う
かも知れぬ一言欲しい老い一人
やりくりが下手で咲かない女坂

鳥取市 山本 崇
イヤリング バイバイごとに揺れている

足腰の備品が痛む年となり
のんびりも二日もすれば肩が凝る

兵庫県 円増 純子

草萌える乳牛の瞳のやさしさよ

井の中の蛙世渡り下手なまま

落書きのようなサインを拝んでる

寝屋川市 太田 藍子

石切さんのお札重なるご親切

女三人パツと決まった旅プラン

シンザンの余生故郷の空を駆け

大阪市 川内 叭笑

安楽死 倫理促す弛緩剤

肩車した子に今は背負われて

病人も親子も孫も消費税

横浜市 清水 潮華

客足の減る大雨を慈雨と言う

席順のミスを信じてもらえない

口紅を落さず歯科の治療台

高槻市 乙倉 武史

早起きの付けは昼寝で取返す

飼い主のマナー喚起の回覧板

免許証 身分証明だけの役

和歌山市 武本 碧

イエスとは言えずノーとも言えぬ仲
花はみな自分に似合う色で咲く
似てほしいところは似ない親子の絵

神戸市 向井 泰子

古い傘二本を干して梅雨あける

散らかして良妻只今長電話

それなりにこの世の旅の写真集

今治市 越智 青園

自信ある時はじっくり腰かける

成績を見くらべられる貸農園

ゴミの日は心の塵も捨てに行く

愛媛県 中居 善信

背伸びする男の見栄を笑えない

血判に似た寄せ書きにサインする

銃を手にとった歴史を振り返る

今治市 中村 好恵

ほめ合うに遠慮はいらぬ二人きり

価値観のちがいが悪気はないのだろ

双六の一回やすみまだつづく

鳥取市 森 明美

雲行きへ黙ってお茶を入れ替える

6Bの芯が怒りを許さない

単身赴任妻がかえりに生けたバラ

横浜市 川島良子

活躍の友から刺激剤もらう
偏差値で振り分けられぬ人の価値

親離れしろと子離れできぬ親

横浜市 保田絹子

可憐さと肥満を競う水芭蕉
七夕の月下美人も今宵きり
逸る気の腹式呼吸整わず

松江市 松本知恵子

中年になってこだわり軽くなる

重い話題でヒロシマの喫茶店

雨季続くノラのいのちに雨が降る

兵庫県 安達厚

定年で遊び上手は妻と知る

気苦労がない幸せでよく眠る

続けてるうちに明日が見えてくる

米子市 池尾保子

カンニングするエンピツはすぐ折れる

八月は御先祖さまに会える月

まだ生きていたかと山にはげまされ

鳥取市 山宮愛恵

願いましてはご破算ばかりマイホーム

退職後妻の電気がよく光る

台所わがままひとつ許される

和歌山市 水田秀男

少しずつ日本は沈みかけている

満天の星にも悩みあるだろう

アメリカに守られている平和論

八尾市 山本宏

実りなき月夜の蟹の横歩き

タコヤキとカンビール買う夏祭り

リストラで賞味期限のきれた椅子

堺市 井崎ミサ子

すぐそばにある幸せが見えにくい

転勤のたびにふる里増えて来る

いつまでも世話焼きたがる親を持つ

大阪市 杉澤汀

楽な道選んで出口わからない

愛染明王ゆかたの二人お見とおし

蓄えと暮らしと寿命噛み合わせ

横浜市 金森徳三

刈り込みの袂が止まるかたつむり

梅雨晴れを待つてふとんが叩かれる

知らぬ児がふえた浦島桃太郎

和歌山市 津村武春

夢で見る程度の恋はすぐ冷める

逢う瀬また雨が邪魔する星祭り

好きな酒飲みなはれとは名文句

砂川市 武田正美
惚れました生きてく勇氣湧きました
生きている浮世の風が有難い

紫煙との別れ未練がからみつき
米子市 林風子

もやもやと地を這う思考力の鬱
見上げれば昼夜いとわず昼の月
ワイン一本 女五人で桃源郷

鳥取市 田中友子
思い出の中に何度も桜咲く
ふんざりがついて桜も散り終える

椅子とりの陰に内助の妻がいる
尼崎市 的場十四郎

任すとは言わず合鍵そつと出し
父の日の朝に届いた宅急便
同窓会ムードに乗らぬ奴もいる

大阪市 島崎孝一
日本中みんなで渡りバブル裂け
保険証 優待証が躍る腰

人形と会話している孫樂し
寝屋川市 井上すみれ
消費税5パーセントがやって来る

痛いほど解りますとは電話口
野茂さんが負けたニュースはパスにする

秋田県 湊修水
変ですぬ炬燵で暑中ハガキ書く
胸張って復興くじを買いに行く
なが梅雨に紫陽花の絵も濡れている

大阪府 一本勇太
無位無冠 恩給通知笑いよる
正論へ拍手が来ない爛ごまし
瞳を描けば名前が欲しい紙人形

大阪府 平井露芳
復興へ一億円の夢も買い
秀吉展 縁ある土地はどこもやり
日曜日料理手抜きで売れる寿司

鳥取県 橋谷静江
縁あつて繋いだ両手放さない
健康を噛みしめる歯を修理する
還暦を迎えうれしさ悲しさよ

羽曳野市 三好専平
広告の裏はわが家のラブ・レター
「シャル・ウィ・ダンス」高齢社会楽じやない
ワンという芸一筋で生きてます

高槻市 傍島克治
定年が留守番ばかりさせられる
よそゆきが大阪弁になる電話
リストラにとかけの尻尾羨まし

月見草だけを残して草を刈る
島の光を放つ螢谷
島根県 児玉幸子

笹まきを届けてくれた娘に感謝

鳥取市 岸本孝子

リハビリに歩幅合わせてくれる妻
七癖が好きになるほど身をこがす

コマーシャル見れば髪の毛生えそうだ

岡山市 山磨行子

落ちこぼれ磨けば光るものをもち
いつ来ても大山やよし抱いてくれ

目の中の孫の話に乗り遅れ

鹿児島県 大山舞鳥影

お役所の窓口にある昼休み
不眠症とは違う徹夜で深夜使

休日は乗り降りなしの無人駅

兵庫県 西井つや子

土臭い手で書く一句嘘はない
長い雨暇もてあます夏帽子

高い木に止まりたがっている小鳥

箕面市 木村天弘

悪天候戻る勇気の登山靴
内部告発とても勇気な正義感

愛してる山に召されて帰らない

彼岸花 赤一色を信じきる
釣天狗 奥の手までは教えない
登山道みんな仲間に見えてくる
鳥取市 岸本宏章

別姓で夫婦のおもい異にせず
坊ちゃんの団子にもある色の順
働いた評価を言わずけむたがり

愛媛県 宮本末子

妻の掌の中で握られてる老後
正義感燃えるわたしを目の敵
苦勞した親の背中を子は知らぬ

海南市 谷口義男

必要な横文字苦勞して暗記
機内食ゆらゆら味もとんでゆく
ナイトサファリー闇をすかして豹にとら

枚方市 森本節子

髪染めて心も染めて浮かれてる
出向に家族が揺れる英会話
今からね居留守になると妻に言う

吹田市 西岡豊

三人寄れば口さがないと自戒する
孫ならぬ子等に戦前また聞かせ
力なく飛ぶ螢はや夏も逝く

鳥取市 津村静枝

掛け捨てて今年も安堵癌保険
背を叩く奴は作業衣着た社長
良妻と妻を褒められ水を飲む

お見合いの別居条件宙に浮き
停年の挨拶頭下げてきく
ぶらぶらと丸い話をさげてくる

松江市 松浦 登志子

和歌山県 上岡 正直

現世に酒と女の未練あり

平凡に演技もせずに生きている
早苗田をゆっくり過ぎる白い雲

倉吉市 田中 八太郎

百人が運が悪いとネズミ捕り

厭な奴 相手もたしかそう思う
丁寧な言葉で荒い人使い

河内長野市 木太久 正一

先生の週休二日よい話

菜園のゴム長二足履き潰す
苗一本二十五円のさつまいも

出雲市 園山 かおる

お庭にも頑固な石が置いてある
障子張り畳を替えるおめでたさ
隙だらけだから人から愛される

大阪市 鈴木 トヨ子
ハイヒールお尻ふりふりビルへ消え
臨月へそろそろ帰省急かす母

孫の相談ばあちゃんすぐにのつてくる

尼崎市 軸丸 勝巳

北斗七星まだありましたくにの空
いちいちに顔いている善人だ
生涯学習 乙女に還るメモをとる

鳥取市 石上 悦子

パパ車ボクは三輪車を洗う
疲れてる時はよけいに片付け魔
掃除機の餌になったか無いボタン

池田市 木村 一笛

一しずく母の涙で強くなる
鉛筆の匂いが残るさくら組
ブランドの空財布見せ金を借る

寝屋川市 太田 とし子

頼まれもせぬことだのに腰が浮く
いい時はこれも御縁と茶にさそい
早寝早起きじやまにならないだけのこと

東大阪市 今岡 貞人

口開いて言いたいことがある埴輪
三猿を守る奥歯を軋ませて
小六法開き隣の枝を剪る

連休を五月の彩に染める鯉
チャリティーのバーゲン園児弾んでる

岡山県 土居 ひでの

松江市 小西 素子

丸々と太った猫と語り合う

松江市 浦辺 静江

本を綴じ闇に向かって深呼吸
塵一つ見つけそわそわへんくつや

愛想で持てた看板少し老け

東大阪市 松山 隆

“螢川”読んで螢の灯にふれる

無信心 郷に従う指の数珠

兵庫県 藤本 芳乃

まっすぐに歩道歩けば花が呼ぶ

子の定年気になる老いのアドバイス

泉佐野市 大工 静子

凜とした目 八十回の夏至の朝

お互いに老いを見つめる犬の目と

豊中市 湯田 敦子

なまけるは安きことなりコーヒーのむ

街道を行けば想い出ついでくる

鳥取市 山本 益子

退職が今日振り出しの道に立つ

人生を欲望連れて闊歩する

雨しとど日暮れ時間を狂わせる
水屋の声も涼しく宵祭り

出雲市 加藤 スズコ

一病を持って農業抄らぬ
我が子にも血液剤をうてば良い

鳥取県 奥田 信敬

ストレスを消す口実で酒を飲み
二次会に行くには財布軽すぎる

滋賀県 中 宗明

モロヘイヤ苦みと粘り老いの糧

伊丹市 延壽庵 野鶴

震災でこころの位置も少しずれ

鳥取市 倉益 一瑶

がまん袋女は強く卵割る

讚美歌のうまい男で肩がこる

出雲市 川島 和歌子

初孫は蝶よ花よと手から手に

恐山 賽の河原の石地藏

羽曳野市 森田 四三郎

番組中断くだらないコマーシャル

外出着センス悪いと妻の口

兵庫県 西山 八重子

それからの話にはほしい春の酒

ピンボケで終る人生だとしても

飾らない言葉訥々胸を打つ
連休にこつこつ貯めたお金逃げ

静岡市 増田扶美

いい事を紅さし指が知っている
わき役がいいから目立つ鉢の花

大阪市 川久保睦子

雑巾に諭されている粗大ゴミ
梅雨しとどやがて感謝の水飢饉

和歌山県 尾田綾子

吹田市 野下之男

陰日向なくて時には損をする
映画なみ素直に出ないアイラブユー

榎原市 西本保夫

大物ではないと自分で決めている
くり返し老女の苦労話聞く

高槻市 執行稲子

テスト前クイズで眠気アウトする
スカーフ一枚風邪のウィールス ガードする

尼崎市 向井末貞一

一瞬は真っ暗闇の救急車
帰り道苦笑いする石を蹴る

尼崎市 河津正治

乱してはならぬ絆の三世帯
新築の家で枕が落ち着かず

古の匂いただようなすび漬
遠くから見つめる山は変形し

和歌山市 和田美寿子

泣きに来た娘の背ゆっくり流し合う
油断して味方失う回り椅子

兵庫県 森脇和子

こぼれ米 庭の小鳥に撒いてやる
草むらへふんわり逃げる恋ほたる

熊本県 岩切康子

手土産を忘れた後の下り坂
稔る実をもぎ取るように娘が嫁ぐ

横浜市 後藤早智

見た目にはうまさうなのに毒茸
頭痛持ち梅雨の晴れ間に笑います

倉吉市 山本玲子

花柄の傘がスキップして通る
よう言うてくれたと小言喜ばれ

羽曳野市 芦田絢子

笑い皺 悲しいときも笑う癖
飽食に成人病という報い

弘前市 今生恵子

ゆっくりと遺跡の謎を探るへら
縁薄く祖国は遙か大地の子

寝屋川市 瀧本八十八

静岡市 中西 雅

大家族飾ることなき母の顔

点滴の落ちるをみつめ長い時

豊中市 みき わきみ

ライバルに勝ったは酒と長生きと

リストラに万骨枯れてなお赤字

羽曳野市 安芸田 泰子

電線に音符描いて鳥の歌

逢いにゆく日傘くるくるよく回る

横浜市 上野 天々

年金は隔月給で税は日々

狼に番を頼めば高つく

鳥取県 藤山 弘子

梅雨明けが待ち遠しいと子沢山

縁起よい日は忙しいフアクシミリ

鳥取県 権代 康女

狭い路地 助手席なれど気がつかれ

梅雨晴れがほしいスイカの雌花咲く

羽曳野市 徳山 みつこ

すがる目の父と指切りして帰る

はじめての家でおかわりした麦茶

島根県 松本 聖子

一人では支えきれないこと多し

病院の屋上カラス遊んでる

島根県 福岡 博利

兄弟会 靱摺り話に夜が更ける

歩けぬと言う友見舞ういわし雲

東大阪市 北村 賢子

団欒の椅子一つずつ減ってゆく

まなざしがすべてを語る恋ごころ

枚方市 二宮 紫鳳

人間が好きですイヤ味ない笑顔

丸い人ばかりで会がまとまらず

大阪府 団野 恒

古稀も過ぎ刻の流れも早くなり

会い別れドラマ見ている花時計

鳥取県 吉田 孔美子

九十二歳にそこを喋ってもらいたい

芯なぞり大事なものに行き当たる

徳島県 安宅 美代子

出稼ぎの父があか抜けして帰り

雑音の中で心の糧拾う

岡山県 国米 きくゑ

古稀の坂まだうろうろと迷います

よく効いた釘もだんだん錆びてくる

松江市 安食 友子

自販機が看板娘消しちゃった

呼び鈴で空き巣がテストするそうなる

前ふれの二重封筒届けられ
醬油瓶 別誂えて旅をする

米子市 服部 朗子

たのしさはわが人生の昼寝どき
老化するこの身に活を入れてくれ

広島県 森川 抜智

雨蛙今朝から其処を動かない

出雲市 浜 啓三

また聞きの悪口持って茶をよばれ

鳥取市 藤 ふうこ

へそルック夏は蛙ですごします

和泉市 横山 捷也

兄弟の会話 老父の歳のこと

池田市 藤井 計光

若草に大の字なやむことはない

兵庫県 上月 梅村

透明なカーテン隔てる夫婦仲
本心をちらりと見せて策を練る

堺市 志田 千代

おだてられ主役になって恥の汗
親を看す財産だけは取って行く

傘ひとつ忘れぬ人も気づまりな
偉人伝キラキラ光る母の影

のんびりと夫婦善哉医者通い
吉報の子感持たせる先祖さま

鳥取市 富山 雄幸

古寺の新霊園を下見する

交野市 山川 日出子

この日傘ハワイの海の匂いする

伊丹市 榎谷 郁子

群れて咲くバラの悲鳴が聞こえそう
具合どう寝ても醒めても問う日課

大阪府 奥野 義夫

タイムカード今日一日を売り渡す

和歌山市 山根 めぐみ

夜が来る やっぱり眠るほかはなし

岸和田市 亀井 皎月

スランプはなにさ地球のまわる音
豆煮たの魚焼いたのと立話
早よ死ねと言われてハイと言えますか

今治市 野村 清美

さらさらと何の苦もない砂時計
ひとり者テレビ見ている食べている

鳥取県 高尾 京

初孫のように育てるミニトマト
再就職 出勤の子を送る朝

岡山市 清水 金太郎
未だ元氣決つた日には医者へ行く
恙なく暮せば他人は氣にいらす

西宮市 井上 俊二

誘われて見よう見まねの盆おどり
影法師ついて来てくれ日暮れても

大阪市 宮本 奴夫

古希読書 沙翁古典に回帰する
時代劇だけが素直に観ておれる

出雲市 榎 ミツエ

あじさいに居すわっている青蛙
ランドセル影ふみをするはしやぎ声

八尾市 高橋 明子

線路石 誰をうらむかカラスの子
女とは産んで育てて貰てんか

島根県 岩田 三和

不景氣じゃないよ安定しただけさ
核デンキ使う真夏日肌白し

唐津市 林 公一朗

国民に知られて困る銭の道
議員には嘘発見機取り付ける

尼崎市 中澤 向西

卒業まで医者に任せて生きてやる
天と地がどう変わると子に任す

米子市 永井 三津子
九官鳥 祖母とお経を唱えだす
平日の休み得した気で遊び

高知市 桑名 知華子

繰り返す波に悩みは溶けました
許してはるはずの心が落ちつかず

宝塚市 黒台 伊佐武

一度二度捨てた命だ恐くない
それで良い子は子で在って親は親

香川県 神保 坊太郎

急がねば今日の私がいなくなる
信じると桃が流れる川になる

横浜市 河崎 マサ子

旅のこと足にたずねる歳になり
孫がする耳打ち綿毛のような息

兵庫県 中野 とよ子

エリート視線はいつも上を見る
開店につられ長蛇の列にいる

(前月分) 吹田市 野下 之男

猿真似も風格が出た次郎君
干天に慈雨というのは年金日

▽**芳志**拝受△ 西口忠雄氏(和歌山市)のご遺族、
重雄氏から供養として金一封拝受しました。川柳塔社

沙湖抄

小出智子選

終章や残る鱗を剥ぎ惜しむ

川の流れに藻となり女の髪となる

甕が醸してくれるわたしの音楽

体温を頒け合う森が病んでいる

晩節や何もおらない金魚鉢

湯につかる胎内回帰するように

わたくしは元少女です事実です

自分史をひらくと猫があくびする

積み上げた本から油虫が走る

原流を辿れば亡父に近づける

二度三度芯を摘まれて来た男

鳥の巣はうまい空気のあるところ

卯の花に長つづきせぬはしやぎぶり

定年離婚が頭をよぎるバラが散る

野良猫の口舐めずりに似た敵だ

傷口にことさら触れたがる鳥

旧套をじつと温めてばかりいる

お見舞に行かないことも思いやり

三人が三様に聞く雨の音

風の匂いを運ぶ息子の高い背な

宝塚市 永田 暁風

米子市 林 荒介

守口市 森川まさお

横浜市 丹下智洋子

神戸市 船津とみ子

砂川市 大橋 政良

尼崎市 田中 薫

尼崎市 田辺 鹿太

鳥取県 土橋はるお

鳥取県 新家 完司

吹田市 栗谷 春子

今治市 渡辺 南奉

鳥取県 武田 帆雀

藤井寺市 田中 透太

岡山県 小林 妻子

海南市 三宅 保州

出雲市 園山多賀子

和歌山市 田中 輝子

自画像にレモン一滴したたらす

和歌の浦眼下にカレー食べている

がらくたのようにわたしのものがあり

橋を渡るたびに捨てたいものがある

掌を合わすうしろ息子も嫁もいる

疑えば我が湖が濁りだす

弁当箱の底で踊っているピエロ

父の日は電話をかけてもろただけ

遠景に描いた夢が消えている

人の世の憂いを知っているグラス

ハンサムな男が害になつてくる

般若経わが身に聞かすレクイエム

はしたない口で墓穴を掘りつつけ

背伸びして届かぬものを今日も追う

年輪を重ね土偶に近くなる

スランブだじつくり朝顔と遊ぶ

真ん中を歩く自信が湧いてきた

鈴振つて神に弱音を吐いてくる

入社式まではルンルン シャボン玉

竹の花やがてひとりの縄を縛う

遅れても動く時計は捨てられぬ

娘の家で吃水線を中心得る

健やかに少年竹林を走る

白髪も金髪もいて宴深し

生きているときより母とよく話す
Tシャツのお洒落若さを取り替える

和歌山市 木本 朱夏

和歌山市 堀畑 靖子

島根県 松本 文子

米子市 林 瑞枝

堺市 山本 半銭

富田林市 池 森子

和歌山市 川上 大輪

松原市 小池しげお

宝塚市 丸山よし津

西宮市 西口いわゑ

堺市 たにひらこ

泉佐野市 稲葉 洋

富田林市 藤田 泰子

西宮市 奥田みつ子

米子市 寺沢みど里

八尾市 高橋 夕花

尼崎市 春城武庫坊

綾部市 藤田 芳郎

横濱市 川島 良子

羽曳野市 吉川 寿美

横濱市 菱田 満秋

大阪市 稲本 凡子

米子市 林 風子

弘前市 肥後和香子

鳥取県 岩崎みさ江
大阪市 津守 柳伸

八月の約束鶴はまだ折れぬ

夫から貰うバチンコ屋のシヤネル

三ヶ月たつと忘れる他人の死

株が好きだった四季報棺に入れ

毒一つ抱きひっそりと生きている

さわやかに割勘をして右左

子に見えて大人に見えぬ虫がいる

一度だけ背いてみたいおじぎ草

風鈴が昔の風を呼んでくる

とても陽気な独身生活の部屋

マイペースでいいではないか持久走

テトラポット浜辺の歌を書き替える

遮断機をくぐりぬけてるとんでいる

仏壇に急ぎの話ない日なり

フィルムを三本撮って旅終る

溶接の神様も居る町工場

病葉は踏まずわが身をいとおしむ

川より低い町で情けの輪がぬくい

幸せな顔で嫉妬を受けている

善のとなりにも悪が居座る湿地帯

この歳で好きになってもいいですか

お手本を姑にしてから丸く住む

梅酒壺 今年も満たし留守にする

鉛筆を丸く削って諦めよう

街に米溢れて村は過疎になる

出る杭は打たれる覚悟出来ている

米子市 石垣 花子

和歌山市 川上 富湖

吹田市 山本希久子

高槻市 乙倉 武史

豊中市 田申 正坊

寝屋川市 江口 度

弘前市 斉藤 昴

大阪市 鍛原 千里

横浜市 後藤 早智

米子市 政岡日枝子

藤井寺市 高田美代子

高槻市 傍島 克治

寝屋川市 籠島 恵子

和歌山市 玉井 豊太

大阪市 三輪 式美

寝屋川市 岸野あやめ

阪南市 深日白光子

西宮市 亀岡 哲子

和歌山市 森口 美羽

倉敷市 小野 克枝

枚方市 前 たもつ

和歌山市 福本 英子

米子市 金山 夕子

和歌山市 野々 圭子

大阪市 池田 一男

富田林市 中井 アキ

針に糸通せてやる気出している

楷書から草書心の角がとれ

飲めなくなつて酔えなくなつて踊れない

駅止めの孫を迎える夏休み

成長ののぞみ失くした預金帳

終章に備えて溝を埋めておく

残暑見舞か風鈴が揺れている

行水の盥の置ける場所もない

わたしもパスも霧と流れた山の中

天狗さんの失敗談を聞いている

それぞれの自立に母のおそい春

振つたのが僕だと言つて憚からず

猫が来てポツリと座る昼の月

慌てたら傷があちこちできている

我慢なら人一倍の石を抱く

一期一会 小豆島から友となる

大正の意固地ワープロ触らない

象の鼻行きたい方へ伸びてくる

通販の顔がだんだんでかくなる

寂しくてふたつ返事をしてしまふ

物納の土地にゆれてる鬼薊

ひらがなの手紙を奪い合う夫婦

伝統の技が生きている紙の里

むらさきの花は余生を深くする

塩加減ほどよくかえたのは娘

鉛筆の芯が妥協を許さない

和歌山市 松崎 幸子

和歌山市 山口三千子

尼崎市 春城 年代

唐津市 久保 正剣

大阪市 日阪 秋子

高槻市 守先 伸子

香川県 木村あきら

和歌山市 池永 正雄

米子市 澤田 千春

倉吉市 野口 節子

岡山県 矢内寿恵子

大阪府 澤田 和重

旭川市 朝倉 大柏

鳥取県 西原 艶子

岡山県 富坂 志重

鳥取県 さえきやえ

大阪府 榎山 隆

和歌山市 古久保和子

和歌山市 福井 桂香

堺市 宮本かりん

横濱市 金森 徳三

黒石市 相馬 一花

倉敷市 田辺 灸六

和歌山県 中後 清史

福岡県 本田 忠男

鳥取市 森 明美

半世期前の仇名で友を呼ぶ

石段の一段ずつに置く懺悔

引越しの荷物の中に庭の花

文化とは兎らの泳ぎ場埋め立てて

雨あがりやつと雨の匂出来上がり

雨風をしのぐ大樹の陰に居る

ラベンダー畑で返事待ってます

妻や子に見せぬ飯場の顔もち

無欲恬淡やがてわたしも地に還る

人情の出入りに邪魔なドアチェーン

人間の心に戻す過疎の森

同窓会時計は逆に回ります

一筆箋に遊びごころをのぞかせる

青信号の催眠術にみなかかる

エプロンを外して電話待っている

逢うだけは逢ってみたらという写真

ひと区切りつけて米寿の衣替え

火花火を黙って見ている老い二人

大空へ何度希望と描く挫折

一応はシナリオ通り生きて来た

闇に鳴る風鈴に聞く母の声

機窓より目の高さにある虹をみる

菜園の幸おおらかに胡瓜挽ぐ

雛鳥が育つ子はなれ急がねば

耳遠い夫婦が交わす禅問答

八起きする根気を達磨から貰う

鳥取県 土橋 睦子
和歌山県 杉山 精子

茨木市 藤井 正雄

唐津市 浜本 ちよ

和歌山県 和田美寿子

大阪市 神夏磯典子

柏市 上鈴木春枝

今治市 塩路よしみ

和歌山県 岩本美智子

今治市 村上久美子

鳥取市 美田 旋風

唐津市 林 公一朗

貝塚市 池田寿美子

京都市 都倉 求芽

寝屋川市 井上すみれ

美面市 椎江 清芳

唐津市 田口 虹汀

青森県 西谷 大吾

大阪市 一本 勇太

出雲市 吉岡きみえ

唐津市 市丸 晴子

枚方市 森本 節子

弘前市 岡本 花匠

香川県 山地マツエ

八尾市 宮崎シマ子

鳴門市 八木 芳水

古疵がチクリと寒い姑の部屋

朝顔の朝の命を褒めました

生き方の違いで別な群に居る

暇だけは独身貴族でいる私

盆の客昔話を持つてくる

役に立つ役に立つとしてしまひ込み

ふた重ね祝いの餅が睦ましい

長所だけ見える眼に頭下げ

悩みごと隠して嫁のよい笑顔

缶ビール今日一日をしめくくる

難題も阿吽で解ける友がいる

銀婚の宿に着く前花を買う

やわらかい布団を買って母を待ち

栄光の叙勲は妻の底力

いい風がそよいで開けてくれる道

ライバルは自分ひとりと言いきかす

五十年赤心消えず燃えている

兵庫県 北川とみ子
寝屋川市 太田とし子

岡山市 清水金太郎

唐津市 山口ふさ子

熊本県 高野 宵草

唐津市 岩崎 實

米子市 服部 朗子

岡山県 江口有一朗

今治市 野村 清美

仙台市 川村 映輝

唐津市 山門 幸夫

松江市 松浦登志子

羽曳野市 酒井 一壺

香川県 成重 放任

出雲市 園山かおる

今治市 中村 好恵

鳥取市 岩原 喬水

永田晚風さんの句。「鱗を剥ぎ惜しむ」と、この切々たる思いを

胸深く秘められて、見事に終章を詠い続けておられます。林荒介

さんの句。作者によって異なるかもしれないが、荒介さんにとって

作品は音楽のようなものかもしれない。じつくりと醸して醸して

おられることに気付かされます。森川まさおさんの句。かつては

ひらりひらりと媚態を見せていた金魚はもういない。「晩節」な

どと畏まってみても、何もいない金魚鉢のようなものだの思い

に至る。丹下智洋子さんの句。疲れきってお風呂に入るとき、ふ

つと甘えのようなものを感じることがあり、羊水に浮いているか

たちで浴槽に身を沈めます。如何にも女性ならではの作品です。

秀句鑑賞

—8月号から

鈴木公弘

潮流へ帰れぬ周波数の誤差

林 風子

多数決の論理を嫌って離れた集団だったが、ふと疎外感を覚え、復帰しようかと揺れる。しかし、新空間にもすでに固有の響きが生まれ始めている。今の音叉を大事にしたい。合掌をした手ですぐに悪さする

大川 幸子

他人の行いに対しては、懺悔するくらいなら初めから「悪さ」をしなければいいのに、と思う。客観視することが難しい「私」ゆえに、本能と理性との狭間を行ったり来たりする。だからこの世は楽しいのかもしれない。

借金も持病も忘れ盆踊り

山原 昭水

頭痛の種はいつか芽の出る財源だと思えばいい。今宵は浮き世のしがらみをぶつつり切つて踊り明かそうではないか、なあ皆の衆。

恋人の時は展望レストラン

立 蔵 信 子

虹色の壁紙に包まれたレストランで将来を誓い合った夜、甘口のワインが好きだと言った。ところがどうだ、同居を始めたら徐々にテールマナーを忘れ、辛党に転じてしまった。空気のような存在になれるだろうか。少しでも楽な方へと向かう足

宮 本 かりん

人は「考える葦」だと言ふ。確かに一部の葦は英知を結集して高度な社会を造った。だが、バンガローの並ぶ湖沼の淵には、冷凍食品の空箱と「折られた葦」が漂う。

芸をすする犬に仲間の冷たい目

市 丸 晴 子

野良を駆けていたときに拾われて以来、ご主人の命に背いたことはない。お手をしたら小屋の仲間がにらみつけた。でも、この温みを逃がしてはならないから耐えて、次は猫の芸を盗もうと思つている

継ぎ目には旨い話を詰めておく

山 本 玲 子

所詮は人の波間を浮き沈みながら渡る外にないのだから「おべんちゃら」言うも処世なり。面白くないが、繋ぎ目が乾かないように、最善の注意を払つている。

腹立てているのは私だったはず

谷 口 義

根も葉もない噂を流す名人がいる。ここらで一言もの申しておかなければならない。ところが、相手の蛇口から溢れ出たのはお湯ではなくて立て板に泥水、我を忘れて溝を掘つたが間に合わず、私が詫びて帰ってきた。生きざまのばらばら時計屋の時計

朝 倉 大 柏

個性尊重の時代。かくなる時流の功罪は相半ばと言えなくもない。自由と勝手とは裏腹の関係である。しかし、それぞれのリズムを刻んだ時計も、やがて止まる。

捨てた欲ひとり歩きをして困る

斎 藤 房 子

欲の団塊はこつそり海に流した。淡々と生きようと思う。ところが、誰がいつ拾い上げたのか、帰り道の前方を「捨てたはずの欲」が愛想を振りまきながら闊歩していた。それ以来、私は強欲者の芳名録に載つている。

濟んだから笑い話になりました

井 上 す み れ

幾重もの峠を乗り越えて、やっと平坦な道に辿り着いた旅人の晴れやかな顔が浮かぶ。「もう心配しなくていいんだよね」「うん」……二人に多くを語る必要はない。

首香のむ

西出楓楽選

笑つてすむことではないが笑つておく

ゆつくりと回る地球に住んでいる

還暦まえの顔に呪文をかけてみる

現実を逃げて来たのか流れ星

白いページに共鳴する今日のわたし

みぞおちに嘘がごとんと落ちてくる

紙袋 少し油断が入ってる

朝顔を数える満ち足りた時間

発狂もせず向日葵はじりじりと立つ

緑の風が吹いていたばあちゃんの樹

泣いて笑つて今の暮らしを実らせる

美しい壇で中身を信じきる

かもめかもめお前いつかの逃亡者

フリーサイズにいつつかりと油断する

今はもうごまかす気ない鏡拭く

殺し文句も考えておく旅仕度

友の訃を聞く日と知らず花生ける

手のとどくとここに置かれた余命表

蟹気楼もはやコントは通じない

鳥取県 さえきやえ

米子市 石垣 花子

和歌山市 福井 桂香

鳥取市 石上 悦子

和歌山市 岩本美智子

富田林市 片岡智恵子

大阪市 神夏磯典子

藤井寺市 高田美代子

米子市 政岡日枝子

和歌山市 野々 圭子

兵庫県 北川とみ子

米子市 中井 ゆき

弘前市 佐治千加子

大阪市 鍛原 千里

寝屋川市 井上すみれ

寝屋川市 籠島 恵子

青森県 福士 トキ

寝屋川市 太田とし子

今治市 野村 京子

自己流の天気予報でずぶぬれに

いくたびか汽車を乗りつきここにいる

満面の笑顔で扉開けてみる

エンピツがくつろぎ過ぎて折れている

友だちは大きな傘を持っている

陰から突然とび出して来た未来

深追いはしないでおう啗

悪口にあらす核心ついている

わたしから私に戻る橋が無い

指輪など交わさぬままに喜寿や古稀

背信の恋 土砂降りという裁き

世の中の裏も見て来た化粧やけ

のどの渴きへ花にも水をあげましょう

左脳の感度が少し鈍くなる

嫁姑 小骨はそつと孫が抜く

ファックスで口約束を念押しされ

すこやかに重荷を負うて古希迎え

根も葉もない話 上手に花咲かす

有名になって何かを忘れてる

ちよつとだけ不幸ですごく幸せで

遠雷は亡父の警笛だと思ふ

余波ひとつ破風の角度が物足りぬ

さわやかな和音の中のさくらんぼ

思い切らねば無明の闇をぬけ出せぬ

輪切りにされて檸檬は少し恥ずかしい

倉敷市 小野 克枝

米子市 光井 玲子

和歌山市 古久保和子

米子市 金山 夕子

八尾市 高橋 夕花

大阪市 本間満津子

富田林市 藤田 泰子

尼崎市 春城 年代

和歌山市 木本 朱夏

八尾市 生嶋ますみ

和歌山市 宮口 克子

徳島県 安宅美代子

西宮市 西口いわゑ

松江市 佐野木みえ

岡山県 福原 悦子

柏市 上鈴木春枝

米子市 服部 朗子

鳥取市 前田 一枝

兵庫県 中野とよ子

八尾市 村上ミツ子

米子市 寺沢みど里

和歌山県 小倉 アサ

岡山県 山本 玉恵

羽曳野市 吉川 寿美

堺市 たにひろろ

潮風が過去の匂いを乗せてくる
 血相を変えてしまった母のこと
 手ざわりは確かと思ふ蜘蛛の糸
 喜んで手のひらにのるサクランボ
 沙羅双樹咲いた報らせに駆けつける
 ライバルに軽く抜かれて行くショック
 バラでさえ優しい言葉待っている
 鉢植の実り宝のように食べ
 二人から一人になった砂の城
 草笛が吹けて子供と仲良しに
 エリートメダカ小川にもどれない
 たそがれて今更焦ることはない
 たんぼぼが水子地蔵の視野で咲く
 限界へむずむず動くくすり指
 封を切る指が少々身構える
 面会謝絶わたしレモンのバック中
 手のひらに可愛い毒を転ばせる
 前へ進め進め号令かけながら
 愛らしく演じる老いの難しさ
 怖がって書かぬ鉛筆捨てようか
 私に夢を吹きこむ海の風
 ひまわりのはつらつ明日の顔がある
 雑草の花も未来を見て生きる
 饒舌が過ぎて午後から風邪をひく
 慣れ慣れしい風が私を困らせる

鳥取県 福田 登美
 鳥取県 西原 艶子
 和歌山市 桜井 千秀
 和歌山市 山根めぐみ
 出雲市 園山多賀子
 和歌山市 森口 美羽
 西宮市 奥田みつ子
 横浜市 丹下智洋子
 米子市 青戸 田鶴
 和歌山市 福本 英子
 和歌山市 山口三千子
 今治市 塩路よしみ
 熊本市 永田 俊子
 和歌山市 川上 富湖
 寝屋川市 堀江 光子
 和歌山市 田中 みね
 米子市 林 瑞枝
 鳥取市 松本 文子
 横浜市 保田 絹子
 米子市 木村富美子
 和歌山市 堀畑 靖子
 大阪市 日阪 秋子
 和歌山市 吉村さち子
 富田林市 中井 アキ
 出雲市 石倉美佐子

唐突な言葉も飲める胸低し
 単純にきつぱり肩のちから抜く
 会う時の言葉を探す昨日今日
 風だけがしつてる風の通り道
 口下手を埋める笑くぼを持っている
 地球の明日と我が身のあした考える
 矢がつかせてじわつと秘密こぼれ出す
 あじさい寺ファジーな風が吹いてくる
 つつましい紅がすらりと嘘をつく
 八合目 頂上までをどう登る
 欲しいのはスリル恋ではありません
 諸行無常この哀しみに身を任せ
 遠出した海の広さを持ち帰り

弘前市 肥後和香子
 寝屋川市 森 茜
 神戸市 船津とみ子
 岡山県 富坂 志重
 倉吉市 野口 節子
 岡山県 矢内寿恵子
 大阪市 三浦千津子
 大阪市 町田 達子
 八尾市 大内 朝子
 鳥取県 西川 和子
 羽曳野市 芦田 絢子
 鳥取県 岩崎みさ江
 大阪市 渡部さと美

八木千代先輩と交替して、九年八月号までの選をさせていた
 できます。どうかよろしくお願いします。

一句目―目下、ミリオンセラーの春山茂雄著「脳内革命」に
 よると、プラス思考が脳、ひいては体によいと言ふことは、医
 学的に証明されているそうである。二句目―おだやかな老境が、ゆ
 っくり回る地球。どうまく表現されている。この地球での日々
 が満ち足りたものであることは想像に難くない。三句目―作者
 と同世代の一人として共感を受けた。もう若さは取り戻すべく
 もない上、これまでの生き方の総決算が顔に出るとあれば、呪
 文をかけたくもなろう。四句目―一般的に、流れ星は美しいも
 のとして見るが、落伍者と見たのは面白い発想。

気まずい

西村早苗選



残るほどとって気まずいバイキング
 気まずくなつた訳はわたしの口こたえ
 育児休業 男が取れば気まずいか
 夫婦沈黙 猫も気まずくよりつかぬ
 おとこ親たつた一人の参観日
 気まずさを繕う母の手打ちそば
 気まずくなつた友と一本道で会う
 少年の気まずさ義母が好きになり
 一匹の蚊に気まずさを助けられ
 張り合った気まずい酒が胃に残り
 梅雨晴れ間気まずい憶い陽に晒す
 時々気まずいこともある同居
 気まずそに視線がうろつています
 両親に内緒で辞表出して来た
 借りた傘に僕の名前が書いてある
 席蹴つた怒り気まずい悔い残す
 だし抜いた椅子で気まずさ抱いている
 言い過ぎて気まずい背を向けて寝る
 玉手箱あけて気まずくなくなった過去
 気まずさを裁くひと言待っている
 気まずいがこの問題は敵に聞く

周 信 シマ子 良 知 一 風 高 明 美代子 ミツ子 南 奉 英王子 あずき 高 夫 多賀子 晋 かわる 虹 汀 好 恵 高 水 俊 路 隆 風 京 子 大 輪 幸 夫

朝から小言きまずい一日が始まる
 かたかたと気まずさの音椅子にさせ
 スカーフがなびく気まずい裏切りよ
 気まずさを変える話題を探してる
 気まずさを会釈だけしてかくしてる
 散りぎわを忘れ気まずい花のうつつ
 気まずさにピエロの役を買って出る
 気まずさを派手なジョークで煙にまく
 恩を着て気まずい刻が過ぎてゆく
 三匹で気まずくなつた金魚鉢
 花盗人見つけた方が身を隠す
 満月が気まずいこともあるだろう
 おじやま虫らしい気まずい空気だな
 葬式が始まっていて引き返す
 気まずさを包む風呂敷持ち歩く

住
 着地点変えて気まずさふつ飛ばし
 上役とふたりのエレベーターながい
 気まずさへまたも思案の灯がゆれる
 プライドが気まずい風を呼び起こす
 膝を崩して気まずい想いから逃がれ

人
 駅裏の気まずい音に慣らされる
 地
 気まずさを避ける日傘を傾ける
 天
 気まずさに座り直してばかりいる 小池しげお
 軸
 気まずさの解けるいつかを見つけよう

志 重 忠 男 帆 雀 有一朗 捷 也 ますみ 富美子 彩 子 螢 雅 城 晴 子 次 男 寿 美 はるお とよ子 伊津志 みつこ 雄 々 朝 子 日 枝 子 荒 介 正 剣 小池しげお

みがく

松本今日子選



発車までボディをみがく路線バス
 磨かねばならない石を持つている
 行くあてのない靴みがく未練だな
 糠ぶくろクレオパトラに負けへんで
 嘘ばかりみがいて本音見うしなう
 みがく床早く立ちたい初舞台
 賞受けてますますみがく欲が出る
 腕みがく師匠のうでをぬすみつつ
 腕みがき合うライバルを大切に
 ライバルの技を味方にしてみがく
 ピカピカの靴で小回りなどきかぬ
 もう靴は磨かぬ余生茶を立てる
 脇役に徹しこつこつみがく芸
 積年の岩にみがきを掛ける波
 みがいたら光と信じ塾通い
 外面をみがいて都会から帰る
 下駄箱にみがいた靴を眠らせる
 歯医者から帰つた父にはよくみがく
 孝行が出来ず亡父の石みがく
 感性を磨く話題に巡りあい
 腕上げたなアと親爺も負けていず
 農機具をみがいて継ぐ気待ってみる

潮 華 荒 介 朝 子 みつこ 時 弘 正 雄 雅 城 志 重 剛 治 権 悟 芳 郎 愛 論 ますみ かわる 寿 美 ちかし 和 重 やすお 仁 緑 あ き 大 輪 孝 子

集 路

みがかれた芸で脇役味を出す
みがかれた芸に辛い過去がある
みがかれて少しやさしくなる私
川底に磨いて欲しい石もある

不満持つ妻がたくな鍋みがか
みがかれて人はまあるい石になる
歯をみがきさてライバルに会う覚悟
いつ声がかかってもいい靴みがく
お互いをみがき合ってるよい仲間
みかいても消えぬ心のきずがある
父さんが靴をみがくと雨になる
アトラクタ目ざしみがいた心技体
みがかれた演技に客のすすり泣き
晴れの日がくるまで磨き抜くバット

修羅いくつ越えて磨いた男ぶり
ゆつくりとみがくと石は喋りだす
人前で笑いたいから歯をみがく
みがき合ってたきまますプロポーズ
二十一世紀へ心みがいて待っている

靴みがく妻を裏切れぬと思つ
左遷地で人間しつかりみがいてる

靴みがく道草などをせぬように
まだ夢をみたくてレンズみがいてる

よし津 洞庵 ころろ 洋

久仁於 春枝 旋風 有朗 狸村 希久子 晋 齋 一 齋 あずき

智洋子 鉄治 智加恵 あやめ 京子 保州

たもつ 政岡日枝子

天 軸

夜

中山雅城選



深夜鳴る電話にいつも身構える
目を閉じる妻が詩吟のしまい風呂
梯子してやさしい妻は夜叉となる
本当の自分になれる夜が好き
勝ち馬に乗って帰った月の夜
言い勝ったあとに空しい夜の長さ
なにこともなかったように夜は明け
咲きそうな月下美人に夜をとられ
言い勝って孤独な夜をもて余す
蚊一匹私の夜を狂わせる
繕いの針にまつわる夜の重さ
大胆な夢が見られる夜が好き
おぼろ夜の二人に話題などいらぬ
トラック野郎ことさら飾る深夜便
母さんとふと呼んでみる星月夜

ナイターも妻の手足は休まない
夜書けば恋文めいてくる手紙
旅プラン実家一夜の宿にする
善人になると夜が長すぎる
年下の夫とほたるの旅の夜
祝盃へ夜空を焦がす揚花火
ありがたい事に今夜も静かなり
生と死の鳴咽の中に夜が白む
思いきり酔わせて夜は演出家
架け替える絵馬あり夜の橋渡る
横綱が子供に負ける前夜祭
月下美人咲いた時には酒が切れ
婚約をしてから夜が怖くなる
少年の夢路に夜の闇がない
クローラーという檻に居る熱帯夜
十五夜のうさぎは何処へ消えたやら
音のない時計と夜を模索する
同じこと考えている星月夜
夜の顔隠して偽善を積んでいる
ぼろぼろの私を温く包む夜
いい奴やいい奴やと通夜の酒
そして夜過ぎたひとこと悔いている

黎之助 アキ 和重 千里 英千子 和子 大輪 久仁於 富湖 哲子 高明 一花 しげお 狸村 四郎 久美子 多賀子 芳郎 克治 洋 良知 希久子

同じ夜を待てる伴せ気付かねば
落暉してすとんと夜になる日記
紫陽花へ明かり零れて長い夜
りんご噛むふるさとかむ夜を噛む
遠花火ひとりの夜をもて余す

野仏の月も闇夜も無表情
天井裏に集まる夜の不審音
夜逃げした女が戻る盃蘭盆会

土橋 螢

日枝子

愛論

たず子 荒介 和歌子 ツネ 美代子 仁正 芳水 隆 白光子 彩子 満秋 朝子 鉄治 帆雀 有一朗 雄幸 忠男 銀波

初歩教室

題一 困る

吐田公一

今回は少し「発想の転換」をした添削を試みました。例えば

○低金利増えるは困る人ばかり 碧
このように句の中に「困る」を直接とり入れることを「読み込む」といいますが、川柳にはこの読み込みをしなくても、その題意が生かされておればよい場合があり、無理に題を読み込むことよって、ぎこちない句となることもある。注意したいもの。

▽低金利余生のくらし狂い出し
添削にもこの種の句を参考までに挙げた。
なお、「散る」の時に特攻隊員の句として紹介しました「散る桜…」の句は、維新の志士雲井龍雄の句と判明し、訂正します。

添削句

○掘っている墓穴に困り色変える 登美
下五の理解に苦しむ。今少し分かりやすく
▽ひとと言が墓穴を掘った子の離婚

○渋滞に一番困る生理現象 ふう子
破調句も一寸整理すれば五七五に

▽渋滞に生理現象困らされ 俊一
○歳かさね元氣自慢で妻困る
歳かさね『老いですむ。三句は作ること

▽老妻を困らしている口達者
○三軒目コーヒにケーキ梅酒まで 多美子
品目を並べただけでは駄目。理由を詠む。

▽糖尿へ難儀なことにケーキ好き
○住専の絡繰り知られ困るひと 公一朗
下五で句を駄目にしている。

▽住専の絡繰り政治家も絡み
○相続の資産が多くても困る 宏章
相続資産が多いと、内輪もめの因。西郷隆

盛の漢詩に「美田を残さず」とあり。
▽ご先祖の美田相続税に化け
○困ってるはずがブランド揃えてる きん子
何に困っているのかをはっきりさせれば、
説明句でなくなる。

▽金借りる方がブランドひけらかし
○臍繰りの置場に困る大掃除 宗明
中七を見つけたら様子に変える

▽へそくりがポロリ出て来た大掃除
○困ってるお願ひします保証人 梅村
立場を逆に置くと川柳らしくなる。

▽頼まれて困り果てる保証人

○又上がる老いには困る消費税 睦子
消費税率アップで困るのは老いのみでない

▽公約がまた破られる消費税
○ウエストが造反しだすグルメ旅 幸子
ウエストの造反とは面白い表現です。

▽大る身をチラシが誘うグルメ旅
○鍵忘れ妻の帰りを待つ玄関 馬洗
下六がまずい。本来共稼ぎを詠んだのでは

ないかも知れないが、削ってみては
▽鍵忘れ妻の鍵待つ共稼ぎ
○困る事ばかり足腰甲状態 円静子
この場合「足腰」のみに絞り込めば

▽足腰も弱って困る老いひとり
○付け届け後のまつりに困り果てる 晩翠
中七が意味をなさない。

▽贈賄の意図見えずいた贈り物
○困りますジョークわかぬ耳という りつえ
上五がともに詠まれていて味が無い。

▽ジョークさえまともに受ける耳という
○仕舞い場を忘れて祖母は困らせる 美恵子
「仕舞い場」は上五にするための無理な発

想。この場合は上六でよいと思う。
▽仕舞った場所忘れた祖母に困らされ
○総入れ歯がたいスルメを持てあます 君江
出席者への気遣いを詠むと

▽老人会入れ歯に困るスルメ出し

○人違い耳打ちされて困っちゃう 玲子

本来耳打ちの内容に触れば、味のある川柳になったのではなからうか。

▽耳打ちをされて困った人違い

○返答に困る子供の出す疑問 義男

最近は一で性教育がなされる。我々年代では本当にどう対処していいのか戸惑う。

▽孫が問う性教育に答えかね

○痩せる為め困る偏食する娘 崇

「痩せる」「偏食」余分な言葉が多い。

▽ダイエットこだわりすぎる娘の食事

○高速で僕の車が故障する 美佐

もう少しユーモラスに表現しては：

▽オンボロが祟る炎天下の故障

○横文字に苦労してます大正女 トキ

下七に縮りなし。川柳は下五が大切

▽大正の生れカタカナ語に悩み

○堂々と核実験をして困る 明美

「堂々」に代えて「大国」とすれば

▽大国の核実験に困り果て

○年金の枠をはみ出す寺寄附 高栄

下四を一字補えば語呂がよくなる。

▽年金の枠をはみ出す寺の寄付

○困れども笑う日も来る人生だ 志重

視点は面白いが、標語的です。

▽困る日も笑う日もあり夫婦坂

○消費税弱者いじめで困ります 政子
全くの説明句

▽弱者へのしわ寄せ消費税値上げ

○困った奴と言いつつ父の財布開く ころろ

できるだけ破調句のないように心掛けたし

▽困ったと言いつつへそくり母は出し

○自立した娘で親を頼らない 宏

頼って欲しいのに：の意は分かるが、この

ままでは題意から少し遠のく。

▽自立したはずの娘がまだ頼る

○困るのかロダンの思案まだ続く 彩子

視野がすばらしい。一寸した表現の差異

▽なに困るロダンの思案まだ続く

○旅なれぬ旅で騒ぐは莫迦の莫迦 順三

「バカのバカ」は川柳でない。川柳は中傷

を好まない。政治的なものを除き。

▽旅先の騒ぎのツゲが来てもめる

○水シャワー立ったままして困らせる 康子

一人のシャワーでは困らない。理由が大事

▽水シャワーはた迷惑も考えず

○暑いのに生皮コート脱げません 真一

中七の発想が安易すぎる。

▽これ以上脱げないまでのこの暑さ

○困らせて愛情はかる浅薄さ 蕉子

下五再考の余地あり。見付けよし。

▽困らせて秤にかける親の愛

○草のびて困るこまると又昼寝 よし子

下五で川柳は引き締るといわれている。

▽また明日と一日延ばしする除草

○困った事起った日から口きかん 美寿子

創作性がないと句として萎んでしまふ。

▽金策へ口もきけないほど悩み

○好きな人会って困るの言葉なし タツエ

▽初恋も話の合わぬ齢となり

○困ること過ぎればまたも困ること 雅子

▽困ること過ぎればすぐに楽天家

○五百羅漢困った顔は見当らぬ 勝巳

▽五百羅漢困った顔は見当らず

佳句

一浪と二浪抱えて困るママ

困った時母の助言が身にしみる 円女

困るのは自分ですよと亡母の声 尚子

年金をかじるねずみがいて困る 剛治

もう一つ泊れと孫が靴かくす 孝子

嬉しい困り方ですね。着想がいい。 てる代

困らせてみたい貴方が好きだから 絢子

私の句

聞かれては困る話へ地獄耳

◇

題「火」 9月15日締切（11月号発表）

添削を受ける句（3句）は、川柳塔用箋に

書き、事務所へお送りください。

路郎賞 候補作品中間発表

川柳塔賞

平成八年五月号〜八月号

路郎賞候補作品

板尾岳人

花が散る 散るよりほかになしと散る

都倉 求芽

理髪店出て世の中はまぶしいぞ 桑原 道夫
郷の山 余生の視野に凜と立つ 寺沢みどり
飾るものひとつも無くて母の道 小野 克枝
ささやきの森に聖書が落ちている

小谷美ツ千

勘違いのまんま涅槃の蓮の上

近く春やこくりと山の水を飲む

水芭蕉吐くその息は夕霧か

沈黙へ蠅一匹が来てとまる

この帯を締め美しい過去がある

時々は力んで見せるあばら骨

跳ぶつもり まずは手近な木に登る

夕暮れの渚へすてる愚のことは

蚊を叩くとでも小さな地獄絵図

田中 輝子
高瀬 霜石

小島 蘭 幸

父にかわり父の名がある席に座す

水族館の硝子に映る恋人よ

始まりはともも小さな草の種

サラブレッドが老いて戻って来た原野

田中 叶
桑原 道夫
池 森子

転勤がいやならやめるほかはない
定型を少しくずして生きている
じゃれ合えば猫の眼となる君が好き

田中 正坊

母上様とある就職の子の手紙

晩ごはん一番うまい午後十時

大切にされて一人の広い部屋

長男の家に泊ったことがない

人間の眼になって熊上つちがる

乗馬姿 殿下と渾身つけられて

もう誰も泣かない保育所の五月

肥後和香子
伊藤 寿美
稲本 凡子
古川喜美子
福井 桂香
佐治千加子
中田 純次
近藤 豊子

小池 しげお

ご機嫌が良い鎌先の深いこと

始まりはともも小さな草の種

池 森子

それから舌切り雀話し出す 谷口 次男
ときめいた昨日が耳を出てゆかぬ 澤田千春
十人で嘘だ嘘だと嘘にする 林 荒介
押しつけてない親切を頂きぬ 池内かおり
じゃれ合えば猫の目となる君が好き

肥後和香子

出不精でよいの私の貯金帳

中の下が父に精一杯である

丸い背に体験談が詰めてある

意気地なし薬を飲んで呑みにゆく

黙祷の目が一分で開かない

電柱にがんばっているかたつむり

D51の煙は誰もとがめない

田を植えて隣が遠く見える村

北岡波留吉
高瀬 霜石
横田 英詩
前たもつ
柴田英壬子
桑原道夫
江口 度
片上 明水

吉岡 美房

うたかたの世や晩学の手暗がり

愕然と定期の齢をみつめたり

髭を剃るそして鬨う貌になる

大切にされて一人の広い部屋

母見舞うこぶしの花も三度咲く

記念樹へふと重なりし手の温み

自分史に思える人が多すぎる

手をつなぐほど老いていず若くなく

車椅子の人に手を振る車椅子

白玉が食べごろですと浮き上がり

うららかさどうにも思い出せぬこと

原 さよ子
三宅つえ子
大塚節子
長谷川春蘭

舟渡 杏花
玉置 重人
高瀬 霜石
古川喜美子
岸 桂子
島 ひかる
井上 照子

火にもなれず水にもなれずひとりいる

宮西 弥生

浮雲の一つに欲しい僕の椅子

時広 一路

故郷に私の殻が干してある

尼 れいじ

あっさり和阿呆になれぬわだかまり

山下美津留

河内天笑

DNA二人の女好きになる

田中 叶

水族館の硝子に映る恋人よ

桑原 道夫

夫ほど便利な道づれはいない

安藤寿美子

二軒目を考えて呑む一軒目

吉村 一風

森がつぶれてカタカナの街出現

春城武庫坊

若者とあたりさわりのない話

新家 完司

医者の手を借りて細々生きのびる

木村あきら

完全のトマトが熱い息を吐く

野口 節子

一人居て常に気合をかけている

稲本 凡子

低血圧ひらめの如く部屋の底

佐治千加子

客よりも店員多い宝石屋

寺井 東雲

のびのびと育てた割にちゃっかりや

岡本吉太郎

車椅子の人に手を振る車椅子

三宅つえ子

バレリーナよりも華麗な土俵際

福崎しげお

路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞・茴香の花
賞・一路賞・各地柳壇賞は、10月号に発
表、第二回川柳塔まつりで表彰します。

川柳塔賞候補作品

宮口笛生

おしゃべりの鳥が来てます春の庭
残されて供養ばかりに明け暮れる
川原章久

ゆうゆうと暮し申告赤にする
新人に空気が入れ替えてもらう
清水 潮華

白米を研ぐしあわせを忘れてる
大内 朝子

いつもより品よく歩く御所の庭
健康がうれしい今日も腹が減る
山川日出子

本心を隠す上塗りばかりして
済んだから笑い話になりました
岸本 宏章

飲みほせば別れの予感レモンテイ
生者必減髪がだんだん白くなる
藤田 泰子

一匹で生きる微罪を繰り返す
無の時間流れて命送き通る
井上すみれ

耳たぶに風うたわせて逢いに行く
にぎり拳の中にわたしの虹がある
山根めぐみ

川島 諷云児

終点で待つてあげるよ椅子空けて
今岡 貞人

原みさを
斎藤房子

沈む陽の沈む光に明日を問う
松下比ろ志

模索して模索しながら虹を追う
水田 秀男

偏差値の海で採まれて来た自信
渡邊伊津志

ふるりに付てば風さえ子守唄
国米さくゑ

ジャンケンポンどの掌もみんな温かい
武田 正美

愛してらうれしい嘘をありがと
藤田 泰子

誕生日花はないけど夢がある
立藏 信子

生さざまのばらばら時計屋の時計
朝倉大柏

別姓でときどき他人のふりをする
秋元和歌子

耐えている靴だしっかり磨かねば
加藤権悟

福本英子

手が早いこれも才能かも知れん
持てるだけ持つてエンマに逢うつもり
山本 玲子

因習が閉ざされている門構え
ここらがほんとの夫婦下り坂
原 みさを

羽根ふとん鳥の数などふと思ひ
こわいもの知らず同居を夢にみる
安芸田 泰子

近く前に近くと一言なせ言わぬ
あつかりと砂吐きそうもない浅蜷
藤田 泰子

分骨で生まれた島に姉かえる
平均寿命知らぬふりして生きている
大村 正雄

生鳴ますみ
杉谷 一栄

口止めをしてもこの人活火山
後藤黎之助

三里の炎効いて残り火掻き立てる 川原章久
天気晴朗スカッと鯛の片身買う 山根めぐみ
要領の悪い蔓だけからみ合い 山門 タミ
神さまを売りに来たのは元上司 藤田 芳郎

小林 由多香

無記名にすればすんなり出る答え 一本勇太
風みどり空気の軽さ身の軽さ 三浦千津子
子育てが済んで夫にかかり切る 川田 晋
白内障 手術しようか眼鏡拭く 保田 絹子
もう一つからだがあれば昼寝する

幾山河越えて夫婦の顔になる 村上ミツ子
小姑を味方 外堀埋めておく 木村 親路
春眠へ甘えられない朝の靴 福永ひかり
老いらくの恋はあつさり好きと言つ 尾田 綾子

今日よりも明日はもっと青い空 西本 保夫
白旗をすんなり振って生き延びる 杉山 精子

丸い石ばかり積んでも頼りない 塩路よしみ
肩書きのない靴の底よくちびる 岸本 宏章
どの輪にも真ん中に居る人気者 森安夢之助
西岡 豊

榎本 吐来

美辞麗句 深読みしないことにする

難聴が進むにつれて冴える勘 藤田 泰子
里帰り喋って食っても居ない 中後 清史
和風 和風 和風

納得の出来ない顔も手をたたき 井上すみれ
言い訳のしどろもどろにある誠意 上鈴木春枝

目の色のどこか澄んでるホームレス 宗 弘
句帳手に私を探す旅に出る 寺本 明子
泣き笑い済ませた空びん並んでる 不破仁緑
困った子困った子だと自慢の子 早川 盛夫
花吹雪うかれ上手な紙コップ 斎藤 房子
眼科歯科内科と生きる忙しき 石川 勝
ブライドが邪魔 輪の中に入れない

宗教が世界の平和かきまわす 声田 絢子
飲み疲れ遊び疲れが浮く朝湯 大村 正雄
アメリカで外人だった十二日 川原 章久
中橋恵美子

大阪文化祭川柳大会

とき 11月16日(土) 午前11時開場
ところ 大阪市中央公会堂

兼題と選者(各題2句・午後1時締切)

「時事川柳」 柏原 幻四郎 選
「似る」 山本 翠公 選
「夜」 久保田 寿界 選
「宴會」 山下 美津留 選
「道化」 高橋 古啓 選
「姿勢」 堀江 としお 選

席題 当日2題発表 会費1000円

江原とみお追悼川柳大会

とき 10月13日(日) 午前10時開場

ところ レストラン富士(倉吉駅前)

とみおさんを偲んで(思い出を語る)

奥谷 弘朗・但見 石花菜

題と選者(各題2句・午前11時半締切)

「酒」 橘 高薫 風選

「笑う」 天根 夢草 選

「若い」 小林 由多香 選

「登る」 八木 千代 選

「美しい」 野沢 大漁 選

「男」 土橋 螢 選

*開会午後1時 閉会同4時(予定)

席題なし・欠席投句は拝辞します

会費 2000円

(江原とみお川柳遺作集・発表誌贈呈)

*昼食は各自お済ませください。

主催 江原とみお追悼川柳大会実行委員会

麻生路郎の作品とその周辺

大家のこころ

(68)

橋高薫風

路郎先生鮮満川柳行脚での歓迎句会は記録では七ヶ所所持された。題と選者と至極限られた句のみを掲げ、当時の鮮満の柳人と句の傾向の一端を止めておきたい。(原句のまま)

京城句会 「旅」路郎選「喜び」

正木柳建寺選「ホテル」橋本言也選

四五日は己が天下で居れる旅 翠人

また友に逢ふて旅路が狂ふなり 麗月冠

旅なればいつそ淋しく寝てみまし 可宵

喜びの夫人神戸へ出迎へる 喜笑

喜びが一月早く慌てさせ 笑門

インチキのホテルとは後で知ったこと紀太

温泉で会った女に逢ふホテル 翠嵐

暫くはホテルで暮す新婦朝 文丸

人力車ホテルを長い列で出る 水味

平壤句会 「雨」路郎選「恋」路

郎選「最合傘」可敷選「持寄」春魁選

猛烈な応援団も雨を逃げ 楽文

自動車で行く土砂降の面白し 夢月

駈落といふ風でなしモボとモガ 錦魚

恋といふか齒痒い其の日くくなり 京平

最合傘雨はそんなに降ってない 秋外

急用の女房の傘に久し振り 柳也

持寄り人は人の物から箸をつけ 可敷

持寄って刀剣の座の静なり 夢也

安東句会 「見送り」路郎選

袂別の夜眞実を聞かされる 銀波

見送りが済めば着物の話なり 荷草

見送ってしまへば用のないお方 仙峰

見送ってもせず吞んでる横着さ すみ子

奉天句会 「馬車(マーチョー)」

路郎選「満洲」青龍刀選

馬車に一人で乗った手のやり場 青龍刀

満洲語二つ三つ吊り籠の鳥 圓平

北浜を出て満洲に居る噂 木耳

撫順句会 「旅」路郎選「便箋」

元弓選「客」柳路選

妻や子を夕日へ思ふ旅にゐる 天弓

旅日記いつも寂しい時に出し 喜代次

皆無事か自分も無事と旅の父 岸柳

便箋の罫を無視した忠告文 矢車

達筆を持ち便箋の物足らず 仙涙

来客にもう恥しい女の子 松代

鞍山句会 「生」路郎選「急」路

郎選

カンテラの光に重い日を生きる 可鳴

障子張り替へ生花も取り換る 柳路

五十年生きて天秤だけ残り 路晁

急行で去る師心に影を置き 水呼坊

急いでる訳は話さず逢ひに行く みつる

大連句会 「笑」井上麟二選「萌

宮武如蛙選「熱愛」大島涛明選「心」路郎

選

笑ふにもゲーペーウーがはゝかられ 宗嗣

血を吸ひこむ大地の微笑 雨明

朗らかに笑ってそれが渡世です 磊笑

笑つてるにしては淋しい笑顔です 満山

笑つたまゝ、死んでゐる 雅堂

萌え出づる春様々な世が映り 青海

春耕資金論議なかばに草萌える 凹一

父の無い子へ母の愛過ぎるなり 三碧

熱愛の二人になると黙り込み 蝶古

熱愛へ女将笑へぬ事を聞き 水母

熱愛のさめてはむごい人となり 阿喜良

生活苦やさしい心すり減らし 佛心

安心をさせるに借りた金を積み 草明

心中も出来ない程に年をとり 一徹

妾宅で妻子の事も思ふと云ふ 清子

老地め坊

毎月25日締切・30句以内厳守 編集部

岸和田川柳会 田中 文時報

タクシーのメーター見つめて銭勘定
今ここで見るだけですよと念を押し
音量を下げて深夜に見るビデオ
脈をとる私は医師の顔を見る
阪神を最後まで見た勝ちいくさ
生きてゐる今を無視して明日はない
信号を無視して渡るおばあちゃん
無視と言いつじめに泣いて散る命
病名を無視し笑顔で話しかけ
無視できぬ成り歩の意地が王を詰め
国民無視の議会で消費税上がる
窓際の椅子で無視には慣れている
面会の結果を藤の蔭で待ち
遭難者面会できぬエベレスト
硝子越しの面会をなお監視され
面会の総理微笑を忘れない
ベビー室時間一杯見て帰る
墓までの目算だけは立てている
嫁に来て目算はずれ手内職

路子 朝一 呂万 ダン吉 白光子 敏光 昭二 文時 けい子 辰郎 萬の 柳宏子 きさ子 東雲 甚一 ひで 富志子 輝彦 苑子

目算があつて深みへ商社マン
出来心妻子を泣かす面会所
目算あり誘いに応じ輪の中に
目算と現実の差が大き過ぎ
目算があり二番手で様子見る
バツイチの男目算ばかりする
目算が狂つたらしい捨てぜりふ
あさはかとも言える目算美田売る
円安に目算狂つパスポート

川柳若葉の会 宮崎シマ子報

遊び場の路地まで消した欲の渦
珍客へ財布無理する市場籠
消えそつて消えない過去を抱えている
それまでのイメージ会つてから消える
スパイスを効かせてマンネリから抜ける
マンネリな対策クラスも見抜いてる
働き蜂動く歩道をまだ走る
マンネリな唄と踊りて暮があく
マンネリの日々くらしはそんなもの
ようやくに吐いた言葉をさらう風
前のうそごまかす嘘をまた重ね

川柳塔おっぱい吟社 木村あきら報

言い訳は少し嵐が凪いだから
ライバルの辞書に手垢が付いている
宿題を残して妻は旅に出る
バラ咲いて老いの胸にも燃ゆるもの
思い切り泣きにおいでと母の膝

弘象 一齋 鹿太郎 盛之 洋 一弥 二南 洞庵 狸村

欣史子 清芳 千枝子 能子 喜美子 留吉 弘直 香住 田実子 シマ子

良い知らせ浮かれてはかりしておれぬ
何時からか妻の夕餉の缶ビール
良い毛布この見よがしに干してある
この一字違つたばかり大慌て
どこへ行くのか虎チャン毛繕い
ケタ違つ汚職を憎む手内職
同窓会半分以上アデランス
まだ何も言わぬうちから押してくる
出処良い松の芯はピンク色
震災の跡地に芽吹く花一輪
愛犬もストレス溜めて脱毛症
腹立てばヤカンに鍋がよく光り
毛が一本抜けた処で悲しかり

川柳クラブわたの花 吉村 一風報

定年の男が葱を買いにゆく
耐えぬいた明治の父の灯が消える
オニオンスープ玉ねぎ三切れ浮いている
夏時間夜はちよつぱり遠慮させ
ブランド夜の葱そげなりに花が咲き
石段へ欲も野心も消えてゆく
母乳利乳房含んで子が眠る
結納の掃りの空に虹の橋
葱坊主種をたくわえ威張つてる
うどんやを養っているきざみ葱
雨あがり山の樞野に虹の橋
砂浜でひろつた恋と星の砂
葱の香は食の風味をひきたてる
出来るなら消したい過去が一つある

ふみ 治 小おり 放任 吟笑 文仙 はつ恵 いさむ 千カエ 正雪 くに子 よしみ 中²なみ子 鬼遊 美津留 友隆 ますみ 朝子 幸子 泰成 トシエ まさと 明子 けいこ 吉吾進 知佐子

よくもまあ我慢金婚式にあと僅か
夫婦船大波小波に耐えて漕ぎ

ぬけぬけと責任転嫁の言葉じり
もつ帰るの女はそんな謎もかけ

愛嬌のある人が来た灯を点けよう
仏壇に赤いライター置いてある

よく回る独楽にもあるさひと休み
太陽が沈む返事はまだ来ない

抜け道の途中でユタと手をつなく
狂うてはならぬ音色よ母の鈴

付き添うて命を添えてやれたなら
同世代の訃報にまたも身構える

根回しに奥の手が出る年の功
貴方の過去をしやべらぬ無菌室

折り紙の鶴は情けを語りかけ
はらはらと流す涙も芸のうち

フリーライターがときどき考え込んでいる

高槻川柳サークル卯の花 川島風云児報

決心をしてから母の目が怖い
決心をしてふっ切れた目が優し

加速する老いに決心する同居
子に健を渡すと決めた熱いお茶

木魚ポクポク僕に決心迫る音
命断つ際には君がいて欲しい

世話好きの独断皆に煙たがれ
先ず酒を断つことですとレントゲン

遍歴の愛を断ち切る男の譜
断つておくがと出鼻くじかれる

佐加恵

柳五郎

哲郎

浄美

博友

まさお

美智子

拓治

義親

桃風

幸子

たけ志

金吾

吉則

青銅

はるえ

草風

未練断つ捨てたたばこを踏みこじる
未練断つ鯛の鱗をはがすよに

毒のある町だ鼻毛が良く伸びる
毒味してくれる女がそばに居る

たんまりと溜まるはゴミと愚痴ばかり
たんまりと溜まるはゴキと愚痴ばかり

たんまりと溜まるはゴキと愚痴ばかり
たんまりと溜まるはゴキと愚痴ばかり

高栄

源一

かおり

紫香

マツエ

ふみ

英一

杜的

芳子

恵美子

とみ子

白浜子

秀夫

あきら

克治

庸佑

稲子

雨あがり真珠のようになひとしく
点滴のしずく数えている命

空の虹軒のしずくも輝いて
時刻むしずく鍾乳洞の闇

テープ切る瞬間待っているカメラ
正直なカメラが暴く老いの皺

カメラ慣れしっかりポーズ二歳なり
カメラ慣れしっかりポーズ二歳なり

比呂子

静佳

笹舟

笑子

喜美子

貞子

臣子

ちかえ

節夫

菁居

一枝

房枝

規代

栄恵

蝸牛

静風

一路

生きたため捨てた未完の夢いくつ
期待されすぎて未完のまま消える

僕の計画未完にさせた血糖値
美しすぎて未完のままの恋いくつ

おもしろくない評取えて聞く未完
荒削りその未完さが頼もしい

あと継がす未完の婿を練る老舗
ママごとのような未完の新世帯

飽きませず日暮し魚を追いつけ

楓楽

柳宏子

萬的

凡子

恒明

公一

章久

智久

庸佑

南大阪川柳会 金井 文秋報

生きたため捨てた未完の夢いくつ
期待されすぎて未完のまま消える

僕の計画未完にさせた血糖値
美しすぎて未完のままの恋いくつ

おもしろくない評取えて聞く未完
荒削りその未完さが頼もしい

あと継がす未完の婿を練る老舗
ママごとのような未完の新世帯

飽きませず日暮し魚を追いつけ

飽きませず日暮し魚を追いつけ

日暮しの先駆者だろう山頭火

一日中雑巾はなきぬ老母がいる

日暮しの気楽さ失うものがない

今日一日元気に暮せてホッとする

無為徒食日暮しテレビ見てあかず

絵はがきの雪の白さに誘われる

読本の色刷りサイタサイタから

自分史のカラーページにいる家族

色刷りに古代のロマン暴かれる

若者の声が時代をリードする

ライバルへリード許した黒い霧

保母さんのリードで笑顔すぐ返り

鼻の差のリードで馬券乱れ飛ぶ

リードした背中に軽い不安もつ

今の今まで信じてました母だから

石橋を今たたいても間に合わぬ

今ここへ何しに来たかわからない

金貯めて今じゃ昔の彼でなし

今聞いた陸口流す水の音

三幸川柳教室

三宅

保州報

精いっぱい研げば本音が光り出す

微笑みの中で爪研ぐ影法師

振り返る心を研いだ茨道

矢じり研ぐ男の眉にある決意

角を研ぎプラス志向で生きてゆく

研ぎ過ぎるペンに欠けてる人間味

生業のハサミは命確と研ぐ

研ぐ牙も無い佗しさに冷や奴

柳伸

千里

頂留子

三男

重人

文秋

直子

悟郎

久秋

文江

トミ子

正博

寿美

東雲

良

志華子

さち子

章子

めぐみ

武春

秀男

町子

靖子

正雄

村正の怖さを知っている砥石

ゆつくりと出来て病のつらい日々

ゆつくりとお聞き胎児ヘシューベルト

修羅抜けた余生ゆつくり無に還る

定年でひねもすという鳥になり

ゆつくりと形状記憶してしまふ

ゆつくりと西よりの風吹いてくる

廃村へゆつくり墮ちる瓦屋根

紙切れ沈みあつて人紙芝居

紙切れのメモが起した大地震

遺言状ただ仲良くと書いただけ

木の命削つて紙がしやべりだす

赤紙に召されて兄貴行つたまま

未練かなしろい手紙を届けよう

一枚のハガキで思い受けとめる

薄紙を剥ぐよう時が浄化さす

人格も捨てるのですか紙おむつ

愛らしいよその子どもで気がまぎれ

てるてる坊主信じ切つてる子の寝顔

子に夢を託した二十一世紀

子の部屋に二十一世紀が溢れる

心閉す子が太陽を黒く塗る

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

一合の酒が空気を軽くする

酔いしれた父を背負える子に育ち

牧水の歌が旅情を誘う酒

晩酌とゆつくり今日を脱いでゆく

初恋をかたに残す竹人形

百合子

重子

孝子

初子

親踏

桂香

みね

和子

和代

美智子

よし子

貞子

利治

朱夏

千秀

三千子

保州

敏子

嘉平

当代

高夫

鉄治

残照にひっそりと咲く竹の花

幸運もなく朱竹画が色褪せる

竹すだれ涼風と飲む夏茶碗

月を釣り魚はかからぬ詩人かな

大物を撒き餌で釣ったことがある

釣り合わぬ縁が何故だかうまくいく

釣り糸も浮子も明日を模索する

霧囲気に釣られはしゃいだ虚しさよ

王様が笑いと雨が降ってくる

悲しくて笑い袋を買いに行く

病人を騙しつづけている笑顔

不真面目な主婦でカラスに笑われる

耳遠く少し遅れて老母笑う

苦労話をカラカラ笑いながらする

空白を笑い上戸の面で埋め

笑止千万おごりの果てにみた幕穴

悲しいと笑ってしまふ癖がある

ライバルとライバル作り笑いする

丑の日に関係もなく鰻食う

もうお年他人に言われて奮起する

陽焼けした顔が語っている苦勞

マンションの窓を開ければ墓ばかり

巣燕をのぞかせる肩車

二枚捨て一枚を買って衣替え

入院に童話の本を持っていく

はたる川柳同好会

井上直次報

道化師が転ぶと腹から笑えない

腹が立つニュースはつかり梅雨晴れす

よし津

三男

キク子

まさお

比ろ志

能子

源一

みづお

涼子

美智子

光代

てる

佐江子

澄子

嘉代子

鹿太

紫香

道胤

江美

正とし

杜の

春蘭

正坊

泰子

明光

方郎

腹時計この頃少し遅れ気味
 ばらの花清潔とは裏腹に
 腹握えて社長の部屋をノックする
 過去は過去腹におさめて朝を行く
 騙されてだまして腹が座りだす
 勝ち名乗りじつと聞いている太鼓腹
 故郷の酒じんわりと腹の中
 甘い物好きな男の弱い運
 甘えん坊甘えて母を喜ばせ
 這い這いで甘いばあちゃん知ってる
 災いは脇をゆるめた甘さから
 人生もかみしめたなら甘いかも
 甘い言葉耳には心地よいのだが
 保険屋がそうはさせない焼け太り
 国会に焼きを入れたい人がいる
 焼きもちを焼かせて北叟笑んでいる
 手を焼いた生徒たれず便り来る
 焼き加減うまい女房に操られ
 すき焼きを楽しまいむ程のせいにくさ
 焼肉の匂いの中でよくしゃべる
 つめたたくて怪しい魅力のある女
 ブールぎわ女の見栄は肌も焼く
 雲行きが怪しくなつて席を立つ

川柳岩出

小倉 アサ報

善 守 祥 風 竹 二 つよし 喜美子 昭子 まみ子 博史 眞郎 正三郎 保子 久子 螢柳 ただし 純次 直次 馬洗 よしろう 清史 英子 吉太郎 たけお 桂子

和子 悦男 保子 良一

親切がすぎて迷惑受ける破目
 初夏の田は田植えも済んでひと休み
 新人類迷惑のない辞書をもつ
 迷惑な雑草元氣よく伸びる
 補聴器をはずさう来たぞ絡み酒
 祖母泊める布団へ初夏の陽を吸わせ
 番茶より麦茶恋しい三十度
 迷惑も気分次第で許せる日
 稲苗は庭で箱づめ迷惑そう
 迷惑はかまひ過ぎてる老婆心
 迷惑を承知で愛にすがりつく
 半袖と長袖思案させる初夏

城北川柳会

吐田 公一報

智恵子 英子 正直 紳一郎 重徳 愛子 千鶴子 ふみえ 哲雄 春子 昌子 アサ 静子 春蘭 史風 秀夫 高栄 美代子 登美子 佐津乃 政子 柳影 あき子 行子 睦子 千尋 一枝

葛蒲園私の帯も小むらさき
 何もかも欠けて可愛く老いて行く
 幾つものロマン見てきた地蔵尊
 うず潮にするりと落ちた悔い一つ
 七坂を越えても虹がまだ見えぬ
 この辺でピリオド思ふ陰の舞
 一直線引くには険しい山があり
 あいづちのよさにつられて本音まで
 軒下を借りて燕は愛一途
 子の寝顔見ながら母のしまい風呂
 逆境に耐えた女の座りだこ
 窓際で意地を捨ててる影法師
 ストレスが薄らいで行く滝の音
 義理欠いた人に出会ったエレベーター
 陰膳が三月にわたる雪崩あと

とつとり川柳会

武田 帆雀報

とし子 八重 久留美 昭子 トヨ子 達子 満津子 あい子 純子 白峰 典子 寿美子 倫子 公一 一夫 崇美 明美 螢 舎人 喬水 一京 美恵子 正和 銀嶺 悦子 多哥由

遠足で転んで落ちた握りめし
 炊き出しの握りめしにはお漬物
 みんな達者で春を待ってる握りめし
 勤勉な日本人です握りめし
 竹の皮開けるとうまい握りめし
 遭難の救助待ってた握りめし
 握りめしあればどこでもついて行く
 不揃いのお握りどうあれ母の愛
 遊びたい心と財布喧嘩する
 遊ぶ金あっても寄付の金はない
 飛び降りて池で遊んだ鯉のぼり
 虎の子も遊び仲間誘われる

アテランス遊ぶ女の膝に落ち
火遊びをする年頃に子が育ち
遊んでる金でせつせと土地を買
夜の帝王誰がつけたか遊び好き
遊び回って哀しい事を忘れよう
開店に銭の無いのが待っている
開店日祝い酒だけ飲んで来る
開店も閉店もない古のれん
一円で電化製品買ひに行く
開店の敵へお祝い申し上り
改装をして開店に負けしれず
開店に弔電ひとつ迷い込む
開店に友の一升温かい

川柳塔唐津支部 久保 正剣報

石女を羨む友を叱りつけ
母の日にせめて下着を娘の心
十葉のオブジェ見事な額に入り
無駄吠えと解れば声も細くなる
折々の花に託した無人駅
たんこぶが痛いと言って笑われる
ペランダの夏はトマトに茄子胡瓜
久闊を先輩の掌の温もりよ
多数決みがいいたはずの策でした
夏バテに鰻も効かぬ傘寿かな
お目あてがあつて物腰低くする
出勤の途中で捨てたゴミ袋
前はダメ今は賛成消費税
苦も楽も一緒でしたと亡夫の顔

輪多郎 孝男 圭一郎 大漁 完司 行男 一枝 静生 和歌子 粗粒 帆雀 ひろ子 一瑤

一人暮し面倒なこと多すぎる
爽快な気分生れる泡ビール
野性の血薄くて愛が奪えない
川柳ささやま 酒井 靖子報
気が楽になると人間らしくなり
開店にこぎつくまでの汗の玉
落書きのようなサインを拝んでる
無理するなすなど大役おしつける
脇役の似合っお人で温かい
破るには惜しい歳暮の包み紙
昔気質の父恋しくて木をゆすり
やかましいあんだと呼べる杖がある
見られたら困ると破る請求書
歓声がどっと上がった新記録
破れてもつくりょう妻の知恵がある
ふり返る破れ障子に子が育つ
棟梁の役目がすんで祝酒を受け
順番に痛いところが追いかける
仲よしの輪で怒り役なだめ役
やかましい母の小言にある重み

川柳塔打吹

奥谷 弘朗報

いい気分になったところで安来節
安来節踊る手足も酔うてはる
おごられた酒でカラオケじつと聞く
歌に酔うジャズにロックの二重奏
気分屋のミケが今夜は出迎えぬ
夢気分夫婦でつかる露天風呂

主 實 正剣 惠美 純子 とみ子 つや子 和子 ヒサ子 八重子 市三 素水 美智子 芳乃 多美子 すす子 可住 靖子

視線少し下げて気分を楽にする
気分屋が風呂敷広げラッパ吹く
負けないぞ自分に手足ついてこぬ
キャンピングカーにも畳が敷いてある
自分だけ若い気分です笑われる
宝くじ当てた気分です予定組む
衣草匂い畳に座りああ亡妻よ
新畳勿体なく夢も見ず
酔っている電話臭いも感じられ
五月晴れ長者気分になっちゃった
カラオケで肩を抱かれてからの縁
輪の中で踊る気分になりきれず
私の気分はあなた次第で決まります
酔う人も飲めない人も見る桜
畳では死ぬ極道やつてはる
横浜あおば川柳会 菱田 満秋報
虫けらのように殺され原爆忌
手なが蜘蛛アースかければグルマさん
一匹の蜂に親子で逃げ回る
鈴虫に不眠の夜を助けられ
夜が明けてどこに納める腹の虫
古希過ぎていたずらの虫まだ元氣
独身寮でもゴキブリとともに棲み
あれほどに聞かせた娘にも虫がつき
時計より一びきの蚊に起される
大人みな昔は良い子だったとか
時々昔の浮気責める妻
旧姓で昔のように話す友

きみ子 かつみ 松盛 玲坊 玲泉 陸子 喜与志 猿沓 玲子 よしえ 幸子 節子 勝見 弘朗

カーテンで守るつもり
のプライバシー
カーテン売場でロマンティック
なっている
夏雲を枕に昼寝してみたい
白いカーテンをお白くして
客を待つ
ひまわりの観察録で夏綴る
カーテンの彩それぞれ
のくらし持つ
医者通い坂を横ぎる
白い蝶
人間とや春夏秋冬満喫し

川柳塔鹿野みか月

土橋

螢報

買い物袋妻に持たせて煙草吸う
的を得て極限までも遊んでる
家の裏表とちがう顔してる
負けて勝つ芸も身につく
齢となり
田植をする間近の家で
ウアイオリン
白い歯に表彰状をくれてやる
惚れこんでしまえば全部
美しい
祖父の名をよこす気はない
田を植える
共和国建てる夢もつ蝸牛
蝸牛ふたり暮るるを考へよ
老齡で家が重たい蝸牛
ずぶ濡れで命をみがかたつ
つむり
殻を脱ぐ勇気出でこぬ蝸牛
かたつむり家紋を背負い
重かるう
かたつむり仏の腕を慕い
おり
でで虫の家は地震に不安
なし
綻びた網でよかつた揚羽蝶
ステキです網目の荒い女房
で
網の目のおおぼれ拾う
うちの猫

貴代子
いわゑ
武庫坊
年代
はつ絵
民平
君子
義子
一夫
多哥由
武子
幸枝
三千代
喜与志
隆風
盛桜
茂
久枝
みさ子
富久江
弘子
智恵子
諷人
はるお
節子
早苗
睦子

網切つて童宮は自分で探す
辛せという網の中から手を
合わす
私を吐きだすようにおそかつた
西瓜畑網を張るのがおそかつた
しゃべる会だから一言かけてやり
憂さ晴らし泡を飛ばしてよく喋る
むだ口を喋り前後を見失い
風呂敷を広げ昔をよく喋る
影法師とお喋りをして気を晴らす
喋り過ぎ何か忘れていませんか

川柳塔みちのく

小寺

花叢報

五十年夫婦ごっこを続ける
缶詰にしておく唄がひとつある
納豆の粘りが体によいと言つ
情に抱かれ耐える処世の車椅子
堂々と押した指紋に嘘がない
蟹缶詰骨のとろけた男いる
千手観音ははの指紋を持ち合
わす
三度目の危篤脱して粥啜る
蛙缶を山ほど置いて妻の旅
行きずりの情けにすぎる募金箱
軽い気で押した拇印に四面楚歌
黒い土ついている指紋なら白
だ
人情で余っていない金を貸し
ソロバンを弾く友情だつてある
花の闇指紋消したい人という
指紋まで苦勞性の形して
歩の粘り寝首をかいた事がある

孔美子
きみ子
正道
かつ乃
保子
実満
八重子
和子
くに子
螢
龍人
春彦
隼人
花匠
雅城
柳々
ツネ
祥子
生恵子
岳水
ふさゑ
ゑ
一光
黙人
千加子
隆樹
銀波

妥協する指紋は持たぬ電算機
人情に渴くと旅をしたくなる
缶詰も女房も賞味期限過ぎ
諦めにたつぷり慣れた古希の坂
サークル檸檬
小林
一夫報
底辺でもう転ばない身のこなし
腐る頂点 錆びる底辺 雨雨雨
底辺で迷子になったペルシャ猫
波紋ちさく業 底辺に眠らせる
底辺を知って清濁合せ飲め
朝の陽に背筋のぼしている
ひとり
妥協ならいつでも出来る意地ひとつ
この辺で敵にうしろを見せとこう
爪切つて魔女になるのを諦める
マル書いて不協和音を閉じ込める
髭のびて夢殿に棲むきりぎりす
底辺に生きて大志を失わす
羨ましいなあ みんなが溝を跳びこえる
諦めに変る泰山木はばかんと咲く

川柳高知

川竹

松風報

年金のゆとりを孫に狙われる
あのゆとりやはり家柄だと思つ
ゆとりある財布パチンコ屋へ行かぬ
喉仏苦しい嘘が通過する
一芯二葉茶の摘みかたは心得る
新緑に同化しそふな散歩道
表札に鬼を残した寡婦の城
花
五楽庵
一花
順三
希久子
一夫
喜美子
智恵子
雅子
みつ子
房子
いわゑ
あずき
楓
薫
正坊
千代
智子
功
孝雄
圭風
春枝
竹萌
有佳
子龍

雑草に学べしっかりしなはれや
加速など考えてないカタツムリ
ロボットに職場替われと促され
学の無い僕の手垢がついた辞書
嫁が来てアシスタントになった妻

川柳ねやがわ

江口

ポーナスをがばつと食っているローン
嫁がせてローンの残る寒い部屋
定年を家のローンが追いかける
精一杯生きてローンにはげんでる
耐えること忘れローンに耐えている
説得は苦手菓子箱さげて行く
やわらかく妻に説得されている
説得のとっても下手な昼の月
説き伏せて女の涙拭いてやる
番犬へ気長に説得しています
試歩の朝女にもどるコンパクト
幸せをかみしめ落とす今日の紅
TPO今日は薄めに紅を引く
口紅の薄いタコ焼き屋の女将
口紅がちよつと含羞むほどの嘘
口紅を拭いておしい冷や奴
口紅が迫る喉仏が見える
唇のさむさへ紅をさしてやる
とつとおきの口紅つけて黄泉の旅
目覚ましを五分進めてある油断
油断させねばと悔むことばかり
温顔に油断足元すくわれる

ダン吉 金太 美津留 重人 柳弘 度報 小路 黎之助 三郎 一風 仁清 波留吉 磯 たもつ 時弘 博泉 高栄 庸佑 源一 一途 かすみ 亜成 恵子 文秋 英壬子 頂留子 ルイ子

好きですと言われ油断をしてしまつ
無表情のあなたに油断してしまつ
月掛に私の命あずけます
お葬式詮索好きの多いこと
ご近所の眼が光つてる妻の留守
同姓同名わたくしよりも美人かな
十人十色同じ色で老いている
車内では寸刻惜しみ本を読み

岬川柳会

八十田洞庵報

子の心汲めず誤解を悔いる母
誤解とく席がはしこでまたもつれ
もう来ない誤解の靴が遠ざかる
一歳児ママと同じ水着きる
水着には麦わら帽子よく似あう
うぬぼれが邪魔で縁談まとまらず
隣からうぬぼれ話聞くつらさ
母死して妻との誤解今はとけ
口下手が言いわけすればまた誤解
もの言わぬ癖が誤解を深くさせ
とても無理ただ見るだけの水着ン
言葉数の多寡が誤解を招いてる
七回忌父の日記で誤解とけ
誤解とくチャンスにしたい同窓会
浜の宿竿に水着の万国旗
水着つけそつと微笑む我が姿
カナヅチも粋な水着にサングラス
夏の風孫の水着も空高く
誤解など無かつた顔で元通り

権太 冬葉 とし子 あやめ 勇太郎 光子 シマ子 度 俣子 浪速子 よし子 鉄男 辰喜 庄六 龍弘 里子 とみ 年子 正 ヤエ 幸子 悦子 末吉 みつ子 正美 洞庵

新同人紹介

酒井 瀧子

— 薫風・紫香・諷云児・正坊推薦

川上 大輪

— 薫風・柳宏子・太茂津推薦

川上 富湖

— 薫風・柳宏子・太茂津推薦

太田 藍子

— 薫風・柳宏子・小路・三郎推薦

はびきの市民川柳会 櫻本 吐来報

大和撫子どんな花かよおしいちゃん
アルミ貨の面子をたてる消費税
花嫁の持つキャンドルの炎がゆれる
義仲と並んで芭蕉幸せか
ひまわりと競っています夏帽子
鏡台にルージユころろ捨てきれず
愛用のベレーをかぶり黄泉路ゆく
人の好き丸出しにした得意顔
咳払い一つ がやがやすつと引く
実印も使わぬ余生米の乾き
決着は結婚届に判を押す
久しぶりバーできげんの終電車
とまり木は裏情報の発信地
止まり木で不平並べるバーの味
止まり木のひとつが聞いていた謀反
あほな金使つとバーで怒られる
バーのママ男の嘘を聞き分ける
盛りあがり終つて割り勘高くつき
部屋割りに幹事は腕の見せどころ
風を割るサイクリングに夢を乗せ
人生を2で戦争が割つてくれ
酒樽を割る阪神を夢に見た
司会者の口に乗せられついでほんね
聞き上手喋らせ上手名司会
すんなりと方言も出る名司会
しめやかにすらすら運ぶ喪の司会
司会者にきやつと抱きつく鐘三つ

四三郎 忠 宏
聡 聡
専 平
りつえ
敦 子
敏
吐 来
かつみ
たけし
泰 子
末 一
俊 男
晋
重 人
ガン吉
志 洋
昭 平
まつお
さとみ
元 紀
金 太
一 壺
美 喜
絢 子
みつこ
伴 子

飛び入りで司会困らすハブニング
胸鳴つてメモがかすんで初司会
昇
あつ子

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

甘んじたレールに明日の彩がない
被災地にレールが錆びてそのまんま
極楽へ続くレールを磨いてる
トロリーが優雅に走る京の町
災害の恐怖を語る歪んだレール
故郷のレールに遠い思慕がある
人さまのレール走れぬ頑固者
放浪の画家をいざなう日のレール
金婚間近優しくなった妻の爪
爪に泥働く嫁が来てくれた
呉越同舟 仔猫の爪も切っておく
母未だ女捨てないマニキュア
ほろ酔いの爪から散らすソメイヨシノ
マニキュアをして乙女座は今日も吉
辞令一枚家族ぐるみの流転かな
転んでも言い訳しないダルマの目
転んでも後悔しない白い百合
あの雲何処へ行く風につれられて
茨の道を思い出してる梅雨あかり
風鈴の余韻が叩く右の脳
ローカルが賑やかになる祭り月
心頭滅却 そろそろ呆けたらか
てのひらに豆粒ほどの自尊心
パンの木に言葉ひとつを光らせん
昏れてひとり影踏み遊び縄遊び

澄子 向西
正一 一笛
すみ 伊三郎
歌子 夢之助
龍小 まさお
正治 美子
比ろ志 石舟
義芳 正子
キク子 年代
武庫坊 紫香
求芽 鹿太
芳子 薰

籠 島 恵 子
— 薰風・柳宏子・小路・三郎推薦

山 門 幸 夫
— 薰風・虹汀・正剣推薦

山 門 夕 美
— 薰風・虹汀・正剣推薦

市 丸 晴 翠
— 薰風・虹汀・四郎推薦

夏布団ふんわり出来て梅雨半ば
何もせず何事もなく今日もすぎ
恋人をみんな知ってるネックレス
そやさかいと言いつに嘘がある
肝つ玉母さん似合うヘルメット

川柳塔おとり

上田

俊路報

一本の白髪氣にした妻も老い
不条理と闘う花の髪飾り
髪型を変えて母さん鏡ふく
恋をして髪をつやまで生きてます
髪染めて老いを生き抜く弾みもつ
髪の毛が逆立つことが多くなる
アデランス悲しい嘘がまぜてある
決断の証のように髪を切る
父呑んだ海は怖い漁が好き
コロンパス海に向こうは陸だった
海開き鳥肌たてて祝詞聞く
サンゴ礁なんぞ平和な海の色
子育てに母は大きな海になる
砂浜に書いた想いを海が呑む
人間のエゴに汚染の海が荒れ
沖繩の海から届く鎮魂歌
若い時磨いた腕は今日も生き
錆びた五円磨き世間に送り出す
年を重ね静かに心磨きたい
磨くたび真実だけが底光り
技磨く背中に鞭の痕がある
世の中を磨くべし先尖らせる

昌子 千恵 千ころ 白浜子 弘治 崇 幸次郎 余志身 道子 風花 真一 みさを 艶子 野草 小生 敬之介 舍人 孝子 千秋 銀嶺 俊路 伝住 清子 登美 雄々 由多香 黙光

川柳藤井寺

高田美代子報

鍋底を磨けば亡母の顔になる
暑さには弱い男でウドン好き
暑い夜つい止められたビール飲み
水中心 暑さの出番待っている
せつかくの化粧暑さではがされる
山寺の鐘が暑さを和らげる
雪国に育ち暑さに弱くいる
夏祭 汗が飛び散るギャルみこし
暑いからビール裸で飲んでます
お腹の中から雑音を知ってるよ
雨だれのように雑音聞いている
雑音が重くてカーブ曲れない
雑音を吸って耳栓かゆくなり
雑音の中から二十一世紀
雑音は耳の出口で片付ける
リラックスしても時計は動いている
動き出す魑魅魍魎の永田町
助言して動きのとれぬ仕儀となり
ありがたい法話にししれ動けない
新しいリズムで動き出す四月
ストレスが溜まると妻は動き出す
一億円くれたら動くかも知れぬ
動きすぎいざ鎌倉に動けない
大正の父ゼンマイで動き出す
満員車へたに動くと間違われ
原風景の風は動かめままがいい
同罪になるぞ動けば動くほど

宏章 六点 恒雄 和樹 キミ子 鐘造 花梢 志洋 利武 みよ子 悦子 絹子 かなめ 昭子 修六 登一 宗一 史郎 愛子 和子 桂子 正一 敬一 アキ 敦子 美代子 しげお

狩人の視野で逃さぬ動くもの
父の日を御苦労様と妻が言う
妻にだけ遠慮いらぬ話する

倉吉川柳会

谷口

次男報

心にもないこと平気口にする
平気な顔でまた夫嘘を言う
どんどろけに平気で居れるはずがない
へそくっついておいて平気な顔をする
事故現場平気で覗くわたしが怖い
離婚した妻を平気で誘い出す
嘘をつき平気な顔でアカンペー
平気では居れぬあの娘が嫁になる
平気ではおれぬ目線が熱っぽい
失敗を平気な顔で許す夫
消費税アップ平気の平左でおれぬ
ラブホテル平気な顔で窓開ける
失敗も平気新人やる気出る
愛されているのでひとりでも平気
疑心暗鬼平気で見せるのに疲れ
守銭奴ら平気で金を踏みこむ
平気だと言ったが怖い億の金
平気ではおれぬ夫の朝帰り
変な物河にこっそり捨ててに行く
変な子と口癖にする変な親

美房 三郎 智久 常代 和歌子 美ツ千 かつみ ゆり子 和枝 次男 よしえ 節子 智子 苦句 一夫 天雀 雄々 黙光 康志 御前 日枝子 山康子

▼お願い 各地柳壇の原稿は、所定の原稿用紙、所定の様式でお書きください。

柳界展望

★平成七年度川柳塔みちのく大賞が決定した。

少年の悔し涙よ川になれ

浅田 隆樹

準優秀作第一席は佐治千加子、同第二席は加藤落花同第三席は岩淵黙人の各氏が決まった。主幹 波多野五楽庵、副主幹 齊藤益、相談役 工藤甲吉・東野大八・橋高薫風ほか、会計 相馬一花

★愛知川柳作家協会年間賞が次のとおり決定した。

最優秀

夫婦別姓紙のくさりにつながられて 石田 寿子

優秀

道連れは少うし淋しい人

がい い 朝日 ヒロ
妥協せぬ男に絶えぬ向こ
う傷 新井 治郎

★第14回夜市川柳大会は、8月4日、堺総合福祉会館で開かれた。各題天位句の本社同人は次のとおり。

母の目にみんないい子で
いとおいしい 高田美代子
溺れそうな人からそつと
離れよう 新家 完司

解毒の効き目を味方から
試す 小池しげお
罪少し背負えは逃げる場
所がある 池 森子

恋人の住む街が地球の中
心だ 新家 完司
甘えると風は他人の貌に
なる 池 森子

仲間入りしたくて泡を立
てている 小林 妻子

★NHK学園の平成8年度
全国川柳大会は11月10日午
前10時から東京都国立市の
くにあち市民芸術小ホール
で開かれる。講演「俳句か

ら見た川柳」俳人協会理事
長鷹羽狩行、宿題と選者は
商 橋高薫風▽中 齋藤大
雄▽蔵 尾藤三柳▽箱 森
中恵美子▽保 渡邊蓮夫、

席題選者は竹本瓢太郎・山
田良行、宿題事前投句締切
は10月1日、投句料200
0円、投句先は〒186-01 国
立市富士見台2-36 NHK
学園全国川柳大会事務局

★第32回川柳塔きやらばく
は12月1日(日)午前10時
半から米子天満屋5F・て
んまホールで開かれる。兼
題は、梢・亀・あと・岬・
ピアノ・掃く・遊ぶ・痛い

(各題2句)で、選者は当
日決定する。出句締切り0
時半、開会午後1時40分、
午後5時散会予定。会費4
000円(昼食・懇親宴と
も)、欠席投句拝辞

▽出版
■高瀬霜石句集「青空」・
矢本大雪句集「雨」(B6

判各本文62頁)両氏の双生
児のような奇想天外の装丁
どちらが表とも裏とも言え
ないが、逆様にすると独立
した句集となっている。共
に、あさ・ひる・ばんの3
章立てで、お互いに「あと
がき」で相手の紹介を行っ
ている。

■榎本吐来著『吐来の川柳
教室』(A5判160頁・
川柳塔社刊・1690円)

橋高薫風など序文・第一部
「川柳研究室」第二部「吐
来句集」300句で構成。

■500号記念「川柳ささ
やま(II)」(川柳ささやま社
刊・B6判164頁)会員
38人の合同句集・橋高薫風
序文

約束を忘れた指の苦笑い
■「人間影影記」(東野大
八著・B6判320頁・葉
文館出版・定価1800円)

「川柳雑誌」「柳宴」など
に掲載したエッセー80編を
一冊にまとめたもので、昭
和35年刊「風柳人間横丁」
に続く雑文集。数々の秘話
がちりばめられている。

■8月号表紙裏上段4行
目「午後10時から」↓「午
前10時から」▽P2目次下
8行目「他流社」↓「他柳
社」▽P103上段20行目
「コップ酒呷って」↓「コ
ップ酒呷って」▽P105
上段9行目「三井アーバン
ホテル」

■岡本花匠 百句集「雪月
花」(川柳塔みちのく句集
第12集・A5判40頁)波多
野五楽庵序文

▼訂正▲

「他流社」↓「他柳
社」▽P103上段20行目
「コップ酒呷って」↓「コ
ップ酒呷って」▽P105
上段9行目「三井アーバン
ホテル」

「他柳社」↓「他柳
社」▽P103上段20行目
「コップ酒呷って」↓「コ
ップ酒呷って」▽P105
上段9行目「三井アーバン
ホテル」

「他柳社」↓「他柳
社」▽P103上段20行目
「コップ酒呷って」↓「コ
ップ酒呷って」▽P105
上段9行目「三井アーバン
ホテル」

「他柳社」↓「他柳
社」▽P103上段20行目
「コップ酒呷って」↓「コ
ップ酒呷って」▽P105
上段9行目「三井アーバン
ホテル」

本社 八月旬会

八月七日(水)午後五時半

メンズフアツションセンター

立秋とは暦の上だけのことで、連日の熱帯夜に寝不足気味の顔も交じり、九十一名の参加により八月旬会は開催された。

お話予定の方の都合がつかなかったのでもと前置きて、板尾岳人氏が演壇に立った。

千利休・与謝野晶子で有名だった堺市が今年は0157で全国に知られるようになった。その堺市の現状を岳人氏特有のユーモアと反骨精神で語った。六月までは繁盛していた寿司屋は二、三割の入り、焼肉屋は岳人氏一人しか客がなかった由。子供達も友だちと遊べず、家でゲームをしているだけ。堺の人は旅館でも断わられたとか、まさに人権問題と悲憤慷慨の体。軽々しい噂とか、マスコミに惑わされることのないようにと結んだ。

初出席は八尾市から生嶋ますみさん。月間賞は太田とし子さん(寝屋川市)に輝く。

(司会―岳人) (記名―森子・弥生)
(受付―しげお・たす子・房子)

席題「筆」

高田 美代子 選

裏切れぬ人と知ってる筆である

言うことを聞いてくれない筆を持ち

筆マメに妄想描く銷夏法

まだ元氣 安心させる父の筆

反核と書く太筆を探してる

一筆啓上なまで食べるな手を洗え

添え書がすつしり重い母の筆

筆あとは淋しいなんて書いてない

楷書から草書が好きになる硯

筆折ってからの鼓動が聞こえない

窓ぎわの達筆がまた頼まれる

割箸で筆よりうまい絵を描く

今度こそ本気が筆で書いてくる

涙の跡が残る亡母の筆つかい

三十年使い古した筆愛す

筆まめの母は誤字など気にしない

囁いて残れる訳は筆が立つ

雲は天才 空のキャンパスに風が筆

絵筆一本 展覧会を待っている

先生の筆で描いても下手は下手

弘法さんで描いての筆を選んでも

傍線の朱筆が少し饒舌で

筆おろすまでがなかなか決らない

どうしても私が滲む筆の彩

達筆と言えないけれど味がある

莫山の筆というから見てるだけ

筆跡は莫山に似たわたしの書

寿子

智子

太茂津

たもつ

武庫坊

希久子

勇太

義子

ますみ

大輪

重人

東雲

富湖

森子

笛生

ダン吉

正雄

一步

森子

狸村

いわゑ

寿美

紫香

昭子

正坊

ダン吉

金太

一本の筆に魂生きて

せめてもと筆を選んでる私

きまじめに筆を持つ深夜のムンク

人形の眉あわあわと引き終える

悪魔が喝あわあわと引き終える

命ある筆を書く筆の銃身

新品の筆が私に馴染まない

昨日今日ひとふりにして筆洗う

筆いっぽん無視することに決めている

硯箱にまともに書ける筆が無い

筆まめで憎らしいこと書いてくる

虹描いた絵筆を空に置き忘れ

さよならと書いてゆっくり筆洗う

兼題「指」

この指に止まってほしいのは一人

白い指 炊事洗濯知らない娘

愛燦々イミテーションの指輪でも

指切げんまん何度も嘘をついた指

風の盆 指の先から秋深む

疑えば指の先からくるしびれ

この指に止まれ美人ならなおよろし

指相撲でもしましょうかフルムーン

コップ酒一気 働き盛りの指をもつ

ごしごしと指バイ菌の話する

朝子

希久子

白兔

薫

白兔

たす子

昭子

美子

美子

寿子

英子

美羽

武庫坊

美代子

美代子

大輪

笛生

いわゑ

富湖

寿美

たす子

シマ子

保州

弥生

弥生

歌子

歌子

歌子

歌子

毎日を本音建前つかい分け
 遺言を毎日書いて消している
 顔合わす毎日なのに名を知らず
 冷や奴 毎日続く老母の夏
 まだ夢があつて毎日歯をみがく
 日替わりの仮面タンズに吊つてある
 良妻を毎日の演じ疲れ切る
 毎日のコールいつしか慣らされる
 毎日を鏡の裏に論される
 老いてゆく自分毎日磨いてる
 ひと雨がほしい毎日熱帯夜
 毎日をメモの通りに動いてる
 菜園の虫と毎日格闘す
 堺 堺とばい菌ニユース怖がらせ
 毎日聞く小言が無いと勘狂う
 毎日がピエロのような宮仕え
 毎日のケジメをつける日記帳
 同じこと毎日言うて凡夫婦
 妻の文句を毎日聞いて平和なり
 毎日をパチンコ台と睨み合い
 毎日が休日だから余暇がない
 毎日のおかず財布とにらめっこ
 毎日が修業と汗を拭いている
 毎日を妻の手綱の中で生き
 あきもせず毎日飯を食っている
 毎日が日曜 泣けてくる男
 毎日を楽しく過ごすコツがある
 定年後 毎日妻に仕えてる
 毎日を大事に昼寝しています。

あやめ 房子 紫香 恭昌 隆 鹿太 美羽 佳秋 弥生 利武 悟郎 天笑 満州 三男 萬的 正坊 朝子 久峰 正坊 典子 しげお たもつ 路児 天笑 信子 露児 とし子

住
 毎日を全力疾走して暮れる
 毎日が裏方だけど悔いはない
 影法師 毎日僕に意見する
 有難うを毎日言うて生きてる
 同じこと毎日言うがボケてない
 人
 笑い袋 毎日補充しておこう
 地
 少し輝いて毎日を組立てる
 天
 行く当てはないが毎日髭を剃り
 軸
 アイラブユー毎日いわないかん国
 兼題「崩す」 榎本吐来選
 名優の姿態崩れぬままに老い
 遺言の字崩れ涙の跡がある
 一本の髪でアリバイ崩れ落ち
 アリバイを崩すちいやかなマッチ箱
 天の道 地の道 政治家が崩す
 飴玉を配り搦手から崩す
 座りだこ膝を崩さぬ母の針
 セットした髪崩して低気圧
 わたしには読める悪筆の崩し文字
 男冥利か膝へ崩れて来た女
 膝崩す女がころ揺れさせる
 バブル崩壊 父は眼鏡を拭くばかり
 ある日突然 宅地を崩す考古学

森子 義子 美房 美代子 大輪 富湖 美子 射月芳 月子 憲太郎 太茂津 佳秋 典子 鬼遊 射月芳 英子 英壬子 英壬子 笛生 憲太郎 鹿太 柳弘

アリバイを崩す刑事の目が光る
 アリバイを崩す芝居の半切符
 平家落人 袴持崩さす里に棲み
 崩れ落ちた岩へ運命の明と暗
 栄枯盛衰 崩れた土塀にある名残り
 不況風 人情までも切り崩し
 有頂天になると崩れてゆく絆
 週刊誌買って万札崩す旅
 崩れても懲りぬ積木の数え歌
 少しずつ地球を崩す大企業
 万円札崩すと札に羽が生え
 戦列を離れ崩れてゆく自信
 崩れかけた投手支えたホームラン
 笑うたら童の顔になつてゆく
 父の座が崩れ下座に慣らされる
 頂点を崩す小まめなスキヤングル
 鏡台に崩れた心見すかさぜ
 携帯電話 車内のモラル崩れたり
 住
 次々に期待崩れる子の巣立ち
 崩してはならぬ憲法第九条
 泣き崩れ笑い崩れて母達者
 まなうらの里の原画は崩れない
 インタビュー 鬚が崩れた晴れ姿
 人
 アリバイを崩す刑事のちびた靴
 地
 尾を振らぬ男を崩す札の束

昭子 かつみ シマ子 寿美 稚代 房子 しげお 白浜子 洋 度 武庫坊 歌子 三男 天笑 久峰 歌子 悟郎 金太 正雄 正坊 鹿太 朝子 重人 千秀 愛論

天

アリバイを崩しにかかる妻の鼻

美津留

軸

端正な背中が崩し字に挑む

吐来

兼題「好き」

橋高薫風選

好きだからすこしはなれて見えています

いわゑ

好きだから憎まれ口のありつたけ

みつ子

好きでないとうようふ気付いたらし仕打ち

英壬子

大好きと知って野良犬離れない

庸佑

好きなもの食べて寝ている猫と僕

千秀

酒好きに届く寒梅笹だんご

久峰

鬼ころし名前も好きで味も好き

一風

山が好き深田久弥の山を視る

隆

好きなリズムと狂ってみだし夏の夜

美代子

嫌いではないが好きだとまだ言えず

文秋

好きと言うてから本当に好きになる

鬼遊

好きだから迷わず乗った泥の舟

シマ子

ただ逢えるそれだけでいい好きな人

稚代

ことさらに道化を演ず好きな人

洞羽

旧姓を呼び捨てに気さくな友人

美庵

肉ジャガが好きで気さくな女です

恭昌

好きだったあの子も今は孫九人

紫香

好きですとはつきり言ったことがない

あやめ

今になって好きと言うからややこしい

友照

欠点を好きになつたら恋してる

富湖

自転車を止めて釣好き見てる竿

信子

日の丸がとっても好きな文部省

利武

保州

日の丸の旗は大きな声が好き

しげお

酒も好きコーヒーも好きもてはる

いわゑ

美人ではないけど好きなタイプです

金太

人間が好きで襤褸の旗を振る

大輪

ロボットに好きと言ったら照れるかな

富湖

不思議だな好きになつたら光り出す

三男

體の皮おんなの好きになつてくればなし

薫

好きな人だから生涯負けていく

しげお

いくら好きでもいつか一人のめし茶碗

たず子

住

開けゴマあなたが好きという呪文

大輪

夕焼けの向うに好きな人がいる

佳秋

大正の男が好きなどじよう鍋

正坊

今日を終るちよつと前が好きなんだ

白兔

好きだから手を振る別れなどしない

美房

人

二番目に好きな男のプロポーズ

洋

好きだと言えず影法師になった

森子

地

好きな人の顔が浮んでくる茶漬

とし子

天

男親の一言やよし好きにせい

薫風

軸

南海エリア情報誌・サウスウエーブ

が川柳を募集。選者は橋高薫風氏、

9月20日締切、はがきに5句以内、

送り先は大阪市中央区難波5-1-1

60 南海電鉄レジャー事業部

川柳塔鹿野みか月大会

とき 11月17日(日)午前9時開場

ところ 鹿野町党国民宿舎「山紫苑」

*第一部 出席者のみ

*兼題と選者各各題2句・午前11時半締切

「朝」 橋高薫風選

「ころ」 森中恵美子選

「折々」 金築雨学選

「脈」 小林妻子選

「忘れる」 門脇かずお選

「抜群」 武田帆雀選

*第二部 出席者と欠席投句者各各2句

「響く」 小林由多香選

「乱」 土橋螢選

「雑詠」1句 10月15日締切

会費 出席者二千円・投句者千円

投句先 〒689-04 鳥取県気高郡

鹿野町鹿野1279中原諷人方

第十七回川柳大会実行委員会

主催 川柳塔鹿野みか月

共催 鳥取県文化団体連合会

第23回 堺まつり協賛 堺市民川柳の会

と き 10月5日(土) 午後1時開場

ところ 堺総合福祉会館5F大研修室

兼題と選者(各題2句・午後2時締切)

| | | |
|------|--------|---|
| 「酒」 | 八十田 洞庵 | 選 |
| 「手紙」 | 松原 寿子 | 選 |
| 「整理」 | 坂元 一登 | 選 |
| 「妻」 | 板尾 岳人 | 選 |
| 「元気」 | 小出 智子 | 選 |
| 「拜む」 | 中田 たつお | 選 |
| 「紳士」 | 波部 白洋 | 選 |
| 「宴」 | 河内 天笑 | 選 |

賞 各題秀句賞

会費 1500円(軽食・作品集)

連絡先 河内 天笑

堺市民芸術祭川柳大会

と き 9月8日(日) 午後1時開場

ところ 堺市立榊文化会館3階第1講座室

堺市桃山台2丁2番1号

(東北高速鉄道とが美木多駅3分)

おはなし 「これからの川柳」 墨作二郎

宿題と選者(各題2句・午後2時締切)

| | | |
|-------|--------|---|
| 「プラン」 | 長江 時子 | 選 |
| 「切符」 | 重谷 重比呂 | 選 |
| 「つなぐ」 | 河内 月子 | 選 |
| 「珈琲」 | 笠嶋 恵美子 | 選 |
| 「ひとつ」 | 中田 たつお | 選 |
| 「不思議」 | 西出 楓楽 | 選 |
| 「道」 | 梶川 雄次郎 | 選 |

参加費 1000円(作品集・参加賞呈)

賞 秀句呈賞

主催 堺市文化団体連絡協議会

東大阪市文化祭参加 東大阪市民川柳大会

と き 10月13日(日) 正午開場

ところ 東大阪市民社会教育センター3F

(東大阪市長堂1-17-29 近鉄布施駅北へ5分)

文化映画 「川柳史探訪」上映

宿題と選者(各題2句・午後1時締切)

| | | |
|-------|--------|---|
| 「消える」 | 竹内 良伸 | 選 |
| 「風」 | 松本 初太郎 | 選 |
| 「未完」 | 池 森子 | 選 |
| 「地獄」 | 久保田半蔵門 | 選 |
| 「期待」 | 川島 諷云児 | 選 |
| 「船」 | 波部 白洋 | 選 |
| 「ゆとり」 | 牧 浦 完次 | 選 |

*各題秀吟賞・記念品・発表誌呈

会費 1000円

主催 東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会

岸和田市文化祭参加 岸和田市民川柳大会

と き 10月12日(土) 正午開場

ところ 岸和田市民会館地下会議室

おはなし 阿 萬 萬 的

兼題と選者(各題2句・午後2時締切)

| | | |
|--------|--------|---|
| 「魅力」 | 牛尾 緑良 | 選 |
| 「ジंकス」 | 河内 月子 | 選 |
| 「後味」 | 中田 たつお | 選 |
| 「ひっそり」 | 小出 智子 | 選 |
| 「足音」 | 西田 柳宏子 | 選 |
| 「誇り」 | 橘 高 薫風 | 選 |

席題 当日1題発表 松本 初太郎 選

会費 1500円(記念品・大会誌呈と軽食)

賞 文化祭賞・文化祭奨励賞ほか

主催 岸 和 田 市
岸和田市教育委員会
参加団体 岸 和 田 川 柳 会
共 催 岸和田市文化祭実行委員会

9 月 各 地 句 会 案 内

| 句会名 | 日 時 と 題 | 会 場 と 投 句 先 |
|---------------------|-------------------------------------|--|
| 堺川柳会 | 5日(木)午後1時から 眼鏡・ゆっくり(共選) | 堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑 |
| 尼崎 いくしま | 6日(金)午後1時から 胸・傾く・雑詠(A・B) | サンシビック尼崎3F 阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 |
| 川柳塔 まつえ | 7日(土)午後1時から 神秘・コンビ・姿 | 松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 |
| 川柳塔 わかやま | 8日(日)午後1時から 線・卵・歩く | 近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良 |
| 西宮北口 川柳会 | 9日(月)午後1時から 丸・比べる・はるばる・自由吟 | 西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒663 西宮市段上町6-6-2-202 奥田みつ子 |
| ほたる 川柳 同好会 | 10日(火)午後1時から 相槌・伝える・きつい | 豊中市立蛭池公民館 阪急宝塚線蛭池駅西へ150米 〒560 豊中市蛭池中町3-10-28 井上直次 |
| 八尾市民 川柳会 | 10日(火)午後6時から 祭・汲む・ロビー・枯葉 | 八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子 |
| 高槻川柳 サークル 卵の花 | 12日(木) 正午から 痛む・鞭・ローン・自由吟 | 高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児 |
| 川柳 ねやがわ | 15日(日・祝)正午から 本・あやまち・坂・自由吟 | 寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 |
| もくせい 川柳会 | 16日(月・振替休)午後1時から わかめ・あきれる・狭い・自由吟 | 豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊 |
| 南大阪 川柳会 | 20日(金)午後6時から 鉛筆・傑作・性格・出来事 | 玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 |
| 岸和田 川柳会 | 21日(土)午後1時半から 見込・無敵・恵み・戻る | 市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地埋村 |
| はびきの 市川柳 会 | 22日(日)午後1時から キャプテン・はやばや・せり合い・悩む | 羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏 |
| 京都 塔の会 | 26日(木)午後1時から 蔓・住む・工夫 | ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南出口すぐ 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町 都倉求芽 |
| 富柳会 | 26日(木)午後1時から ひとり・落ちる・自由吟 | 富田林市立中央公民館 近鉄富田駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1-10 池 森子 |
| 東大阪市 川柳 同好会 | 28日(土)午後6時から いじらしい・星・乱れ・重い | 東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風 |

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★「旅の楽しさは、行くまでが三分の一、行っている間が三分の一、そして帰ってからが三分の一と言いますからね」―俵万智「短歌の旅」のあとがきに記されたベテラン添乗員の言葉。

さすがに旅の楽しさを言い得て妙である。

★私の古い友人に旅行マニアがいるが、その男は「行くまで」が専門で、地図・時刻表・案内書を駆使して詳細な旅程表をつくる。希望や条件を聞いて知人の分まで作成するが、帰ってから必ず報告を受け、資料を豊かにする。ともかく行くまでの机上旅行が楽しいと言ふ。

★それで私は、毎日のように掲載される各旅行社の案内広告を丹念に読み、パツ

ク旅行を申し込むことになっている。近ごろは競争が激しく、シーズン・オフを狙

えば、往復の航空運賃より安い費用で二泊三日のツアーを楽しむことができる。

さすがに宿は二級クラスが多いが、ときには皇族も利用するという、豪華なホテルにあたることもある。

★そこで私の楽しみは「帰ってから」ということにな

る。海外旅行などでは、写真や絵はがき・資料などによってアルバム一冊が埋まる。それを眺める楽しみも

小説などであつて訪れた所が現れると、まざまざとそのイメージが甦る。何物にも勝る楽しみだ。

★「男はつらいよ」の寅次郎「こと渥美清が亡くなった。足の向くままに旅を続けた寅さんは、彼岸へと旅立っていった。(正)

と旅立っていった。(正)

ひとこと

ナースに感謝

Sさんは看護婦ではなく看護学生で、実習のため私についてくれた。その看護ぶりは多分、学校で習っていることを忠実に守っているだけだとは思うが、何しろ熱意がある。時には優しく、時には厳しく、親身も及ばぬとはこのことであろう。リハビリを徒歩に改めた時、自分の肩を貸してくれ、腕を組んだりして歩くことに協力してくれた。初めは苦痛だったが、快復が早いぶん早められた。私は今、病床でこの文章を書いている。いったんは川柳も忘れてしまったが、このごろ、川柳を作ろうとする気も湧いてきた。これからは優しく、時には厳しく、親身も及ばぬとはこのこと。お陰で闘病生活が楽しかった。Sさんありがとう、本当にありがとう。

樹本 蔭児

○子供達が成長した今は、もう直接かかわりはなくなつたが、九月からは二学期。九月は長い月曜日という言葉も聞いた記憶がある。夏休みの気楽な生活から、なかなか抜け出せない様子

を言つたものだろう。○この「いじめ」で蘭は花芽をつける。朝夕の水は言うに及ばず、肥料もたっぷりもらい、寒い季節には暖かい室内、と優遇されてい

た。た蘭はびっくりする。「こんなひどい目に遭うと死んでしまふ。それまでに、せめて子孫だけでも残さんとあかん」と思ふからなの

だ。そして、翌年の春には見事な花を咲かせる。○現代人は、ストレスと戦いながら生きている。私にとつても例外ではないが、そんな時には蘭の例を思い出し、つらいことに耐えるようにしている。(ふ)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「 発表（11月号）

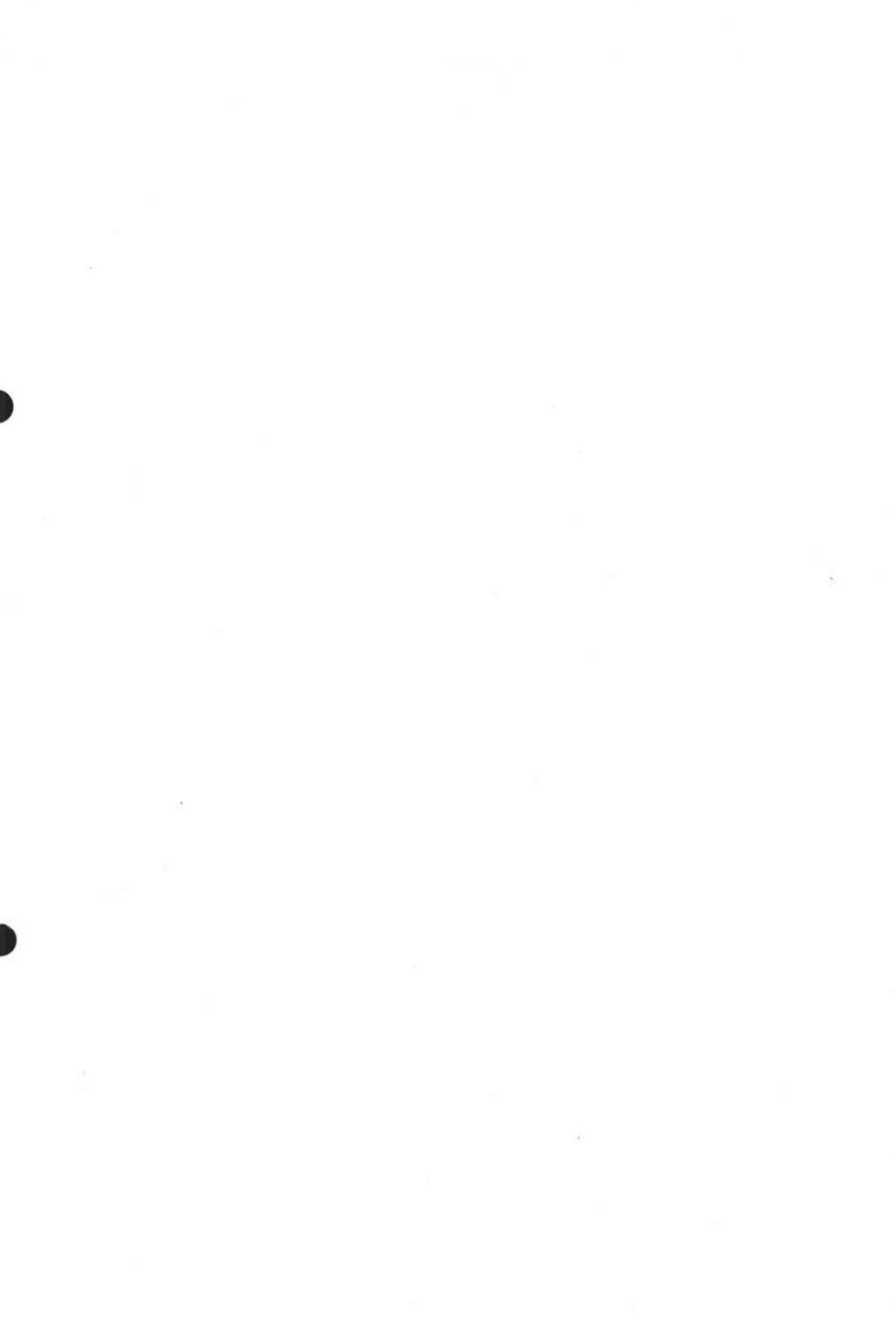
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。





【イメージ・キーワード】
“Value for Human”
バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7
(06) 941-9631

葉文館の新刊川柳書

- ◆購読をご希望の方は全国主要書店または小社へ直接お申し込みください。
- ◆小社へ直接申し込まれる際、「川柳塔の9月号を見た」とご一筆またはご一報頂ければ、送料は小社で負担します。
- ◆最近、川柳句集出版に関するお問い合わせが多くあります。些細なことでも、お気軽に出版部までお問い合わせください。

大阪市浪速区恵美須西2-9-15
葉文館出版株式会社出版部 〒556
TEL 06-634-5548(代)
郵便振替 00950-5-95311

川柳界トップ作家の川柳句集!!
川柳句集 **仁王の口** 森中恵美子
2,000円

あさひ川柳抄 卜部晴美・編
朝日新聞川柳欄秀句とその鑑賞
1,800円

現代川柳の在り方を問う乾坤の一書!
現代川柳ノート 斎藤大雄
1,800円

人と笑い、人と泣く。心に響く人間交響楽
人間彩影記 東野大八
1,800円